
極地の憂鬱 2

鑄金ダラ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

極地の憂鬱2

【コード】

N3668C

【作者名】

鍔金ダラ

【あらすじ】

この『世界』は二つに分類されている。科学を軸に廻る平穏な世界を仮に『表』と呼ぶならば、魔術を軸に廻る殺伐と世界は『裏』と呼ばう。そんな『裏』に彼らは生きる。唯一の肉親を失った陰陽師の少女。そんな彼女を護ろうと動く姐御肌の目の前にとある陰陽師が現れた。時を同じく異常な破壊力を持つ謎の魔術師が出現、少女に猛然と牙を剥いたその瞬間、『世界』は再び動き出す

プロローグ（前書き）

この物語は『極地の憂鬱』の続編となっております。

プロローグ

本当に、嫌な『ヤツ』だった。

本当に、いけ好かない『ヤツ』だった。

代々陰陽師の一族である藤崎の血を引く人間のクセに。

陰陽師としてはどうしようもないほど出来損ないのクセに。

圧倒的に魔力が私に対して劣っていたクセに。

私が一瞬で終わったのに『契約』に一週間要したクセに。

なのに『アイツ』は私を凌いだ。

天才とまで言われた私を、それは簡単な模擬戦だったけれど『アイツ』はいとも簡単に『天才』と謳われていた私の喉元に刃を突き付けてみせた。

実際、実戦でも『アイツ』は強かった。

冷静沈着な状況判断。徹底され、洗練されたスピード重視の戦術で敵を悉く血の海に沈めた。

圧倒的な魔力を有する私でさえ手こずる敵を、どんなに強力な広範囲攻撃を浴びせても殺せなかった敵を『アイツ』は愛刀一本だけで、嘘のように涼しい顔して討ち果たした。

どうして。

どうして絶望的に陰陽師に適さない人間が、天才とまで言われたこの私を凌ぐのだろうか。

どうして『天才』と言われた私があんな出来損ないに負けなければならぬのだろうか。

気に食わなかった。

出来損ないのクセに私より優れた『アイツ』が気に食わなかった。それが安っぽいプライドに縛られているからと知っていても。

第一章 駆け巡る日常と途切れる日常

「でき、アンタと付き合いたい男がいくっぱいいるわけですよ」
「ふん」

「んも、ホントリアクション薄いんだから……」
紅玉市。

都心から四十キロ圏内に位置する内陸のこの街は、県下有数のベツドタウンとして機能している。街全体を挟むように東側を神灯川ホウトウガワ、西側を雪洞川セツトウガワが流れ、紅玉市駅や大型銀行を含む行政施設が集中している中央地区、それを取り囲むように商店街が、さらにそれを取り囲むように住宅地が。という造りになっている。

そんな紅玉市の中心街、俗に『繁華街』と通称されている地区（正式名称は紅玉三丁目）から少し離れた通りを二人の名門・白蘭女学院の制服に身を包んだ少女が歩いていった。

その内の一人、ポニーテールがよく似合う少女・進藤ゆかりはスクールバッグから写真を掴み出すと、隣を歩く少女の眼前にピシッと見せつけ、

「ねえ」

懇願するように、媚びた声を上げた。

が、しかし。そんな進藤ゆかりを前にして、少女は何事もなかったように平然と歩き詰めていた。

黒茶がバランス良く混じったナチュラルなショートヘア。人懐っこそうな黒い瞳。身長一五五ぐらいのわりと小柄でどこにでもいそうな女子高校生なのだが、実は魔法渦巻く『非日常の世界』の住人だ。つまり魔術師、もっと細かく分類するならば陰陽師である。というわけで、残念ながらからお世辞にも普通の高校生だとは言えない少女なのであったりするのだ。

「ねえ〜ってば……。聞いてんの〜？」

彼女・藤崎美鈴は無視を貫き、迷惑ですという表情を崩さない。

フジサキミリス

それでも、進藤ゆかりは言う。

「ほら、み・す・ず！ 三高バスケット部の吉本センパイなだけでさ、どーしてもアンタと付き合いたいんだって！」

「……………」
「吉本センパイなら未来は保証されたも同然！！」

「……………」
「気立てもいいし頭も良いし格好いいし。こんな好条件二度と無いと思うんだけどな……」

「……………」
「てかね、吉本センパイってスゴクモテるわけ。でもさ、アンタに一目惚れしちゃったから他の女の子からの告白全部断ってるんだって……」

「……………」
「アンタと付き合ったためだったら何でもだと、痛だだだだだだ

ッ！？？」

「抓るよ？」

「もふふねってへるはら！！（もうっねっているから！！）」

白昼堂々、美鈴に右頬を激しく抓られたゆかりは両手を小学生のようにバタバタさせて抵抗、それに伴って彼女のスクールバッグが縦横無尽に激しく暴れ廻るが、美鈴はゆかりへの制裁を継続したまま器用に暴れ狂うスクールバッグを回避する。さすがは『非日常の世界』屈指の猛者とでもいったところか。

「ひるひてひるひて ッ！（ゆるしてゆるして ！）」

「いやだ」

「いいいいいいいい ッ！（いたいいたいいたい ッ！）」

次第に喚くゆかりがことなく不憫になってきた美鈴であったが、そこは心を鬼にすることで克服する。

通称『繁華街』は宵闇に沈んでいた。

ほんの数時間前までは学校から解放された学生たちが大半だった『繁華街』は、徐々に仕事帰りの大人たちが目立つようになつてきた。ベッドタウンという街の性格上、昼間に比べて格段に人口が増える、つまり会社帰りのサラリーマンの第一陣が帰宅し始める時間とこの時間は丁度重なるのである。尤も、残業に勤しむ者や『寄り道』する者が多いたために、第一陣よりも、第二陣、第三陣の方が圧倒的に多い。

そんな街に二人の少女は肩を並べて歩いていた。

「美鈴ちゃんがあんなにバイオレンスだったなんて……」

進藤ゆかり。

「私にだって。限界つてやつがある」

藤崎美鈴。

二人は県下有数の名門お嬢様高校・白蘭高等女学院の制服を身に着けている『お嬢様』なのだが、二人の息はすっかり上がっていた。もちろん、原因は先程勃発した『戦闘』である。

進藤ゆかりは『戦闘』で負傷した自分の右頬を労るようになすりながら、

「女は顔が命なのに……」

「ゆかりが悪い」

「もうっ！ 美鈴ちゃんったら冷たいんだからっ！
ゾゾツと。」

瞬間的にゆかりの気色悪い猫撫で声が美鈴の全身、爪先から髪の毛一本に至るまで、最凶の怖気となつて駆け抜けた。

「なんてね、ちょっとカワイ子ぶつてみたりい　　って怖ッ！！
美鈴ちゃん謝るからそんなに殺気立った目で拳をワナワナさせな

いで!!」

至極残念そうに美鈴は拳を解く。

「ゆかり。その『お節介』なんとかならないの?」

進藤ゆかりの趣味は『恋人斡旋』である。

世間的に白蘭高等女学院に通う生徒は人気が高いらしい。

それを利用して、どこからともなくゆかりは白蘭高等女学院の一生徒とお近付きになりたい(ゆかり曰く、大抵街角で一目惚れというパターンが多いらしい)男の写真を集め、その男が狙っている生徒にゆかりが接触、クライアントである男と一回逢ってみるよう勧めて、了承を得ると、事が上手く収まり易くなるようなムードのいい場所をセッティングする、という結婚相談所ならぬ『恋人相談所』を運営している。これを完全に『趣味』^{ビジネス}として確立したゆかりは現在、その範囲を白蘭高等女学院から紅玉市全高校へと規模を拡大しようとするのである。

「いつか、刺されるよ?」

「ハッ! 自分の命が惜しくて商売なんて出来やしないわ」

「エネルギーの使い道、間違ってると思うのは私だけ?」

「アンタだけ」

ひとまず会話を終了させて、二人は歩く。

二

「で。どーしてこうなったの?」

舞台は所変わって路地。

それも裏路地としか言いようのない、コンクリートとコンクリートの根元。つまり繁華街に立ち並んでいるコンクリート製の高層オフィスビルとビルの人気全くない谷間に藤崎美鈴と進藤ゆかりはいた。

なぜそんなところにいるのか。

「ゆかり。ゆかりが『ここ通った方が近道だからこつち行こ?』なんて言うから。責任、とって」

「しょうがないじゃん」

美鈴とゆかりを八人の少年たちが取り囲んでいた。しかも八人が八人、そろいもそろってバタフライナイフなど、鉄パイプだの、警棒など、スタンガンだの、催涙スプレーだの。多種多様な得物を得意気に煌めかせていた。

「どうすんの?」

「どうすんのかって美鈴……、どうしようっか?」

少年たちの目は血走っている。

彼らが握る得物は、全て殺人に使用できる物ばかりだ。しかも警棒には細かい傷が無数に走り、バタフライナイフを扱っている少年の手付きはシロウトには見えない。おまけに鉄パイプには、僅かに前回使用したとき拭い切れなかったのだろうか、乾燥した血がこびり付いていた。

「ゆかり。身に覚えは?」

「それを聞く?」

「そうね」

どうせゆかりの『趣味』^{ヒジネス}で逆恨みされたのだろう。ゆかりに依頼したはいいものの、女子からフラれた男の差し金なんだろうかと、美鈴は適当に考えてみる。

「ゆかり。ゆかりが原因。交渉するなり命差し出すなりなんとかしなさい」

「そう言ってもさ……」

そうこうしているうちに、ジリジリと包囲網が狭まってくる。美鈴にとって、この程度の相手なら一捻りだ。この場から動かなくても八人を瞬殺できる自身がある。しかしそれはあくまで『非日常の世界』の住人『藤崎の陰陽師』藤崎美鈴としてだ。もちろん、基本戦闘技術として体術は習得済み。さすがに『立ち回り』となるが、

無傷で事を片付けられる自信はある。

(やっちゃっても構わないけど。変な噂が立つのは避けたいかも)
とか何とか考えているうちに、

オラッ！ と、背後から怒号が飛んだ。

爪先を軸に、即座に美鈴は方向転換。振り下ろされる鉄パイプの軌道を見切り、上体だけをずらして躲すと、左拳を握り締め、顔面目掛けて一気に撃ち出した。グシャツ、と。生肉をコンクリートに落としたような生温い音と共に鉄パイプがカラコロとアスファルトを打つ。

それが、合図となったのか。

誘爆されたように一斉に、残りの七人が襲いかかった。

全方位からの集中攻撃。

だが、そんな状況に置かれていながらも関わらず、美鈴は少年たちの矛先がゆかりに向いていないことに安堵していた。

「メンドくさい」

吐き捨て、美鈴は片足に魔力を集中させようと

(え…？)

唐突に、それは見知った『コチラ』の気配。

スパンツ！

と、心地良い軽音が轟き、催涙スプレーを握っていた少年が吹っ飛ばされた。

「あゝ怖ええ」

乱入者は笑っていた。

長身。ダークスーツに、葬式に着用していくような黒ネクタイをだらしなく締め、黒いサングラスに高級そうな黒い革靴が地面を掴んでいる。緑色の竹刀袋を背負い、頭部は染めることなく短く切り揃えられた短髪。一見真面目なサラリーマン風にも見えるが、身体からは甘ったるい香水が鼻を突き、両腕首には流線型の装飾が施された銀色のブレスレット、右親指と左人差指にキラリと輝いている鬨髯を象った銀色の指輪が『サラリーマン風の男』という言葉をぶち壊しにしていた。

「水瀬、光輝（ミナセ、コウキ）……」

「相変わらずバイオレンスなんやな」

「水瀬に言われたくない」

「あのう……」

一瞬で蚊帳の外に追い遣られた進藤ゆかりが申し訳なさそうに、やや上目遣いで青年を見上げて言った。

「どちら様ですか？」

「オレ？ ああ、コイツの男」

「水瀬。死にたい？」

「冗談やて。ま、詳しい話はコイツら潰した後で。な」

「退陣人世」

空間をドーム状の白い結界が敷地全体を覆う。

封鎖型結界『退陣人世』とは、一定時間『何故か分からないけどここに近づいちゃいけないような気がする』と思わせる、陰陽師伝統の人払い結界である。

「相変わらずやね。　　って言いたいけど、……まあ、無理もないな」

紅玉市繁華街から数一〇キロ先の市立公園。　紅玉市の『ニュータウン』と通称される地区に新設された児童公園に藤崎美鈴と水瀬光輝という青年はベンチに座っていた。普段は親子連れで賑わう公園も、彼ら以外の人間は居ない。『退陣人世』という人払いと結界が展開されているのだ。『非日常の世界』の住人から言わせたらならば、他人がこの公園にいるという事態の方が異常と口を揃えて言うだろう。

「兄貴が死んで、お前も辛かったやろ？」

竹刀袋を降ろして、青年は立ち上がる。

「違う。清々し、た」

青年はからかうように笑って見せて、

(ウソこけ)

と、毒気付いた。

一言で表すならば、今の藤崎美鈴は異常だった。

本来の『藤崎の陰陽師』藤崎美鈴は『スケープゴート完全逃亡』の一角として、普段の寡黙さに似合わずあらゆる敵をその圧倒的な力で蹂躪してきた。敵を葬るためには街ごと焼き払うことだって厭わない、その好戦的な性格、戦闘を快楽と受け取れるだけの度胸、そして天才的な才能。その全てが混ざり合い、強力で好戦的な『天才』陰陽師・藤崎美鈴が誕生したのである。その戦闘能力は流派を問わず間違いなく現代の陰陽師で最強クラスに位置している。

(それが見る影もない)

そんな彼女が変わった。

さっきだって、普段の彼女なら間違いなく魔術で彼らを焼き払っていたことだろう。

彼女は、変わった。

原因は間違いなく、唯一の肉親である弟の死だ。

藤崎美鈴には双子の弟がいた。彼もまた、美鈴に劣らず優秀な陰陽師だった。

優秀な陰陽師だったが、美鈴とは決定的に違う『天才』だった。

双子の姉・藤崎美鈴が『先天的な天才』ならば、

双子の弟・藤崎雄也は『後天的な天才』だった。

そんな『天才』も二ヶ月ほど前に死んだ『ようだ』。

何故『ようだ』かと言えば、彼は絶望的な戦局を覆すために『神』の召喚を行った。故に彼は『神』が下界に降臨するための『媒体』として彼を構成していた存在全てを『神』に吸い取られたのだ。存在全てを吸い取られると、当然死体など残っているわけなく、結果として生死確認が不可能なのである。もちろん、存在全てを吸い取られた人間が生存している、そのような状況はありえないのだが。

「じゃあ『コイツ』はいらないんか？」

緑の竹刀袋を美鈴の前に差し出す。

「こく、とつ……？」

「ウチの修復班が発見したん。『神』を召喚するために自身を『媒体』した場合、どうやってても死体は残らんからな」

あの戦いは想像以上に凄惨なものだった。

戦闘で紅玉市の半分が消滅し、有らねばならぬ山が平地に変わっていたり、平地だった場所には山脈が作られていた。そんな壊滅的な被害を被っても『日常の世界』の住人たちが『そのような事態』を誰一人として把握していないのは、東洋陣営の天才宰相の命により派遣された『隠蔽班』と『修復班』の努力の賜だった。彼らは街全体に特殊な結界を形成し、戦闘があつた痕跡と破壊された人や建

物、人々の記憶を一夜にして修復させたのである。

「俺の知りあいが修復班の班長やっててね、これはソイツが発見したん。これほど見事なワザモノを戦闘に使うヤツはお前の兄貴しかないしな」

「……、ウザイ」

「ああ？」

「下手くそ。関西弁」

「仕方ねえだろ、彼の関西出身の親父、関東出身のお袋の会話きいてりゃこーなるわ」

父親が話す関西弁、母親が話す江戸言葉。

それが解け合い混ざり合い。どっちつかず中途半端言語しか使えない水瀬にとって、微妙な口調と口癖が若干のコンプレックスだった。

「それ、……」

「？」

遠慮がちに、美鈴は竹刀袋に目を向けていた。

「ん、ああ」

竹刀袋を美鈴に渡して、思う。

(こりゃ仕事の依頼どころじゃないな……)

命令書を懐に感じながら、水瀬は曖昧に笑って見せた。

四

水瀬が去った後、美鈴は受け取った緑色の太刀袋をしばらく眺めて、口を結んでいる紐を解いた。

中身は、傷一つ無い磨き抜かれた鞘に収まっている日本刀。柄も、鍔も、全てが漆黒の刀。

それは父親の遺品でもあり、双子の弟の遺品でもある。

「嫌い」

公園のベンチ、人払いの術式・退陣人世は既に解除されているので、小さな子供から犬を連れて散歩中の老人まで、老若男女が目の前を行き来している。

「大、……嫌い」

呟きは、消える。

行き交う、何も知らない『日常の世界』の住人たちの弾んだ笑い声に、少女の呟きはあまりにも小さすぎる。

五

長きに渡り、激しい大昔の戦い。

かつて、万物の王だった『ラリアス』は、自身が創造した大地に倒れ伏していた。

かつての王を打ち倒したのは他でもない、『ラリアス』が創り出した『ケライ』たちだった。

彼らは圧倒的な『ラリアス』の『王たる力』を、知恵と数で打ち負かしたのだ。

無様にも、大地に転がる『ラリアス』は考えた。
復讐を、と。

自分の身の回りの世話をさせるためだけに創り出した『ケライ』たちを必ずや討ち滅ぼす、と。

『ラリアス』は、固く誓った。

しかし、肝心の身体がもう使い物にならなかった。

それは『王たる力』でも修復は困難で、このままでは絶命と存在の消滅は免れない。

だから『ラリアス』は自身の身体から『王たる力』のみを分離させた。

『王たる力』に、『ケライ』を確実に滅せ。
そう、キャンセル不可能な絶対殺戮命令を刻みつけて。

第二章 巻かれただけのロザリオに興味はない

オランダ・バーク。

北海沿岸に位置するオランダ王国の都市であるバークは、アムステルダム、ロッテルダムに続くオランダ第三の都市だ。街には国会議事堂、総理府、外務省などの政府系機関だけでなく各国大使館に、国際司法裁判所や国際刑事裁判所などの国連機関も多数置かれているため重要な街である。

また。

この街には『非日常の世界』にとっても重要な街だった。

この街には『非日常の世界』 特に欧州で強大な力をもつ【世界魔術文明保存機構（通称・西洋陣営）】が本部を構えていた。本部の所在地は、オランダ女王の居である『ハイス・テン・ボス宮殿』敷地内の地下空間。当然オランダ王家はこの事実を把握していない。

この『ハイス・テン・ボス宮殿』は一六五四年にフレデリック・ヘンドリックとその妻アマリアによって築かれた。その工事に『日常の世界』の住人を装って携わっていた一人の魔術師が面白半分、オランダ王家に内緒で高大な地下空間を造ってしまったのだ。しかし、彼の目的は造ることだけだった。彼はただ自分の能力を測りたいために、無計画・無制限、限界までその力を遺憾なく発揮した。その結果、ただだっ広い地下空間が完成してしまったのである。彼は自身の力に興奮するが、それも長くは続かず、直ぐに彼はこの地下空間の使い道に悩んでしまった。広大な地下空間を造ってしまったのはいいものの、どうしていいかその処理に困ってしまったのだ。自身の住居にするにも広すぎ、かといって壊すにも惜しい。それを耳にした【世界魔術文明保存機構最高意志決定議会】我が主と共に

（インマヌエル）『議長、つまり時の【世界魔術文明保存機構】最高権力者がその魔術師から地下空間を貰い受けると、欧州各地に散らばっていた部署部門を一カ所に集め、本部の原型が完成したのである。』

少年は、非常に迷惑していた。

「気分は、どうかね？」

「……」

「どうした？」

「いや、三〇分に一回のペースで来て貰っても困るんだけど……」

少年は迷惑そうに語り、

「……そんなに見に来てるかね？」

「うん。美少女なら歓迎だけどじいさんはウザイ」

断言された、老紳士は苦笑する。

「時に『世界崩壊』よ」

「ん？」

『ラストオーダー世界崩壊』というのは少年の名前である。

科学に支配された文明社会に生きる者たちを仮に『表』とするならば、彼らは『裏』の住人である。その『裏』とはつまり、科学ではなく『魔法』を中心にして動いている世界だ。ロールプレイングゲームではお馴染みの『火球を飛ばす魔法』とか『雷を落とす魔法』とか『相手を一瞬にして死に至らしめる魔法』とか『敵から受けた傷を回復させる魔法』などなど、異世界住人たちが行く手を遮る魔物共々、世界を滅ぼそうとしている人間とその手下たちを駆逐するために使用するあの『魔法』は現実世界でも確かに存在するのだ。本来、魔法は人々の身近に存在した。しかし、あまりにも科学文明

が発達したために、人々は『古の魔術文化』を捨て、それどころか『魔法は悪しき異端文化』と弾圧され、人々は魔法の存在を記憶や文献から消し去ってしまった。そんな時「このままでは先祖代々承ってきた魔法という『文化』が人類から消えてしまう」と。危機感を覚えたいくつかの魔術師のグループが『魔法文化』を保護しよう創設した組織が【世界魔術文明保存機構】・【世界呪術文化保護連盟（通称・東洋陣営）】なのである。

魔術は現代でも東西南北関係なく存在している。それこそヨーロッパから、アジアから、南北アメリカから、オセアニアから、アフリカまで。過去に『日常の世界』に魔法文化が存在していたことを示す痕跡だつて見られる。痕跡の例を挙げるならば、盆踊り。盆踊りとは『人々』が『櫓』を中心にして『輪になり踊る』物だ。これを魔術的観点から見ると、盆踊りとは『術者たち』が『精霊が下界に降臨するための目印である櫓』を中心にして『精霊の降臨を願つて輪になり踊る』物、となる。しかし『魔法文化が排斥されてしまった』現代ではその『精霊降臨の儀式』だった盆踊り本来の意味・趣旨が完全に風化、ただの夏の風物詩となつてしまったのである。

閑話休題。

古来より『魔術』はヨーロッパを中心とした西洋世界を中心に発達してきた。西洋世界では太古から、それこそ聖書の時代から魔術は人々の間で根付いており、聖書に登場する不可思議でロマンに満ちた逸話はほとんど魔術が関わつているといつても過言ではない。

そんな長い歴史の西洋魔術の一つの伝統として『魔法名』というモノがある。これは西洋魔術の『物の名前を正確に理解していればその名前の持ち主の力を一〇〇パーセント引き出せる』という思想から来ている。この思想は西洋魔術にとつては非常に重要で、魔術師が自身の『真の名』である『魔法名』を名乗るのと名乗らないのとではその魔術師が使用する魔術の威力も違つてくるのだ。つまり『魔法名』を名乗つたときの西洋魔術師の力は名乗る前の六割七割増し、故に西洋魔術師が『魔法名』を名乗ればその時点で本気の確

実に敵を殺すという証だということは『非日常の世界』暗黙の了解なのだ。

「まだその名に慣れぬのか？」

「まあな。『あっち』じゃ『魔法名』なんて習慣なかったからな」

「じき慣れる」

「そうだな」

老紳士はゴホンと咳払いを一つ。

少年は溜め息を詰まらなそうに吐いて、

「時に、ラストオーダー世界崩壊よ」

「組織になんて飼われねえぞ？」

ラストオーダー世界崩壊は老紳士を一刀両断。両断された老紳士は即座に顔を歪

める。

「……何故、解った？」

「そりゃあな、一日何十回も聞かされりや、な」

「むむむむむ……」

「老人が唸ってもキシヨイだけだな……」

そう言った後、ラストオーダー世界崩壊は腕を組んで一言。

「慣れって恐ろしいな」

—

「ほい。依頼書」

藤崎美鈴は帰宅途中、水瀬光輝と道端で『バツタリ』遭遇した。

『バツタリ』と言ってしまえばそれまでだが、水瀬光輝という人間から判断するに、美鈴は偶然の産物だとは思えないでいた。

「これ。何？」

「だから、依頼書やて」

文書化した企画案を入れておくような、大振りの茶封筒を水瀬か

ら受け取る。封筒の右端には東洋陣営が公式文書に使うような捺印がある。美鈴はその茶封筒に目を落としながら、

「爆弾？」

「アホ。印を見る印を。【世界呪術文化保護連盟】公式文書に押される印や。お前ならわかるやろ？」

「それくらいは分かる。でも。持ってきたのが水瀬光輝。いつ何時爆発するか分からない」

「オイ」

緊張感を抱きつつ、美鈴は一度封筒を振り、耳を付けた。水瀬がいい加減にしる言わんばかりに頭を抱えて「そんなに俺は信用ないんかい……」とか何とか言っているが、残念ながら美鈴にはそんなことに構う気などなかった。

「爆発。しない？」

「しねえからさつさと開けるや！」

疑心満々、美鈴はベリベリと慎重に封を切る。

(……………?)

中身は書簡一枚だけだった。

その書簡には機械的な印字が多数打ち込まれていて、美鈴は流すように読んでいき、

「魔女？」

不意にその『非日常の世界』で聞き慣れない単語に引っ掛かった。

「魔女って何？」

「『魔女』は『魔女』や」

「魔女って。あの魔女？」

「たぶん『魔女狩り』の魔女じゃないと思うけどな」

魔女狩り。

十二世紀以降、教会の主導によって行われ、何万人もの人命が犠牲になった一種の迫害運動である。元々、欧州各地で、民事に対する揉め事は、権力者ではなく、民衆が自発的に行う民衆裁判によって治安を維持する伝統がある。その中で暴力や窃盗と並び『魔術に

よって出た害』も裁きの対象となっていた。しかしそれは特別重い刑が科せられるわけでもなく、他の犯罪と同じように被害に応じた刑が科せられ、しかも同じ魔術でも良い目的に使用されると考えられてきた『白魔術』は裁きの対象になっていなかった。しかし、中世にはいると様々な紆余曲折を経て教会社会によって悪魔が悪の業を行うことが信じられるようになった。このような考え方は教会以前から信仰されていた民俗伝説や、十字軍に従軍した兵士たちが東方から持ち帰った思想や文化、それらが融合して生まれたいが定かではない。民衆は『悪魔に取り憑かれた』と思われた人々を捕らえては民衆裁判で断罪していった。

「魔女なんて、山ほどいる。そんなこといったら陰陽道という『魔術』に関わってる私だって『魔女』」

「んまあ、そうなんだけどな。今回指す魔女はそう言う魔女じゃなくて『魔女』なんや」

「意味不明」

近年の研究で、魔女狩りは中央教会主導の異端審問が活発化、それによって各地の地方教会主導によって魔女狩りが行われていたと考えられてきた。しかしそれは様々な研究によってその見解は覆されることになる。有名な一説を上げれば、魔女狩りとはとある国々の民衆の間で始まり、やがてその民衆間で取り決められた仕組みが欧州各地に広がっていったという。それはある異端審問所に、魔術を使用した罪で訴えられた二人の女性に対して、異端審問所はこの訴えを退けたという事例からもわかる。

「確かに『魔術を扱う女』である美鈴ちゃ

「名前では呼ばないで」

水瀬は不満そうに表情を若干暗くして、

「……藤崎は、確かに魔女さ。ただ今回のターゲットは名称不明だから『魔女』ってコードネームを俺ら東洋陣営が勝手に付けただけなんや。あまり気にすんなや」

「話が、見えない」

「だろうな。とにかくこの一枚に概要全て書いてあつから」
水瀬光輝はフラリと歩き出し、最後にこう言った。
「……とにかく。世界屈指の運び屋『完全逃亡』^{スケープゴート}に依頼だ。内容は依頼書に明記してあるから。いい返事、期待してるで」

二

会社帰りのサラリーマン軍団を掻き分け、紅玉市中心部を抜ける。高速道路の高架橋下を潜り抜け、大型トラックが巻き上げる粉塵に一度噎せた。ガード下で焼き鳥を片手に大笑いしているハゲオヤジたちを横目で見ながら、格安ビジネスホテル隣の地下飲食店街への階段を下り、酒臭い居酒屋街を両脇に最深部へ。この地下飲食店街は九十パーセント以上居酒屋なのだが、ここだけは違う。最深部には小洒落つつも廃れたといった感じの小さな喫茶店があるのだ。ここは学生が寄り道するようなどころではない。むしろ、コーヒーマニアとか創業当時からマスターを知っているコアな常連を専門に扱っている、そんな店だ。

ボロボロのドアに、同じく色が剥がれて朽ちつつある看板には『クラッチ』と書かれている。実際、初見では文字が書かれていることすら確認することは困難なのだが、店名を知っている美鈴からすれば、なんとなく朽ちつつある文字が『クラッチ』と書かれていることが理解できる。

(相変わらず、ボロなんだね)

カラカラと古めかしいドアベルを鳴らして店内に入る。ドアを閉めるとそこはまるで別世界、どういふ防音設備を使っているのか分からないが、外界の喧噪が嘘のようだ。内装はやっぱり古ぼけていて、壁紙は剥がれ落ち、店内の電灯はチカチカと点滅している。装飾品が一切無い柱は焦げ茶色で見る者に年代を感じさせ

る。喫茶店というより、古びた写真館や骨董品店のような印象を受ける。

「こんな時間に、珍しいな」

美鈴は迷うことなく自分の指定席であるカウンター最右席に陣取った。

それから改めて店内を見渡してみた。人の気配はしないし、客らしい姿は一切見当たらない。どうやら貸し切りのようだ。マスターには悪いがよくこの店を経営してられるなあと、どうしても思う。

「まあ、ね」

「美鈴はブルーマウンテンだったよな」

テノール歌手を彷彿させるダンディーな渋い声だけど、ぶっきらぼうだけどどこか面倒見がいい近所のオジサンのような声色のマスター。理屈とか理由とか関係なくて、美鈴はいつしよにいてどこか安心するような雰囲気や常にかかっているマスターが好きだった。

「おう」

「相変わらず、客少ないね」

「余計なお世話」

「コーヒー豆を砕きながら突っぱねるように、やけくそ気味に、

「今更つまらねえ喫茶店なんかはやらないんだろ」

「物好きしかこない？」

「美鈴みたいなひん曲がった人間しか来ないんだよ」

マスターはただ皮肉的な笑みを零しながら、奥に置いてある古めかしいラジオのスイッチを入れた。ラジオの砂が混じったような感じの音が妙にこの空間とマッチしている。安心感と充実感に包まれ、マスターのコーヒーを待っている後ろからガサツと音がして、

（ガサツ……？）

「よっ」

一瞬でも心臓が停まってしまったかもしれない。迷惑そうに美鈴は茶短髪を睨み付けた。

「……ユウ先輩」

本名、神田祐二。

美鈴の死んだ弟の先輩で、この古びた喫茶店・クラッチ（実はなかなかの名店で数多くの常連さんを抱えていることを美鈴は知らない）を紹介してくれた人だ。県立・御守高校のボクシング部エースだった人でそれが仇となったのか、街の不良三十人を病院送りにして見事一発退学を食らってしまった。『その筋』では有名人で、現在は家業である魚屋を継ぐために修行中らしい。

「お前、ホントにこの時間来るなんて珍しいな。なんかあったのか？」

「なんもないです。先輩」

美鈴の隣に神田祐二は座る。よく見ると神田の手にはコーヒークップとバッグが握られていた。どうやら初めからこの席に来るつもりだったらしい。

「ああ悪かったな。いや、裏での生活が長くてなあ」

「冗談みたいに神田は語るが恐らくこれは冗談ではない。世界は違うものの、彼も『裏』の住人なのだ。

「ってそうだ。お前話をずらすなよ」

「何のこと、ですか？」

「こんな時間にここ来るなんて珍しいじゃねえか？」

「……　　そうですか？」

「なんだその間は？」

「さあ？」

「……お前さ。一ヶ月くらい前からマジでおかしいぞ？」

「そんなこと。ないです」

美鈴は両手でカップを包み込むように持ち、一口含む。

「ユウ先輩こそ。何かあったんですか？」

「俺はこの時間の常連なんでね」

「初耳、です」

「おこちゃまが来る時間じゃないんでね」

「先輩だって。私と三つしか、違わない」

「俺は家継ぐために修行してんの。お前とはレベルと器が違うのよ」
「……」

「黙るなよ、やっぱお前ヘンツ！」

「変、じゃないです」

「なんかあつたる？」

「ないです」

「変なことが起こったとか？」

「ないです」

今日一日はいつも通り。ぬるま湯に浸かりきつたような平凡な日々だった。朝、朱雀に叩き起こされて朝ご飯をかき込みダツシユで学校に。何とか遅刻せずに済んだと思っていたら宿題忘れて数学教師に怒られた。それから適当に同級生と昼ご飯を食べ学校は課外なしで終了。家に帰ろうと思ったら進藤ゆかりに拉致されるように無理矢理繁華街を歩かされていると、会いたくもない水瀬と再会して依頼状を受け取った。そのまま家に帰るかどうか思案した後、なんかこのまま帰るのも忍びなかったのでクラッチへ行こうと思いい立ち、クラッチのコーヒーを飲んでいるという今に至る。

「平凡で、代わり映えのしない一日、でした」

「嘘だな。なんかあつただろ？」

「ないです」

即答する。

「嘘だな。じゃあ、……、ん？」

神田は手の動きを止めた。その手はポケットに行き、再び美鈴の前に現れた時にはしょっちゅうテレビでコマーシャルされている最新型の携帯電話を握っていた。

「ツチ」

神田は携帯を開くなり、舌打ち。

「マスター、ご馳走さん」

「いいんか？」

「親父から呼び出し、食らった」

コーヒーを煽るように一気に飲み干す。

「二四〇円」

「ほいよ」

神田はポケットをゴソゴソと漁って、握り拳をカウンターテーブルの上に置き、開く。ジャラジャラと音を立て、小銭がカウンターテーブルに散らばった。マスターはそれを一枚一枚丁寧に勘定していく。

「んじやな、美鈴」

手を挙げる神田に美鈴は小さく頷く。

と、マスターの声。

「おい、ユウ。二〇円少ないぞ!？」

「お、ワリい。最近金穴で、……な。マスター、二〇円」

ポケットから十円玉二枚を出してカウンターテーブルの上に置くと、駆け足気味で神田祐二は古びたドアベルを鳴らした。

三

同時刻。

紅玉市・繁華街。

とある有名企業のオフィスが入った高層ビルの屋上。

雲一つ無い空。頭上に降り注ぐ星の光は不気味に見えるほど輝いている。

「久しぶりね」

赤銅色の豊かで艶のある髪を頭のでっぺんで縛り、細かい乱れなご一切気にせず豪快に下ろしている。金色の双眸に、口に煙管。引き締まった、現役トップモデルでも敵わない抜群のプロポーション。だが纏っているは羽衣のみ。腰回りと胸元、双方ともさらりと軽く巻いているだけでかなりきわどい部分まで大胆に露出されており、

しなやかな小麦色の肌が覗いている。

「相変わらず、エロいカツコしてんなあ〜」

水瀬光輝は、冗談めくと笑う。

「美鈴に手、出してたら私が殺すわよ？」

藤崎美鈴の契約者『朱雀^{スズク}』はチリチリと背後で火の粉を撒き散らし、金色の瞳が目の前の青年を睨み付けていた。

「出してないって〜。出してない。出したら俺はもうこの世にいないやろ？」

「それも、そうだったわね」

そう言いつつも、朱雀の背後では依然として火の粉が弾け飛んでいる。水瀬は苦笑しながら、

「んで。俺に何の用や？」

「強いて言えば。美鈴にちよっかい出さないでもらえる？」

「ちよっかい？」

「あの子の精神が不安定だったことぐらいアンタはちゃんとわかってるでしょ？」

水瀬は苦笑を引っ込める。

「まあ、な」

「たった一人の肉親を『あんな形』で失ったのよ。『陰陽師』としては失格だけど、まだ美鈴は十六歳。一人の『人間』としては当たり前前」

水瀬光輝はクルリと朱雀に背を向け、朱雀の言葉を遮るように言った。

「何だかんだ言っつて、大好きだった兄貴が死んだんだしな」

朱雀は僅かに頷いて、沈黙を守る。

「十六のオンナノコか。思えば、今まで美鈴ちゃんをそんな感じで見ただことなかったな」

「『当代陰陽師最強の攻撃力を誇る』とか『天才陰陽師』とか『神童』とかそんな感じでしか評価されなかったからそれも仕方ないわあの子だっつて自分の才能の底が見えてないんだから。最も、雄也に

とつては嫌味にしかならないけど」

そんなことはどうでもいい。朱雀は静かにそう呟いて、

「事が収まるまで美鈴に下手な刺激を与えないで頂戴。『完全逃亡』^{スケープゴート}」

も雄也たちが居なくなつたからもう成り立たない。世界はそれを理解しているから美鈴には悪いけどもう『完全逃亡』^{スケープゴート}は廃業」

「それがなあ〜」

困つたように、水瀬は朱雀に背を向けたまま、

「もう『完全逃亡』^{スケープゴート}に依頼してもうた」

「は？」

「宰相様のご命令でな。数十分前に東洋陣営として正式な依頼書を美鈴ちゃんに渡したんや」

「……お断りよ」

水瀬は朱雀と顔を合わせる。

「それは、美鈴ちゃんが決めることや」

「私の話、聞いてなかったの？」

朱雀の右拳に炎で覆われる。

「俺は宰相様の命令で来たんや」

チラチラと、細かい無数の羽音が水瀬光輝の周りを周回し始めた。

「いい度胸じゃない。私の炎に対抗しようつて言うの？」

不適に朱雀は笑うと、拳の炎が挑発するように跳ねた。

「確かにな、無謀極まりないけどな」

羽音はやがて大きく、周回している『何か』はやがて輪となる。

「燃やすだけしか脳がないヤツよりは使い勝手ええで？」

朱雀が、地面を蹴ろうと、片足に力を込め、跳躍しようとする。

その前に。

「小賢しい！」

彼女の拳は頭上を殴っていた。

殴られた『何か』が細かい灰となり、ポロポロと、まるで粉雪のように朱雀に降り注いだ。

「そう。俺らは小賢しい。平安時代に『禁術』とされた外道たちの

集団やからな」

正面を向く朱雀の眼光炯々は水瀬を映していなかった。

「数々の弾圧をかいぐぐって生きてきた『水瀬流』を甘く見ない方がいいで？」

途端。

朱雀の眼前、それも懐に飛び込んでいた水瀬光輝のアッパーカットが朱雀の喉元に向かって突き進んでいた。

「ッ、」

爆転で水瀬のアッパーカットを躲す。

「さすが」

水瀬はニタリとする。

「この、」

間合いは大きい。否、間合いを大きく取られたのである。

「ちよこまか、とッ！」

手に炎の小刀を出現させ、躊躇することもなく腕を振った。握り直すことなく、飛び出した揺らめく炎の小刀は空中を滑走し、水瀬一直線に飛んでいく。

「ま、」

パスン。

「それくらいは捌けるで？」

黒い影が炎の小刀の進路に進入し、強引に打ち落とした。無論、黒い影は炭となり、丁度相殺されたような形である。

「ま、全力を出せないアンタと戦ってもなんもフェアじゃないしな。俺はここで退かせてもらうで」

第三章 滴り落ちた鮮血に叶わぬ願いを込めた

少女の手首に、銀のブレスレットが光る。

医療用ディスプレイに映し出されている細い波が小さく跳ね、同間隔で個室全体に無機質な電子音が木霊している。その木霊は少女の生命そのもの、そして少女が『生きています』ということを示す唯一の意思表示でもあった。

少女は、自力で呼吸できない。口から鼻にかけて付けられている人工呼吸器が生命維持の切札で機械に呼吸を『させられている』のだ。その人工的な『酸素吸入』と『二酸化炭素排出』のたびに透明なマスクが白く曇り、また透明を取り戻す。

彼女が寝ているベッドの両脇、上部は医療用機械が占領し、その全ての機器から伸びている何十本もの電極は全てベッドに横たわる少女に繋がっている。まるで、それは少女を永遠にこの病室に拘束するための拘束具しているように思えてならない。

少女の顔は蒼白で、まるでそれは能面のように。感情が全く籠っていないし、僅かな動きもない。

彼女は、一年前からずっとこの個室病棟の一角に『暮らして』いる。この病室の窓から、近くに繁華街の高層ビル群が望めが、彼女は一回もその風景を目にしたことはなかった。それどころかこの病室の情景にすらその軽薄な瞳に映ったことはない。

電子音が、また響く。

そんな彼女を見舞う親族はいない。

皆、少女の容態に見切りを付けて誰も見舞いに来ないのである。

が。

カツ、と。

寂しい病室のタイルを脊が掴む。

長い銀髪に平安貴族男児が着用する狩衣。腰には飾り太刀が備えてあって、頭部には烏帽子が精悍に載っている。立派な青年がドア口に佇んでいた。彼は、ベッドに近付き、静かに静かに横に立つ。

「雄也が、死んだ」

銀髪の青年は、動かぬ少女に語りかける。

「悪かった。雄也を、引き留められなかった。言い訳がまし

いが、努力はした。儀式に不可欠な俺の太刀に、七年前から組み立ててた『物質吸引』と『再構成』の術式を刻み込んだんだか……、

無駄骨だったらしい」

モニターに波打つ、冷静な心拍数。

「ヤツは……、最後までアンタのこと、思ってた」
どうであれ。

藤崎雄也は死んだ。

圧倒的不利な戦況を打開するために、傷付いたその命を降臨させた『神』のために燃やし尽くして、死んだのだ。

「お前は知らねえだろうが、アイツは陰陽師で『コッチ』の世界の人間じゃねえんだ」

藤崎雄也は死んだ。

最後に、とある女魔術師に幻影まで抱いて。

「アイツはお前を『こんな目に』遭わせた魔術師を探すために『完全逃亡』^{ケイフゴート}って運び屋まで始めた」

藤崎雄也は死んだ。

残された者の悲しみの大きさも、彼が周囲に与えていた『影響』

も考えずに。

「『中立で優秀な運び屋・完全逃亡』^{スケープゴート}ってブランドを確立すれば西洋陣営からも東洋陣営からも個人からも依頼が舞い込む。依頼には必ずちゃんと世界情勢を表す有力な情報が付いてくる。東西関係なく、な。それにな、両組織のお偉方の仕事を引き受ければコネも作れるし、突っ込んだ情報収集もより楽になる。アイツはあの魔術師を探すために『完全逃亡』^{スケープゴート}を開業したんだ。テメエの姉と、その相棒まで巻き込んでな」

語れども、返答はない。

ただ、無機質で単調な電子音が空間いっぱい反響するだけだ。

「悪かった。 斉藤、結衣」

青年の口から、その言葉は無意識に溢れ出る。

「お前の傷の治癒は雄也と俺がやった。外傷は完璧に治癒してあるけど、陰陽道には外傷を回復させる術式はあっても、精神を回復させる術式はねえんだ。アイツもやったんだけどな、……悪い」

そこまで言って、銀髪狩衣の青年は慌てることなく印を結んだ。

「斉藤さん、入りますね」

病室の引き戸が開かれ、ワゴンを押す看護師が入ってきた。ワゴンには銀色のお湯が入ったボールとタオルなど、たくさんの医療器具が乗っている。

《わりい、な》

存在と気配隠蔽の術式・不見の術。

《また、来る。俺じゃ役不足かもしれないけど、雄也の、代わりにな》

「斉藤さん、今日の具合はどうですか？」

ワゴンに積まれたタオルをボールの中に浸し、看護師は力強く絞った。

夜が、深まる。

夜中の二時を過ぎ、さすがにサラリーマンたちの飲み会も、そろそろ終了の時間である。

そんな、紅玉市の繁華街を女が一人歩いていた。

長い漆黒の髪は長く、長すぎて地面に引き摺っている。特段、結うわけでもなく、整えるわけもなく。ただただ、無造作に引き摺っている。髪質は最悪だ。持ち物は特にない。着衣は黒く細いロングドレスにこれまた黒いハイヒール。双方とも特に装飾されているわけでもない。瞳には特に感情は映っておらず、それはガラス玉のように漠然としていて、何処か焦点が合っているような、いないような。ともかく、彼女を一言で表すならば『通常だけど、何処か異常』。これに集約される。

「ネエチャンネエチャン」

ギャハハツと笑って、彼女の行く手を遮ったのは少年だった。

「ヒットリで、どっこいつくのつか、なあ~~~~~?」

チャラチャラとやたらアクセサリーを身に着け、ストリート系の格好をし、香水の匂いが痛い少年は妙なハイテンションで言う。

「うお、美人ちゃんじゃあくん? どーしたんですかりユウタさんく?」

「うわあ〜ほっそッ」

「ぜってえ、イイぜ?」

あつという間に数人に女は取り囲まれる。数は、一〇人前後。年齢は一〇代後半から二〇代前半程度だ。

「あつそっぽ、お、ぜえ~~~~~?」

この香水まみれの『リュウタ』という少年がこのチームのトップだった。

チームリーダー・リュウタを含んだ彼ら数人はちよつとした『不良』だ。

しかしあくまで彼らは『ちよつとした』不良だった。不良チームという割りに、顔が利かず、強大な権力もなく警察にすらマークされていない。実は、彼らはこの街の『その筋』では『最弱のくせに妙なハイテンションで最悪にウザイチーム』として有名な集団で、リュウタのチームは『その筋』では『三下』と呼ばれている。ちなみに、そんな『称号』を彼らは知らない。この繁華街を仕切っている『その筋』の存在すら認識していることすら怪しい。そこら辺が、やはり彼らを三下と呼ばせる理由の一つなんだろう。

「あつそぼつうぜえ〜」

「ギャハハハハハハ」

「つーかマジ美人じゃん？」

「ひよ〜うまそ〜」

リュウタを取り囲む少年たちは笑う。

そんな彼らの中心にいるリュウタは、さつさとケリ付けてこの女とでも遊んでやろう、そう思い、早速行動に移そうと口を開いて声を発しようとするが、

「『』、『』、『』」

「ああんん……？ 何の音だあ？ つて……」

残念ながらリュウタにはその声は『言語』として処理できなかった。

そんなことよりも重要な事象が今この瞬間に起こっている。

リュウタの肩に柔らかい感触、女の華奢な手が乗っているのだ。

「うほ……」

「さっすがあ〜〜」

「よっ。この色男おおお！」

「うおネエチャンああんん？ どーしたあ？」

ギヤハギヤハハハハと、下品に笑い、リュウタを取り囲む少年たちは賞賛を送る。

それにつられるように、リュウタも笑う。

これから、どうやってこの女を料理しようか。

そんな、絶望的に利己的な考えを彼は迷うことなく巡らす。そして。

この瞬間に、彼の世界が終焉を迎えた。

「『 ロス……』」

「ん？」

ソプラノのような高音、腹を貫くような重低音の音がシンクロする。

それはまるで声帯を二つ持っているかの如く。

その時点で。

「へえ？」

リュウタの片腕は胴体と離れ離れになっていた。

「あれえええん？」

絶叫はない。ただ呆然と、無くなった『らしい』腕をリュウタは眺めていた。

最後に。

「『……クロス』」

彼女はクルリとバレリーナのように一回転。
瞬間。

ピシヤリ、と。

生温い液体が女の頬を打ち、一拍おいて、豪雨のように液体が大
量に女へと降り注いだ。

しかし、女はそれを気にするともなく歩を進める。

グチャリ、と。

女のハイヒールが、柔らかい感触を伝える。

しかし、女はそれを気にすることもなく歩を進める。

「『クロス、……』」

降り注いだのは、朱色の液体だった。

踏んだのは、生肉のような物体だった。

しかし、女はそれを気にすることもなく淡々と歩を進めた。

「『ウ、……ラギリ、 モノ……ヲ、ナカマ ヲ、バツス
ル……』」

自身に課せられた目的を果たすために。

こうして、世界はまた動き始める。

「おはよ〜」

後ろから聞かぬ日はない声でした。振り向くとやっぱり予想通りの人物が後ろから駆けてくる。名門・白蘭女学院の制服を着た恋人幹旋人・進藤ゆかりがきらびやかに笑っていた。

「おはよ」

同じく白蘭の制服を着込んだ藤崎美鈴は、無愛想にも挨拶を返す。これは彼女が母親から教わった作法（全五ヶ条）の一つなのであるが、どうして学校というモノは朝から始まるモノなのだろうと、名門お嬢様学院の生徒にあるまじき思考の渦に囚われていたので、すっかり忘れてしまいそうになる美鈴である。

「古典の宿題やった〜？」

「まあ、ね」

平安時代を生きた朱雀がいるので、彼女にやって貰ったとは口が裂けても言えずに（言っても日常世界の人間である彼女が信じて貰える可能性はまずない）美鈴は適当に流すことを選択した。

「あの、板垣って古典教師、マジ宿題出し過ぎなんだっての！」
スカートであるにも関わらず、ゆかりは大股で文句を大声で撒き散らしながら美鈴の隣を歩いている。

（お嬢様ブランドの白蘭も、終わりね）

そう、思わず思っただけで噴き出しそうになるが、ポーカーフェイスを前面に出す。

「彼は、少なくとも藤谷よりは、いい」

「あ、それ言ってる〜」

ちなみに『藤谷』とは美鈴たちのクラスで化学を担当している新米教師である。顔はまあまあ。人当たりは最高にいいが、いかんせん、教え方が酷い。酷すぎる。哀しくなるほど決定的に教師に向いていない新米教師なのだ。

「化学、宿題あったっけ？」

ゆかりは悩むようなアクション一つ、
「ないと思うよ〜」

心なしが頼りない。これは教室に入ったならば早急に宿題の有無をクラスメートに確認しようと、美鈴は思う。

「んで、美鈴？」

「ん？」

「今日、放課後ヒマ？」

美鈴は記憶を手繰るが、思い当たる予定はなかった。誰かと繁華街へ行くとか、『非日常の世界』関係から請け負った仕事もない。そして『やること』と言えば、東洋陣営の依頼を受諾するかどうか決める程度だが、これは猶予を与えられているので今すぐというわけでもない。

「別に」

「じゃあさ〜」

途端に目を輝かせたゆかりを見て、

「恋人斡旋なら。パス」

先制攻撃　　までは行かないが、牽制攻撃である。

「……」

急に静かになった。どうやら、牽制攻撃は非常に有効だったらしい。

というか、それ以前に、

「凶星？」

「……、んもウツ！　どーして解ったの？」

まるで全世界の不幸を背負ったヒロインのような芝居があった大袈裟すぎる動作で、恋人斡旋人・進藤ゆかりは美鈴の前に立ち塞がった。仕方なしに美鈴は足を止めて、

「　　長年の、付き合い……？」

「どうして疑問型なのよッ！」

破れかぶれ、がむしゃらなゆかりのツッコミを心地よく感じながら美鈴は微笑む。

「遅刻する」

ゆかりは立ち塞がるのを止めて、再び美鈴とゆかりは並んで道を行く。

「ケツ！ 美鈴なんて一生独り身……………あ、」

何か嫌なことでも思い出してしまったのか、ゆかりが呆然と立ち止まる。その顔は、顔面蒼白、とまではいかないが、あまりよろしくはない。

「どうしたの？」

「そうだった、……………。私は、なんてことをッ！」

狂ったようにゆかりは頭を両手で抱えた。普段のように、大袈裟な芝居がかつた行動なので別に珍しくも何ともないが、その『切羽詰まってます感』がどこか気になる。美鈴が抱いているこの不安感、は理屈ではなくて、『何気ないゆかりとのやり取り』という経験から来ているようだった。

「どうし、たの？」

まさか。

（英語の宿題……………）

非情の岩田。何かと文句付けて生徒をイジメ倒し、毎回宿題を山のように出す、血も涙も人情も愛情も人望も羨望も同情も尊敬もない英語教師が英語の宿題でも出していたのだろうか。全く覚えのない美鈴は、焦りながらも思考を巡らす。

（確か、二限目）

もし宿題があったのならば、間に合わない。

これは、非常にマズ

「美鈴には水瀬さんがいるんだった　　ッ！」

絶叫する進藤ゆかり。

「ん、は……？」

思わず溢れた藤崎美鈴。

「そつよそつ、あの超強くてカッコイイ水瀬さんって人が美鈴にはいたんだー！」

「いやない、絶対無い。有り得ない。水瀬は、死んでもない」

「でも、……、水瀬さん。私がおどちら様、って聞いたら美鈴、アンタを指さして『オレ？ ああ、コイツの男』って……」

ゆかりの爆弾発言とも取れる一言を受け、美鈴は数日前の裏路地襲撃事件まで記憶を還してみる。

スパンツ！

と、心地良い軽音が轟き、催涙スプレーを握っていた少年が吹っ飛ばされた。

「あゝ怖ええ」

乱入者は笑っていた。

長身。ダークスーツに、葬式に着用していくような黒ネクタイをだらしなく締め、黒いサングラスに高級そうな黒い革靴が地面を掴んでいる。緑色の竹刀袋を背負い、頭部は染めることなく短く切り揃えられた短髪。一見真面目なサラリーマン風にも見えるが、身体からは甘ったるい香水が鼻を突き、両腕首には流線型の装飾が施された銀色のブレスレット、右親指と左人差指にキラリと輝いている

髑髏を象った銀色の指輪が『サラリーマン風の男』という言葉がぶち壊しにしていた。

「水瀬、光輝……」

「相変わらずバイオレンスなんやな」

「水瀬に言われたくない」

「あのう……」

一瞬で蚊帳の外に追い遣られた進藤ゆかりが申し訳なさそうに、やや上目遣いで青年を見上げて言った。

「どちら様ですか？」

「オレ？ ああ、コイツの男」

「水瀬。死にたい？」

「冗談やて。ま、詳しい話はコイツら潰した後で。な」

「あの、クソ、野郎……」

何ゆかりの前でデタラメ言ってくれてんじゃボケカスクズがあ！

と、美鈴は心中のみで（そう思ってるのは美鈴だけで実際問題美鈴は鬼神の如く凄まじい形相をしていた）感情を大爆発させたその瞬間、街路樹の葉が数枚焼けて灰となり落ちた。パチパチと美鈴の髪辺りで火の粉が断続的に跳ね、放置自転車と、不運にも美鈴の傍で客待ちしていたタクシーの側面を堂々と焦がし、最後に電機屋のショーウィンドウで展示されて『昨夜、紅玉市四丁目で斬死体が発見されました。遺体は』とか何とかどうでもいいネタを取り上げているニュース番組を放映していた大小様々何台もの最新薄型テレビの画面を『ショーウィンドウ越しに』焦がした。

「え、うそ、」

何も知らない『日常の住人』でしかない進藤ゆかりは若干起こっ

ている『異常』に混乱して、
「、テロ？」

ゆかりは、現象の原因たる美鈴の袖を不安げに引っ張っていた。

こうして、世界は変わらずに動いている。

三

「ウザイ」

純白ベッドの上。

少年・世界崩壊は老紳士がいなくなったラストオーダー（正確に描写するならば
追い出した）病室で一人呟いた。

「ウザイウザイウザイ……」

腕を組んだまま、特に取り乱している様子も無しに、やや怒り気
味に単語一つを連呼している。

「あゝ　　ッ！　　どーしてこんなにウザイの！？」

ウギヤァ、と世界崩壊ラストオーダーは寝癖付いた黒髪をワツサワツサと掻き乱
して喚き叫んでいる。

「答えるよッ！　どーしてそんなにウザいんで、す、かッ！？」

《汝、無礼千万》

重苦しい声が、響いた。

この重低音の発生源は他でもない、世界崩壊その人。厳密に言うならば、彼・世界崩壊の声帯からではなくて、腹部から骨の髄まで揺さぶるように聞こえてくる感覚である。比喻も何も使用しているわけでもない。

「テメエ……」

ラストオーダー

世界崩壊の声は負けず劣らずの重低音。

「誰の許可得て俺の中に入ってんだよ……」

《不明。我、初経験、也》

単語、それも漢字だけを選抜してぶつぶつ切る意味不明な言い回し。面白いほど重低音の声色。どこか、畏怖を抱かずにはいられない強大なる力の感覚。例えるならば『某痛快歴史タクティカルアクションゲーム』のギンと言ったところか。

この声の主は、どうやら『天帝』らしい。

この声の主は、あの『天帝』らしい。

「いやいや。いくら『天帝』でももう少し砕けた言い方出来ねえのか……？」

頭の痛みに耐えるように、ラストオーダー世界崩壊は額に手を当てた。

《砕？》

「ああ。その、……なんだ、ウホーン！」

ラストオーダー

世界崩壊は余所余所しく咳払いを一つ、そしてブラックホールの如く凄まじい吸引力で己の肺に酸素をため込んだ。

「テメエのエセなんちゃって漢文口調分かり難いし意味不明で読めねえ文法的にいろいろ間違ってたじゃねえか？ どうせ『偉いキャラのテスト中々ナイスに酷かったじゃねえか？ どうせ『偉いキャラの口調？ なら漢字だな』ってアイツの思考は安易且つ適当滅茶苦茶無理矢理千万見え見えなんだよ世間一般にどんだけ『漢字口調キャラ』存在してると思ってるんだよもう少し古典と世界中に存在する創作作品勉強してから出直してこいやこのクズ野郎それ以前の問題でこれじゃ一例を挙げると『最後の幻想8』の風さんのパクリですかって言われても反論できねえじゃねえか俺はなアイツらコンビに

沈黙。

恐らく幻覚だろうが、世界崩壊ラストオーダーの視界の片隅には木魚を、ポク、ポク、ポクと一定のビートを刻み、最後に鈴（鈴：りん 仏具の一種で、読経の始めや最中、終わりなどにそのへりを打ち鳴らす鐘のようなアレ）をちーンと鳴らず住職様がいた。

《ああああん……？ せっかくつよお、このオツ、『天帝』様が
つ現代っぽくしゃべって差し上げてんのにっよお》

なお、沈黙。

《リ・ア・ク・シヨ・ン、無しつかよおッ！》

……………。

「いやあ、の、……スイマセンでした。今すぐ土下座しますんでダンディーで美しい重低音のお声でチャラチャラした文法使わないでください」

ダンディーな重低音でそんな話し方されると、想像以上に、面白いから。

威厳も畏怖も尊厳も、とことん消失してしまっ、なんか聞いて痛いです。

そう、思うが、どうしても少年は口に出せなかった。

そして金輪際、自分は『天帝』に「現代語はなせ」と、口にするラストこともないがなんだろっとなあ額をベッドに押しつけながら世界崩壊オーダーはそう思った。

第四章 滑稽なほど迅速な崩壊をただ見据えるだけ

放課後。

進藤ゆかりの迷惑この上ない『勧誘』を一切合切些か強引にお断りして、藤崎美鈴は繁華街を闊歩していた。

《殺す、絶対にあのクソ虫殺すッ!》

「奇遇。私もあのクソ野郎を殺したい」

抜群のプロポーシヨンに、赤銅色の長い髪を持つ十二天将・朱雀。白蘭の制服を着た、黒と茶が混じったショートヘアの少女・藤崎美鈴。

《どう殺す?》

「焼死体」

《そこまでは可哀想よ、せめてウエルダン程度で人権を守ってやらなきや》

「甘い。やるんだったら徹底的に」

《じゃあ、お焦げ付けで》

至極物騒な会話であるが、朱雀は隠蔽の術式・不見の術を展開中。美鈴は囁くように朱雀と会話しているわけで繁華街の人混みと、店々が大きく鳴らす宣伝放送の喧噪にすっかり掻き消されている。よって他人様に変態扱いされる心配は限りなく低い。まあ、囁くと言つても口は動く。思われても『独り言をぶつぶつ呟く少女』程度にしか見られないだろうから、恐らく美鈴にのし掛かるダメージは少ないはずだ。

《美鈴》

「ん?」

先程とは声柄を変えて、至って冷静に朱雀は言う。

《東洋陣営から依頼受けたって本当?》

「そうだけど。何でまだ話してないのに朱雀が知ってるの?」

《ん。あのクソ虫から直で聞いたのよ》

クソ虫？ と、美鈴は首を傾げるも、朱雀は何でもないと一言。美鈴もやや納得していない状況ではあるが、朱雀は依頼内容を美鈴に聞く。

「概要は。この国に進入した謎の魔術師 通称『魔女』を捕縛して東洋陣営の部隊に引き渡すこと」

依頼書にもキツネ宰相のサインと東洋陣営が公式文書にしか使用しない捺印が押された。それを見る限り、キツネ顔の宰相直属の案件だと言うことが容易に判断できる。

依頼書を読む限り、依頼内容はそこまで困難なモノではなかったが、そもそも根本的に依頼内容がおかしい、と美鈴は思っていた。

『完全逃亡』^{スケープゴート}は運び屋だ。謎の魔術師・通称『魔女』を何処か、東洋陣営の支部に『護送』することならば運び屋の管轄であるのだが、その前に一戦交えなければならぬ状況らしい。どうも東洋陣営のお偉方は『運び屋』^{スケープゴート}を傭兵や便利屋の類だと思っているらしく、取り違えもいいところだと美鈴は思う。しかし藤崎美鈴個人としては、好奇心から謎の魔術師『魔女』と一戦交えてみたいと思うことは思う。しかし、朱雀の意見も馬鹿に出来ないわけで。結局受けるか受けまいか美鈴は迷っていた。

「基本はこれだけ。まだ受けるか受けまいか猶予があるからまだ決めてない」

《今回の標的、『魔女』ってホント？》

「うん。何でも魔術師の名前、調べ付かないから東洋陣営が『魔女』ってコードネーム付けたんだって」

《誰？》

「知らない」

《女魔術師？》

「たぶん」

と、不意に携帯電話から割とヘビーなメロディが鳴り響いた。朱雀や、丁度美鈴の近くにいた学生やおばちゃんの僅かに驚きが混じ

った視線が美鈴に集中するが、当の本人に構う気などない。朱雀は美鈴の携帯電話から流れるそのへビーなメロディを聞きながら、呆れたように溜め息を吐く。

《美鈴、アンタよくそのバンド、何だっけ……》

「RISE」

《そう、……その音楽について行けるわね？》

「どうしてみんなはこの魂のヴォイス（発音注意）に共感しないの……？」

RISEとは、この国のロックバンドだ。

《マニア向けすぎるのよ》

「何処が？」

《何処が？ じゃないから。アルバムのタイトルは必ずルーン文字、歌詞は全部ラテン語だなんて……、いくら『そっち』の世界の住人だつてさすがに引くから》

美鈴は途端にムツとして、

「どうして朱雀はRISEの愛が分からないの？ 人生、社会、世界における憂いを隙間無くラテンという古の聖なる言語で鼓吹しているRISEの愛が。この世界は矛盾だらけよ。その矛盾を追及する鋭い切っ先で、邪悪な人間に対する猛烈な敵意と例え戦場でも薄れること無き愛情をいっぺんに歌うの。相反するその二つのテーマだけどそれはRISEの手にかかれば一瞬にして神の一声をも上回るメッセージに変貌する。特にセカンドアルバム・LATHUに収録された『Vox populi vox dei』はフアンの間で伝説的な大ブレイクを

「エトセトラエトセトラ。ちなみにこの『エトセトラ』はラテン語である。ラテン語表記で書くならば『et cetera』となる。また、刑事ドラマで確実に出てくるキーワード『アリバイ』もラテン語だ。ラテン語では『alibi』と表記され、直接的な意味は『他の場所で』となる。他にも『エゴ』は『ego』で直接的な意味は『自我』となり、今やかなり普及している『ファクシミリ』も

ラテン語、ラテン語表記ならば『fac simile』で直接的な意味は『似せて作れ』、はたまた『ウイルス』も『virus』で意味は『毒』、そしてそして現代戦争では欠かせぬ兵器となった『ミサイル』も元はラテン語で『missile』と表記され、意味は『投げられるもの』、最後に数学で使う人は使う『Q・E・D』。これは証明の末尾に書くもので『かくして証明された』という意味なのだ、これは略で本来は『Quod Erat Demonstrandum』となり、直訳すると『証明されようとしていたもの』、つまりラテン語なのである。

《へへ、ラテン語って日本にも根付いているんだ。ちなみに、ラテン語はローマ帝国の時代から続いている言語で、今でも医学用語はラテン語が多いの。また、バチカン市国の公用語とされているの、って何やってんのよ私！》

時間潰しも功を奏さず、まだまだ美鈴の演説は続く。しかもぶつぶつ人混みの中、陰険気味に『超マニアックカルトヘビメタバンド・RISEの偉大さとその広大な世界観と愛』について一定ローテーションをキープしたまま淡々と魔術詠唱のように語っているもんだから非常に怖いし、その姿は異常だ。いや、もはやこれは異端といつても間違いではないと朱雀に思わせる美鈴。現に、繁華街の人混みも朱雀と同様のリアクションで美鈴の演説に答えていた。次々と美鈴の周囲から人が引く。彼らは精神的にも物理的にも『引いて』いるのだ。そんな契約者に朱雀は乾き切った愛想笑いを浮かべ

、その時点で、絶対に藤崎美鈴の思考の彼方へと吹き飛ばされてしまっている割と重要なポイントに朱雀は気付いた。

「故にその志は天より授かった、聖書に登場するどんな予言者よりも優れ、世界中の神話を読み漁ったとしても彼らの包容力より勝る者など」

《美鈴美鈴》

「つまり、彼らは世界の愛を説く現代の御子であり、我ら人類は彼らを尊敬尊重仰ぎ崇め敬命敬虔恭謹貴び慕い慕い」

《電話、出なくて良いの?》

「あ」

美鈴は慌てて美鈴は携帯電話をポケットから引っ張り出す。ちなみに着メロは3ループぐらいしただろうか。そんなことにも気付いていない美鈴は二つ折りの携帯電話を親指でこじ開けた。

「……非通知?」

現れたディスプレイを覗くと、非通知と浮かんでいる。美鈴にとって、非通知は犯罪の気配 or 不幸の象徴という奇怪な方程式が確立されていたりするので非通知電話は良くないことの前兆に思えてしょうがなかった。が、人通りが多いこの通りで立ち止まることも出来ず、美鈴は仕方なしに、ある程度の覚悟を決めて通話ボタンを押した。

「はい」

『ウツス、美鈴ちゃん元気?』

水瀬光輝だった。

「名前で呼ばないで。虫唾が走る」

『うわ、いくら何でも非道くない? つーか出るの遅いし』

「大地に帰って欲しい」

ハハハッと、水瀬の渴いた苦笑がスピーカーから漏れている。

「……用件は?」

《依頼について、や。『本部』から新しい情報、送られてきたからお知らせしようと思っただけ》

「まだ、受けるとは言っていない」

『聞いたいて、損は無いと思うんで?』

美鈴は横目で朱雀を見る。と、朱雀は美鈴の意図を完全に読み取って、堂々と言った。

《私からすれば、依頼は断った方が良く。敵が何処の誰だかよくわからない案件ほどめんどくさいモノはないからね。そんな意味不明な依頼に命賭けるなんて馬鹿げてるわ》

年長の一言に、美鈴は小さく頷いた。

「依頼、受けない」

《は？》

「お断り、する」

しばらくの沈黙。スピーカーからは水瀬の呼吸音が小さく聞こえる。

『あつそうなん。じゃ、気が向いたらまた連絡して、な』

その言い方は、どこかサラリとしていて気に入らなかった。言い表すのは難しいが、何か見透かしているような言い回し、それに付随してくる淡泊な声色は何処か腹が立ってくる。

「話、聞いてなかった？」

出来るだけ感情を殺し、捨て台詞を吐いて携帯の終話ボタンを押した。

「さて。思い通りやな」

そう、青年の口が動いた。

「美鈴ちゃん、道を切り開きや」

手に持つ携帯電話を懐中に戻し、彼は不敵に微笑む。

—

「これから、どーする？」

《そうね、ゲーセンでも行きたいわね》

朱雀は、視覚操作や気配除去が病的に上手い。『不見の術』の扱いは勿論、応用を利かせて姿を自由自在に操ることだって出来る。

何と言っても彼女は『十二天将・炎の吉将』である。名の通り、専門は炎。光の屈折率を変えて他人に『化ける』ことだって造作もなかつたりするのだ。

「私に、化けるのはやめて」

《ん〜どーして？ 『双子』に見えていいじゃない？》

実際そうなんだけどね〜、と朱雀は意地悪く笑っている。

「迷惑。ゆかりに見られて危うく隠し子伝説が流れるとこだった」
彼女を侮つたらいけない。

《残念ね〜》

「朱雀」

少しドスを利かせて、朱雀を黙らせる。もちろん、声は最小限に抑えて、だ。美鈴はもう街角で変人扱いはごめんなのだ。（じゃあRISEの良さをカルト宗教めいた口調で語るのを辞めなさいと声を大にして言いたい朱雀であるが、敢えて口にしていない）

《うっし〜ッ、今日こそあのパンチングマシン破壊してくれるわ！》

「やめて、あれ一台いくらすると思ってるの？」

《さあ〜》

「朱雀」

《冗談よ、冗談》

朱雀がケラケラと笑って。

美鈴が深い溜め息を付いて。

美鈴は『その』世界の住人のクセに、この平和で安穩としている『日常の世界』の裏に、戦いと憎しみと謀略、そして魔術が渦巻く『非日常の世界』が存在しているなんて信じられないでいた。

黒いスーツを着たサラリーマン、学ランを着た集団、犬の散歩中らしいお爺ちゃん、笑い合っている女子高生たち、暇そうに客待ちしているタクシーのおじさん、オープンカフェで子供そっこのけにして楽しそうに談笑するお母さんたち、杖を付いて歩くお婆ちゃん、荷物を降ろしている宅配トラックの運転手。驚くほどこの『世界』

は平和である。殺人事件や強盗事件、中には物騒な事件も耳にするけれど、それでも人々は気楽に笑い合い、毎日厭きずに代わり映えのしない『日常』を過ごしている。

と、聞き慣れたサイレンと見慣れた救急車が直ぐそこ、ガードレール一枚挟んだ車道を一気に駆け抜けた。

《こないー日だつてのに病気になる人だっているんだねえ》

「天気と。病人の有無は関係ないと思う」

この繁華街を通るならば、五キロぐらい先の県立病院でも搬送するのだろう。あそこは最新の設備も整っているし、専門医だつて多く抱えている。大概の病気、怪我、手術なら問題なくこなしてしまいうらしく、近年騒がれている医師不足を感じさせない優秀な病院らしい。

(……、)

病気になる人だっている。

殺される人だっている。

この世界はいろいろな矛盾に蝕まれている。

明確な悪や、法をかくぐって荒稼ぎしている連中だっている。

けれど。

それでも、この世界は平和だ。

だからこそ、美鈴は思う。

(『あっち』は。無くてもいい)

『こつち』の世界を知っている。『非日常の世界』の住人・藤崎美鈴は思う。

(『裏』がその存在を示さなくても『表』は廻る)

だから、魔術なんて、

(いらない)

両親を殺した、

(魔術なんて……)

魔術師なんて、あんな世界なんて

(無くなれば……、いなくなればいい、)

だから、私は、あの日、

(誓った)

殺す、滅する、潰す、砕く、崩す、破壊する。

(それが、私がすること)

結果的に両親を殺した魔術を世界中から消し去ることこそが、

(父さんと、母さんへの)

弔いになる。

シタリ。

ネットリとした『何か』が、頬を一筋打った。

「み、すず……？」

朱雀の声で慌てて頬を拭って、何気なく手を見て、

ようやく違和感に気付く。

紅い。

それは、血。

思わず後退り、グチャリと何かを踏んだ。
紅い。

それは、肉片だった。

人間の。

「ッ！」

そこは凄惨たる現場だった。

道が、ビルが、車が、バス停が、バスが、スーパーの軒先が、店内が、電信柱が、電線が、中央分離帯が、アスファルトが、ビルが、ビルのガラスが、屋根が、街灯が、木が、草が、土が、看板が
紅い、のだ。

他にもない、それしかない。

血肉で、世界が染め上げられているのだ。

展開があまりに急すぎた。

美鈴の、『非日常』の出来事に慣れているはずの美鈴の思考が止まり、考えることを放棄する。

「……これは、」

朱雀はいつの間にか術を解いていた。美鈴はそれにすら気付けないでいたのだ。

「……ありえないわ」

なにせ、世界が覆われているのだ。

大量の肉片に。

人間だった、全てに。

これだけの人間が、さっきまで笑いながら歩いていた人間が皆々揃ってミンチになっている。たぶん、凄い異臭を放っているはずだ。だが、その異臭すら気にならず、感じられない。神経が、ありとあらゆる感覚神経、器官が麻痺しているのか、それともそれは感じる必要がないのだろうか。

「こんな、ことが出来る魔術師なんて……」

美鈴は冷静に術符を

ズオンツと、身体の芯を何かが通過した。

「いああ、……」
刺された。

手にした術符がハラハラと手から零れ落ちる。
何か鋭利な刃物で身体を貫かれた。
本能的に美鈴は患部に手を当て、

「うそ」

一滴も血が流れていなかった。
身体は紛れもなく無傷だったのだ。

「……殺、気？」
無傷、至って正常。
なのに、痛かった。
手が震える。

まるで喉元に刃を突き付けられているような殺気。それでいて、
重い。嫌な汗が噴き出してくる。

「……………」

気付く。

そして、見上げる。

ビルの上。

ゆっくりと、ゆっくりと。

見上げたビルは高層ビル。

顎を上げ、汗が滴れ落ちる。

転がっている死骸に透明な一滴、落ちた。

「な、に……………」

黒い、影があった。

太陽をバツクに、黒い、黒い、黒い。

「『ワレハ……………、バツス、ル』」

女の高音、男の低音がシンクロして、和音となって唯一の生存者の耳を打った。

ドクンツと、その声に心臓が跳ねる。

(魔術、師……………じゃない、……………?)

「『……………、ツ、ミビ……………、トに、シヲ』」

靴の底を滑らすように、美鈴は一步下がり、朱雀は手に炎で形作られた紅蓮の短剣を構える。

「『オ……………ウ、ヲ、ウ……………ラ……………、モノ……………』」

「来るよッ!」

朱雀の掛け声一つ、美鈴は指で素早く印を組むと体内で魔力を練り上げた。

「『コ、ロス』」

一瞬で背後まで回り込む影。

即刻、美鈴は練り上げた魔力を一気に解放し周囲に火柱を展開。

猛火は、辺りの血肉を一気に気体へと昇華させ、美鈴は片腕を振った。

瞬間、猛火は一気に影を呑み込み、荒れ狂う。それはまるで排水溝に殺到する豪雨のように、滝壺に流れ落ちる清水のように。影の

『黒』は一瞬にして炎の『紅』に

「女、？」

漆黒の髪は長く、長すぎて地面に着いている。黒く細いロングドレスにこれまた黒いハイヒール。瞳には感情はなく、それはガラス玉のように何も映っていないかった。

「『コ、ロ……ス』」

ここにきて、考えた。

どうして、炎に呑み込まれた影がここにいるのだろうか。

どうして、炎に呑み込まれた影が無傷でいられるのだろうか。

その答えは、

「『シネ』」

ドンッと、正面から暴風を受け、小さな美鈴の身体はいとも簡単に空中に投げ出された。

「チッ」

朱雀が腕を振り下ろすようなフォームで手にある炎剣を一斉に女へ投擲。数本の炎剣が誘導ミサイルのように女へ一直線に飛んでいく。

「オロカ、ナ……」

女はそれを迎撃するわけでもなく、躲す動きもしない。

「なめんじゃないわッ！」

更に朱雀は炎剣を手の中で創造、第二波を放とうとしたその瞬間、パシュツ、と。女に命中する数ミリ前で炎剣は蠟燭が吹き消されるように消滅した。

「な、」

無表情に、無気力に。女の手が、毒手のように細長くも美しい腕が、天に掲げされた。

「ココロス、」

掲げされた掌に、『何か得体の知れない物』が集まる。ボーリング玉のようにちっばけな『何か得体の知れない物』の色は黒。思わず見蕩れてしまうその黒は、漆黒より黒く深く、飲み込まれてしまうような黒だった。大波のように膨大で、岩肌を討ち滅ぼすように強大なプレッシャー。呼吸をする、心臓を動かすという、生命維持に必要な最低限の動作すらこのプレッシャーの前では難しく思えた。滾り、うねり、濁り。そう、あの『天帝』。神をも思わせる、いや、それ以上かもしれない。何千年と『魔』と呼ばれる者たちと戦ってきたが、これほど畏怖と恐怖が強烈に身体を打ち付け、縛り付けられた経験はない。

「ッ」

感覚でわかる。

あの一撃を食らってはいけない、と。

間違いなく、髪一本に擦っただけでもあの一撃は朱雀を吹き飛ばし、間違いなく、スーパーコンピューターが行う足し算のように正確且つ確実に滅してしまう。

「ッー」

足か、腕が、身体が、首が、爪先が、指先が、弛緩して動かない。

圧倒的なプレッシャーと恐怖に、打ち拉がれて、動かない。まるで地面に縛られたように、地面に生える巨木のように、『足』が『動く』ということをも本能から消し去られてしまったように。

「『シ』」

ネ。

彼女は恐らく『シネ』と言ったのだろう。

だが、それは口の動きのみでしか確認できなかった。

雷鳴のように鋭い木霊、火山が噴火したような、核爆弾が炸裂したような、腹を突き破るような爆発音によって。女が放ったそのボーリング玉は『何か得体の知れない物』が高濃度に圧縮されて形成されたようだった。その悪魔のような黒い塊は、大気を易々と突き破り、余波で建造物から自然物まで、ありとあらゆるモノを薙ぎ倒し、潰し、壊し、叩き、天に浮かぶ雲さえも一瞬で掻き消して、天上天下唯我独尊の如く不条理な程の破壊力と絶望を持って朱雀に迫った。

「ど、しよう、ない……か」

まさに今迫る『絶望』に、朱雀は笑った。

眼前に迫る漆黒の一撃を呆然と、野次馬のように眺めながら。

《『ユリアス』……》

コイツの口から初めて聞こえた横文字らしき発音だった。

《『ユリアス』……：気配、須》

「んだそりゃ？ あれか、ロープレの下っ端か何かか？」

《我、其単語、理解不能、也》

「あゝ、忘れてくれ」

威厳ある、かどつかはいまいち判断できないが、とりあえず世界崩壊は（土下座までして口調を元に戻して頂いた）はほっと一息付いた。

「んで、『ゆりあす』って誰だよ？」

《王、森羅万象之、王為者、也》

凄みがある声で言われると、非常に怖い。

「王？ 何か、世界中を支配してた王ってか？ そんな伝承、世界中探せばいくらかでもあるぞ？」

まさしく、神話の世界である。

ギリシャ神話、ケルト神話、北欧神話、日本神話、エジプト神話、ローマ神話等々。メジャーな物からマイナーな物まで上げるとキリがないが、大抵は、大地、植物、人類を含む動物の創造や、その伝承を守り次世代に伝えていく民族の文化的起源、日常生活の紹介に国家の起源まで。中には民族の英雄を超人的に紹介していて、事実とは到底受け入れられない物が多々ある。

《伝承、幾多虚言、也》

「それぐらいは俺だって理解してるわ」

《我等、神、嘗、『ユリアス』之家臣、也》

「は？」

《汝、愚》

「……。あれか、神話に登場してくる『創造主』を『創造』したのが『ユリアス』ってか？」

「うむ、と低く低く。その肯定と取れる『天帝』の声を聞きながら、^{ラストオーダー}世界崩壊はボンヤリと簡単に考えてみる。」

「つまり『創造主』を『創造』したのが『ユリアス』で……、……でことは『ユリアス』が真の創造主ってこと、……か、ねえ）」

と、ここまで考えて思った。

各神話で語られる『創造神』を『創造』したのが『ユリアス』なら、

「おい、なんでその『ユリアス』様の逸話が後世に伝わってないんだよ？」

《史、勝者之物、也》

「なるほど、ね」

つまり、こういうことだ。

人間が文字を持ち、言葉を話し、記憶を物に記録するという事を止めない限り、歴史は後生に伝わる。ここまでは、いい。必然であることだ。しかし、こうなると問題が一つ出てくる。歴史を誰が『編纂』するか、だ。

「どんな世界でも相容れぬ者同士は必ず戦いになる。やがて戦いに敗れた者は死に絶え、戦いに勝った者が自身の威を示すために後世に記録を残す。威を示すためには時にフィクションも織り交ぜないといけない。当時はただの書物として扱われたとしても後世は残った記録を歴史と呼ぶ。当然、有りもしないフィクションも歴史として扱われる、か……」

《大乱、我等之勝利。故、我等、書物依、森羅万象王『ユリアス』為存在、消去、須》

所詮歴史は勝者の者。

勝者が書いた歴史は、自身の敵勢力を悲しいまでに『悪』と記す。『てことは。『ユリアス』を滅ぼしたお前らはお前らでまた戦争、か』

《我等、王座巡、戦、須》

どの世界も代わり映えしねえ。ラストオーダー 世界崩壊は溜め息を付いた。

(ま、神話通りにカミサマが人間を創造したんなら、親も親、子も子ってとこね)

《大戦、数千年続。故、我等、大戦疲労、須》

「ほんつと、どの世界も変わらねえや」

戦い、闘い、戦乱、内乱。

下手に知能を持った者が起こす物事は同じである。

「戦争が無くならない原因を見たり、って感じだよ。てことは『ユリアス』は滅びたんだよな？ ならなんで『ユリアス』の気配なんだよ？」

《我等、『ユリアス』滅、須》

「……何か。黄泉がえりつてヤツか？」

《不明。然、気配、有》

「んだよ、そりゃ」

バカみたいな冗談を聞くような感覚で、ハッと笑って世界崩壊はラストオーダー いなした。

だが、そんな彼の意向とは反対に、世界はまさにこの瞬間に確実に明確に動き出していた。

それを、まだ、彼は知らない。

他でもない『世界崩壊』の名を冠した彼は、まだ知らない。知る由も、なかった。

第五章 哀しく鳴り響く歌声にお前は何を思うか

「助かった、わ……」

乱雑に広がっている赤銅色の長い髪を気にすることもなく、呆然と朱雀は息を切らして、地面にへたり込んでいた。

しかしそこは、もはや鮮血の世界などではなかった。

コインの裏側を見せられているように、一転して灰色の世界が広がっている。恐らく女の一撃で、血で染められていた面がまとめて全部綺麗さっぱり吹き飛んだのだろう。今現在朱雀の目に映る世界は、一撃で核ミサイルが着弾した、その爆心地のような世界だった。人気はなく、虫けら一匹見当たらない。気配すらない。ビルはただの瓦礫の山へと堕ちた。『繁華街』として繁栄していた痕跡が何処にもなく、辺り一面を粉塵が断続的に、濃霧のように朱雀の視界を奪っている。朱雀は紅玉市中心部の繁華街を知っている。その賑やかさ、人通りの多さ、活気。全て知っている。だが、それは嘘のようだ。人通り、活気。全てがまやかしかつたように思えてきてしまふ。

「アイツ。何者？」

そんな中。朱雀の前に、藤崎美鈴が立っていた。

敵から朱雀を庇うように、美鈴は凜と立っていた。

「分から、……ない。魔術師……ではない、わ」

なら、神か。

美鈴は数百メートル先に佇む圧倒的な存在感をその肌で感じつつ、嘲笑する。そのプレッシャーは、数百メートルも間合いを取っているにも関わらず、確実に美鈴の身体の奥底まで畏怖を刻んでくる。尋常ではない。勝てる気がしないのはもちろん、いつもなら美鈴の中で快樂の一種に数えられる戦闘も、ただ恐怖を刻みつけるだけの行為にしか思えない。

(離脱。逃げ切れるかわからない、けど)

何もしないよりは遙かにいい。

懐から術符を二枚引つ張り出し、そのまま目の前の地面に捨てるように手を放すと、座り込んでいる朱雀の肩を持つ。

「逃げる。から」

空いた片手で印を結ぶ。

瞬間、二枚の術符が同時にパッと、クラッカーを使用したような音を立てて小規模な爆発を起こすと、辺りに盛大な量の白き噴煙が撒き散らされた。

(何秒持つてくれるか、な)

少量の魔力を足に回す、その瞬間。

シュンツと、美鈴と朱雀の姿が虚空に消える。

使っは世界最速クラスのスピードを誇る多角高速移動術式『飛脚漣』。

「『ユル、……シガ、タシ……』」

長い長い漆黒の髪が、地を蠢いた。

一歩踏み出すと目の前の地面に黒い塊が現れる。

「『……メツ、スル』」

黒い塊はやがて、細長く、薄く、天に向かって伸びる。

無音で。

伴う音など一切無く、あっという間に女の目の前にあった漆黒の塊はいつしか不気味な光沢を放つ剣となる。が、それは剣と呼ぶにあまりにお粗末だった。とりあえず形で見れば両刃の剣であるが、その刃の愚鈍さは紙ですら切れそうになさそうだった。だが確かに重量感だけはある。女はその剣を、勇者が封印されていた伝説の聖剣を抜き去るように、一気に地面から引き抜いた。女は一度、その漆黒の剣の柄を握り直して。

トン、と地を蹴る。

そして。

朱雀を抱えて移動する藤崎美鈴の眼前に、今まさに漆黒の剣を振

り下ろそうとしている女が現れたのはほぼ同時だった。

「ッ！」

美鈴は咄嗟に女が握る剣の軌道を読み切って、身体を最大限捻る。空を斬ったその斬撃を横目、即座に飛脚漣を行使。

(こりゃ、本気で行った方が、いい)

通常のバックステップで背後に下がり、美鈴は飛脚漣で大きく、そして瞬時に後退していく。現れては消え、現れては消え。恰もそれはレポートをしているように。美鈴は間合いを取りながら後方を確認、漆黒の女の気配がだんだんと薄くなってきたことを感覚で理解すると、視線を前方

と。

それは、目に触れた。

天に向かって掲げられている、毒手のような長く細長い綺麗な腕。掲げられた掌には、漆黒に漆黒を織り交ぜたようなボーリング玉大の球体。

鯉のぼりのように靡く長い黒髪。

生物であることすら疑いたくなるほどの無表情。

翻る黒く細いロングドレス。

片手には、漆黒の剣を握っている。まるで、この一撃を避けたならばこの剣で刺す、と誇示しているように。

(ダメ……)

本能的に、理解する。

それも瞬時に。

(あれは、ダメッ)

前方に、漆黒の女がいた。

咄嗟に美鈴は術符をと、懐にその手を突っ込む。

引つ張り出した術符の用途は攻撃でも防御でもない。

用途は単純。ただ、一時離脱のための目眩まし。

美鈴の本能は、忠実に退避することを選択する。

美鈴はその術符に僅かな魔力を込めようとするが、それは致命的なまでに遅かった。

魔力を込めようとする美鈴の目の前で、

『女は毒手のような腕を存分に撓らせ、掌上に浮遊する漆黒の球体をそのまま真っ直ぐ地面に叩き込んだ』

と。

そう、藤崎美鈴の視神経が感知し、その情報が脳に伝達した瞬間、

一切合切、あらゆる音が消し去られた。

まるで地盤沈下でも起こったかのように、唯一、辛うじてビルと分かる程度に原形を留めていたビルが地面に吸い込まれるように、引き摺り倒されるようにしてガラガラと倒壊し、一つ一つが人間ほどの大きさを持つ瓦礫が嵐のように吹き荒れた。地面を覆う固く丈夫なアスファルトが沙のように宙を舞い、顔を出した土壌が為す術もなく掘り返されて掘り鉢状のクレーターを形作っていく。

「グ、ガハッ！」

ヒラリと血が舞う。次々と襲いかかる岩の弾丸に美鈴の皮膚が引き裂かれる。

(か、い……ひい、ひぎゃ　グ、)

世界最速クラスのスピードを誇る多角高速移動術式・飛脚漣。飛脚漣は何もスピード『だけ』が優れた術式ではない。飛脚漣は、術者が初動から発動までのタイムラグが一般の術式に比べて非常に短いのだ。それはわざわざ遠くにあるテレビ本体の電源を入れるのと、ただ単純に近くにあるリモコンを操作するような、それはほんの僅かな印の組み上げと魔力のみで発動する術式だ。

ほんの僅かな印の組み上げと魔力のみで発動する術式。

ほんの僅かな印の組み上げと魔力のみで発動する術式なのに。

(はっ、　　どうが、……間に……、あわ、ないッ)

あまりの強風に、為す術もない。

印一つ結べない。

たった指の関節一つ動かせばいいだけなのに。

魔力一つ練ることが出来ない。

たった数秒意識を集中させればいいだけなのに。

(間に、あ、……わ

直後。

何か、強烈な力が美鈴の腕を引っ張った。

—

過去。

東洋陣営に『通常部隊』に組み込まない、異常な者がいた。

しかし、その性格は至って温厚。整った顔立ちに今にも折れてしまいそうなくらい華奢な体躯。腰まで届く黒と茶を混ぜ合わせた繊細な髪を持ち、肌は初雪のように白く、淡く透き通っていた。壮美、壮麗、浄妙、鮮麗。幾度、美を司る賞賛賛美の言葉を駆使しようと、その美しさを表すためには役不足。『彼女』に一番近い者の言葉を借りて『彼女』を形容するならば『月のような女性』とでも言ったところだろう。

だが、そんな『彼女』はとんでもない異常者であった。

一度『彼女』が戦場に立ったその瞬間。

戦場の勝敗は決する。

その圧倒的な力は、幾十に張り巡らされた城壁でさえ防ぎきれず。

その圧倒的な力は、例え幾千の魔術師を差し向けても敵わず。

その圧倒的な力は、幾万の味方を鼓舞し続けた。

故に、味方は尊敬の意を込めて『彼女』を『ハウオウ鋒王』と呼ぶ。

七年前。

確かに【世界呪術文化保護連盟】最強の魔術師は広大な戦場にその身を置いていたのだ。

二

「ひゃー、毎度毎度デンジャラスな殺し合いしてんなあ、美鈴ちゃんは〜」

「水瀬……」

腕を掴む手は水瀬光輝。こんな状況にも関わらず、飄々と笑っていた。

「にしても、マジでやばいな、こりゃ」

美鈴が立つ世界は崩壊と消滅に満ちていた。

紅玉市で一番人通りが盛んなこの大通りの両側を城壁のように立ち並んでいるオフィスビル群は瓦礫の山と歸し、アスファルトは捲れ上がり、あちこちにクレーターが作られ、恐らく車だったそれらは鉄屑以下の存在に成り下がっているその風景はまさに核戦争後を思わせる。

「『ゴ、ロ……ス』」

ゆらりと、一歩進めるに三秒は要するように、黒き女は歩を進めてくる。左掌には漆黒の球体。一瞬で繁華街の一角を消滅させたその禍々しい一撃を携え、ゆっくりと、ゆっくりと。

「あれ、……何者？」

「アレが今回のターゲット。通称『魔女』さんや」

「『魔女』……、依頼書にあった……」

そうだ。そう言って水瀬は懐から黒くこつい無線機を取り出して口元に持って行く。

「A班、プラン通り、第一陣展開！」

瞬間、漆黒の女 『魔女』の周囲を薄水色の壁が四方を囲み、天蓋を覆った。

（これって……）

封鎖結界。

「我らが東洋陣営誇る結界班よ」

防御と封鎖を司る、結界形成のスペシャリストで編成された部隊で特に集団戦に重宝される。七年前の大戦でも結界班が戦場で大きな功績を挙げているエリート部隊だ。そんなエリート部隊は宰相直属の

（ちよっと、待って……）

結界班は結界形成のスペシャリストのみで編成される特殊部隊。

宰相でもなんでもない水瀬如きが結界班を動員できるはずもない。また、結界班は平時全部隊が中国の東洋陣営の『本部』に待機しているはずだ。『魔女』と美鈴・朱雀が交戦状態に入ったのはついさつき、一〇分も経ってない。どうしてこの短時間に展開できているのか、あたかも美鈴が『魔女』と交戦状態に入ることが分かっていた……、のか。

「水瀬……、最初から」

「言うておくが、宰相様のご命令だからな」

茶髪、キツネ顔。何考えているかさっぱり理解できない変人。『宰相』と聞いて、次々とあの光景がフラッシュバックする。

美鈴は、あの男が嫌いだった。

初めてあの男を見たのは十年前だった。

母親に連れられて、東洋陣営の『本部』にいる父親の忘れ物を届けに行く、そんな極々一般的な目的で『本部』に行ったときだった。両親共々、それなりに有名な人物だった。だから『本部』の廊下ですれ違ったいろいろな人が母親に話しかけ、母親は愛嬌ある笑顔で楽しそうに談笑して、時には美鈴にまで笑いかけてくれた。

あのキツネ顔は、そんな一人だった。

だけど、他の人とは絶対的に違った。

幼い美鈴にでも分かった。

自身が感じた明確な恐怖と、本能的な拒絶の意志を。

母親は楽しそうにあのキツネ顔と談笑していた。

だが、美鈴は違った。

嫌な汗が全身から噴き出し、恐怖が全身を余すことなく駆け巡り、まるで蛇に感じがらめにされたように身体が一ミリも動かなかつた。

理由なんて無い。

ただ、本能が警鐘を鳴らしていたのだ。

「先日、インド支部が謎の魔術師の攻撃によって壊滅した。この時点で【世界呪術文化保護連盟最高意志決定機関・大老会】は直ちに

その魔術師の討伐を東洋陣営傘下の全部隊に伝達。これにより全戦闘部隊が臨戦態勢に入ったんや」

「インド支部つて、武闘派のマラナニヨガナンダ支部長の……？」

「『ピナカ』諸共潰されたんや」

「ちよつと待つて、ピナカはシヴァ神の槍。破壊の象徴よ？ 神の武器は神でしか破壊できないのになんで『ピナカ諸共』なの？」

「生存者の言や。俺かて信じられねえ」

神の道具は神でしか壊せない。

神が使う道具は神が創りし聖なる品であり、その神独特の思念が籠もっている。人間はどれだけ知恵を付けようと、技を磨こうしても、結局は人間だ。それ以上でもそれ以下でもない。逆にそれ以上にも行けず、それ以下にも行けないのだ。だから、人間には神様の存在を信じることが出来ても、その道具を使うことが出来ても、神様が今この瞬間に思っていることは理解できない。神様が人間側に歩み寄ろうとしない限り、神様の存在すら認識できない。それが人間、ちつぽけな人間ごときが神様の創った道具を壊すことができるはずがない。これは『非日常の世界』の常識の一つだ。

なのに。

つまり。

神様の創った武器を壊す、ということとは

「まっつて。じゃあ、……『魔女』つて神な

ッ！！」

ズゴンッ！ と大地全体が大きく揺れ、ビリビリと結界が悲鳴を上げた。

まるで砲弾が着弾したような振動に、美鈴は大きく蹠踉めき、隣で水瀬が片膝を付く。

「チッ。結界班の封鎖結界でもキツイか……」

結界展開のスペシャリストである結界班の結界が破られるとなれば、それはもう手の施しようがない。

「んでよ、ここで美鈴ちゃんに提案や。二〇分でいいから『魔女』の相手してくれんか？」

「は？」

耳を疑う。

「それ相応の金は払う。この場を任されている責任者として改めて
スケープゴート『完全逃亡』に依頼する。『あの女を何とかしろ』」

ズゴンツ！ と先程よりも大きな揺れが襲い、無惨にもピキピキ
と結界に亀裂が走っていく。

「ちよつと待つて。『スケープゴート完全逃亡』は運び屋。傭兵じゃない。それに
私には無理。結界班の結界を破るような敵を相手にしたら数分だつ
て保たない」

ピナカはインドにおけるヒンドゥー教の最高神の一人、シヴァ神
の槍だ。大黒と呼ばれるシヴァ神は、神々の破壊の力を司っている。
そんな彼が手に持つ三つ叉槍が『ピナカ』である。そんな神の武器
を『魔女』は破壊して見せたのだ。神でしか神の道具を壊せないと
いう『非日常の世界』では常識中の常識を軽々とこの『魔女』は覆
してみせたのだ。そんな、神と同等、それかそれ以上の存在に、藤
崎美鈴という矮小な人間が挑んだって結果は見えている。それはチ
ーターと人間が競争するような、こめかみに銃弾が装填済みの銃の
銃口、指にトリガーがかかっている状態で相手と殺し合いをするよ
うなものなのだ。

「水瀬は、私に死ねって言うてんの？」

「俺は宰相様の命令通りに事を進めてるだけや」

組織は、怖い。

人を変えてしまう。

『教育』という名の『洗脳』で、人の価値観、存在意義、思考回路、
全てを変えてしまう。

ギリツと、美鈴の歯が唸る。

「……、水瀬は、私にどうして欲しいの？」

「宰相様が描いたシナリオの上で踊っていてくれればいい。ただそ
れだけや」

寸分も疑いなく、水瀬は言う。

「まあ、別に断ってもいい。強制はしない。でも、断った瞬間にこの街は終焉を迎えるで？ 美鈴ちゃんの友達も、思い出も、全部全部消してしまう。今回の敵はそんなヤツや。それでも、ええんならキャンセルしたってええ」

「水、瀬……」

怒りで、震える。

全ては計算済みだったのだ。

人質は『紅玉市とそこに生きる全ての生命と友人』。

街は、いくらでも修復できる。

が、人は無理だ。

出来ることは、幻術で『その人が生きてるように見せ掛ける』くらい。日常の人々は幻術に惑わされ、本来ならば死んでしまった人間を生きていると思わされている。しかし、所詮はまやかし、幻想だ。根本的な解決にはならない。『非日常の世界』では迷うことなく『証拠隠滅』と『秩序回復』の旗印の元に『日常の世界』の住人を騙す。そうやって、『日常の世界』の山のような犠牲者の上に『非日常の世界』の存在が伏せられているのだ。

「……ッ」

藤崎美鈴という陰陽師が『日常の世界』の住人たちを切り捨てられるほど非情な陰陽師ではないことをあのキツネ宰相はわかっていなのだ。どうやってこの紅玉市に『魔女』が襲来することを察知したのかどうかわからないが、こうなると確信していた。そして、どうせ美鈴と『魔女』が交戦状態になるということすら計画に盛り込まれているのだろ。でなければ、結界班という貴重な特殊部隊を投入してくるはずもない。

クソッ、と。

美鈴は歯を食いしばった。

ここで美鈴が戦闘を拒否するという選択肢を取れば『魔女』の破壊活動で、確実に街は消滅してしまう。

それは遠回しに美鈴の『日常の世界』を壊す、ということに繋が

る。

だってそうだ。

ここで『魔女』を止めないと、たくさんの罪のない人間たちが何も知らずに死んでいく。全てが終わった後、東洋陣営の部隊がまやかしの『日常』を上書きするだろう。

進藤ゆかり。

神田祐二、クラッチのマスター、クラスメート、学校の先生近所のおばちゃん商店街、魚屋のおじさん黒いスーツを着たサラリーマン学ランを着た少年の集団犬の散歩中らしいお爺ちゃん笑い合っている女子高生たち暇そうに客待ちしているタクシーのおじさんオーブンカフェで子供そっちのけにして楽しそうに談笑するお母さんたち杖を付いて歩くお婆ちゃん荷物を降ろしている宅配トラックの運転手　　ッ！！

ドンッ！

拳が、叩き付けられる。

「…どう　　すれば、いい？」

それを、藤崎美鈴という少女が容認できるはずがない。

「現在紅玉市に展開してる結界班は全部で四つ。対魔女用特殊攻撃術式の展開準備時間は二〇分。対魔女用結界を展開するのは三班。もう一班は繁華街全域を囲む。美鈴ちゃんは繁華街を囲む結界の中で何とか『魔女』を押さえつけといて」

まあ、と。冷酷に続けて、

「『鋒王』直伝の『白縫』シラヌイなら何とかなるやる？」

結果が、音を立てて飛び散った。

振動が美鈴の身体を揺さ振る。パキンッ！ と、ガラスが割れたような軽く澄んだ高音を響かせて『魔女』を封じていた結果が一瞬で砕けた。

水瀬はその様子に若干の苛立ちを砕けた結界に向けるが、直ぐに美鈴に視線を戻して、飄々と言った。

「じゃ、頑張つてな」と。

残酷なまでに、冷静に。

冷酷なまでに、飄々と。

「……ッ」

時間はない。

怒りを爆発させる時間など無い。

「一つだけ条件がある。朱雀を、安全な所に」
拳を握る。

「了解。ほな、頑張つてな」
前を見る。

眼前、『魔女』。

敵は『魔女』。

状況は、絶望。

「……」

「まあ。そんな顔をするな」

少年・世界崩壊はあからさまに、目の前の老紳士に『拒絶』の意志を見せた。

「お前は、そこまでヒマなのかよ……」

「そのようなことはない。私は組織のために動いているんだ」

老紳士の一言に世界崩壊は溜め息を付いて見せ、言う。

「今度は、何だ？」

「今度、我が陣営に極秘特殊部隊を新設しようと思う」

チツと、世界崩壊は舌打ちして、

「東洋陣営の内情を知っている俺に協力しろ、ってか？」

「話が早いことは結構だ。私は新設部隊の隊長に世界崩壊、お前を据えようと思う。お前が応じてさえくれればいい。権限は私が保証するし、反対派は私が押さえ込む。お前に降りかかる障害は全て取り払おう」

シンと静まり返る一室。絡み合う二人の視線、思惟。彼らはピクリとも動こうとしない。固く厳しいピリピリとした重く鋭い空気が二人を打つ。

「権限は、テメエが保証すんだな？」

先に動いたのは世界崩壊。

「無論」

老紳士から視線を外して世界崩壊は腕を組み、

ほどなくして、笑った。

「部隊名は、決まってるのか？」

「【分捕りは早く、略奪は速やかに来る（マヘル・シャルル・ハシユ・バズ）】。仮称だが、な」

「【分捕りは早く、略奪は速やかに来る（マヘル・シャルル・ハシユ・バズ）】……か」

老紳士の声を聞き、ラストオーダー世界崩壊は不敵に復唱し、やがて不敵に笑うと呟いた。

「どうせ、断ればずっとここに閉じこめられるか殺されるかなんだろ？」

第六章 汚れた世界の汚れた神に祈ることはもう辞めた

四〇代。キツネ顔が特徴のその男は、外資系高級ホテル最上階の煌びやかな客室から、全面強化ガラス越しに無機質なコンクリートジャングルで成り立っているこの国家の首都を臨んでいた。

「かつて、この世界を創造した偉大なる『王』がいました」

全面ガラスの向こう、コンクリートジャングルに語りかけるように、

「『王』は自分の身の回りの世話をするためだけの存在を創造しました」

投げ掛けるように、

「彼らはその存在意義に従い、『王』のために粉骨砕身しました。

だが、偉大なる『王』は驕りが過ぎた。彼らは自身の創造主である

『王』に反旗を翻したのです」

はたまた、歌うように。

「長きに渡る戦乱の後、彼らは遂に『王』を討ちました。ところが、彼らは空位となった『王』の座を巡り戦いを始めました」

そこまで言い、キツネ顔は振り返る。

「戦乱が続いた期間は何万年とも何千年とも言われています。いつしか彼らは戦うことに疲れ、『王』が創造した高大な大地に消えていきました」

キツネ顔は『本部』より呼び寄せた女の顔を見、微笑みかけた。

「貴女は愚かな話だと思いませんか？ 『闇夜棘路』^{アンヤキョク}」

そこには、少女がいた。

腰まで届く黒髪にあどけない顔立ち。身体の線にもまだ幼さが残っている少女だが、彼女は東洋陣営の諜報活動を一手に引き受ける【血塗れ衆】の頭目で、数ヶ月前に紅玉市で西洋陣営特別強襲部隊

【我が主よ、何故私をお見捨てになつたのですか（エリ・エリ・レマ・サバタクニ）】を『完全逃亡^{スケレブゴート}』の協力を得て迎え撃ち、【我が主よ、何故私をお見捨てになつたのですか（エリ・エリ・レマ・サバタクニ）】の核である隊長・副隊長を含む幕僚団を壊滅させ、戦力的に事実上無力化させたという大きな功績を残している。

「そのような話、私は聞いたことはありません」

「でしょうね。私も腐りかけていた文献を偶然見つけて知つたのですから。個人的に、このような神話の類は好きなのでね」

キツネ顔は全面ガラスから離れ、部屋中央に配置されている未処理書類満載のデスクに向かう。デスクは全体に精巧な装飾が施され、同様の装飾に包まれた木製イスとセットになっている一品のようであるが、その上にのしかかっている無粋極まりない未処理書類群のお陰ですっかりその輝きを失ってしまった。

「貴女を呼び寄せたのは他でもありません。貴女に『魔女』について情報収集して貰いたいのです」

「失礼ですが、…『魔女』とは？」

「ああ、説明不足でしたね」

山積みとなつている書類群の中、唯一僅かな空白地帯に書類一枚広げられないことがわかるとキツネ顔の宰相は無理矢理ブルトーザーのように押し広げて、空白地帯を強引に開拓していった。

「腐りかけた文献によりますと、『魔女』とは太古より『真性の魔術行使能力』を継承した『人間』の総称のことらしいです」

「らしい…？」

「よく分からないのです。ありとあらゆる文献を調べさせています。が…、該当する文献がなくて困っているのですよ」

未処理書類の山から、彼は一枚だけ手に取り、先程開拓したスペースに未処理書類を広げる。それからペン立てから一本万年筆を引き抜き、サラサラと書類に走らせていく。

「まあ、今把握出来ている事実はこれぐらいです。だから、情報収集スキルの高い貴女を呼び寄せたのですよ、闇夜棘路」

あ、そうでした。と、更にもう一枚未処理書類を手にとって、

「これは極秘案件ですが、昨日その『魔女』の攻撃によりインド支部が壊滅しました」

「インド、支部が…?」

闇夜棘路は呆然と、まるでキツネ宰相の言葉をそのまま聞き流したように、ボンヤリと口を開いた。

「極秘案件です。全く、情報操作が大変でしたよ。これは【大老会】と私に、あと対西しか知り得ない情報です。分かっていると思いますが、口外しないように。インド支部が潰された以上、我々も本腰を入れないと、　　っと、これ」

キツネ顔は書類をテーブル越しに闇夜棘路へと差し出す。

「命令書、ですね」

「ええ。では、頼みましたよ。闇夜棘路」

—

「炎獄」

美鈴は叫び、両指を複雑に組み合わせる。

練り上がる魔力。

張り詰める空気。

「命ず。水は木を生じ、木は火を生じさす」

陰陽道の基礎は五行思想にある。

五行とは、万物を構成する五大元素『木・火・土・水・金』の総称で、五行思想とは『五行相生』と『五行相克』の理を表し、自然は全て輪廻の如く循環する世界であることを示している。

『五行相生』とは、それぞれの要素同士がお互いに良い影響を与え合うという考え方をいい、それすなわち『木生火、火生土、土生金、金生水、水生木』つまり、『木』は燃えて『火』を生み、『火』が燃えた後には『土(灰)』を生み、『土』が集まりそこからは『金(金属)』を生み、『金』は腐食して『水』を生み、『水』は『木』を生む。このように『木・火・土・金・水・木』の順に良い影響を与え合うというものが『五行相生』という考え方である。これとは反対に、それぞれの要素同士がお互いに悪い影響を与え合うという考え方を『五行相剋』という。『木剋土、土剋水、水剋火、火剋金、金剋木』つまり、『水』は『火』を消し、『火』は『金』を燃やし、『金(金属)』は『木』を切り倒し、『木』は『土』を征し、『土』は『水』を食い止める。このように『木・火・土・金・水・木』の順に悪い影響を与え合うというのが『五行相剋』という考え方である。

「群青の闇、新緑の朝」

指で結ぶ印を次々と組み替え、同時に呪を紡ぐ。

本来、陰陽師には長々と呪を紡ぐ必要はない。どんな流派でも『陰陽師』と名乗るには『五行相生』と『五行相克』の理を自分の物にしなければならぬ。陰陽師にとってこの二つは基本中の基本だ。それこそ、その場の勘や気分やセンスで場に存在している五行全てを駆使して術式を組み立てなければならぬ。

「連鎖、栄光、天子、絶無、懇望、随感」

印を組み上げ、魔力を練り上げ、呪を唱える。

陰陽師は『五行』を自在に操り、その結果産み出された非日常の現象たる『術』を駆使して敵を葬る。

けれど『術』の規模が大きければ大きいほど、操らねばならない『五行』も増えてしまう。それは窯の温度を高温にしたければ、比例して使用する薪が増えるように。だから陰陽師は『印』を組み立て、呪を紡ぐ。それは感覚だけでは操ることが出来なくなった『五行』を統制する新たな楔。組み立てる『印』と淡々と放たれる『呪』は高度な『術』を間違つことなく発動するための補助動作なのだ。

「我が左に名工」

美鈴は五行を呪と印で捕え、自身の内の魔力と結び付ける。

「残光さざめく世の理を」

練り上げる。

呪と印。

次へ紡ぐは、最後の二小節。

「今、滅せよ」

瞬間。

藤崎美鈴が印の組み上げきり、魔力の練り上げを完遂させ、呪の詠唱を完成させた、その瞬間、彼女は発動への最後のスイッチを、最後の一小節を紡いだ。

「^{シラヌイ}白縫」

直後。

藤崎美鈴が右腕を乱暴に振り下ろすと、

一枚の、風に捕らわれた紙切れのように『魔女』が吹き飛ばされた。

二

初めての『出会い』は、数年前だった。

初めて自分を心から必要としてくれていると、信じていた『彼』にフラれ、『彼女』はあてもなく繁華街を歩いていた。

世界が、腐って見えた。このまま酒にでも溺れてしまおうか、どうせ一度きりの人生。馬鹿な無茶でもやっつけてしまおうか。自暴自棄の極地に陥っていたその時。

死のうと、思った。

どうせなら、飛び降りがいい。

そして、屋上に立

と。

悲しみに暮れる女は『それ』と出会った。
『それ』は黒髪が似合う美しい女性だった。
だが、『それ』は言った。
「『ノ、ゾム』」

ただ、そう一言だけ。

コツ、と。

ローファーが廃墟を打つ。

ゆっくりと少女は歩を進める。

ゆっくりとゆっくりと。

「来なさい」

口にされた安い挑発、そして敵に対する命令。
シュンツ、と。

風音を唸らせ、漆黒の波動を纏う漆黒の女『魔女』が少女へと迫る。『魔女』は纏う波動の一部を鋭利な槍に具現化させて手に握り、その毒手のように撓る腕を少女目掛けて振るう。対して、少女は明確な対応策を示さない。逃げようともせず。同等の、またはそれ以

上の威力を持つ攻撃をぶつけて応戦しようと思えもせず、ただ、重そうに右腕を『魔女』に翳す。それは漆黒の槍が彼女を突き刺そうとするその軌道上。そして間違はなく彼女の右腕ごと、少女は槍ごと貫かれ、無様にも甲高い悲鳴を上げ

ない。

悲鳴を上げない。

否。

それ以前の問題だった。

槍の穂先がたった一ミリ彼女の右腕に触れた瞬間、音を立てて碎け散ったのだ。

あつけない。

それはまるで赤ん坊が小枝をその細くか弱い腕で折るように、ハサミでA4の用紙を一枚切断するように驚くほどあつけなかった。

が、その程度では『魔女』は動じてなかった。

瞬時に状況を判断し、『魔女』は後方へと飛ぶ。少女から数メートルの間合いを取ると、『魔女』は両手に渦巻く凶悪な漆黒の球体を形成させていった。それはこの紅玉市繁華街を一発で消滅させた一撃、戦闘経験豊富な朱雀さえも球体が放つ圧倒的な凶悪さで竦み込ませた一撃必殺の攻撃。『魔女』はその凶悪な球体を両手に一つずつ浮かべ

「……オ、ワリ、　　ダ」
語尾と共に『魔女』は虚空に消え、少女の背後を突いた。
両手には凶悪な一撃。

腕は手と繋がっている。腕が首筋に叩きつけられるように撓り、その延長線にある掌、そして漆黒の一撃。間違いなくそれは少女の首筋に命中する軌道を走る。

彼女はただの人間だ。陰陽師というソフトを挿入しているが、ハードは人間なのだ。パソコンだってハードがあつてこそそのソフトだ。そんな人間である彼女が繁華街を一撃で崩壊に陥らせた一撃をまともに受けたらどうなるだろうか。その問いの答えを待つより、自身でさつさと考え出した方が圧倒的に早い。

調教用の鞭のよう、『魔女』の一撃は真っ直ぐ少女の首筋に叩き込まれる。

「『シネ』」

突き放すように冷たい二重奏の一言。角度は完璧。威力も申し分ない、人間程度の強度なら擦っても確実に全身が唯の肉片に変わる。その一撃はただ真っ直ぐ。少女は抗うことはせず、死へと誘う一撃を受け入れる。

紅玉市の繁華街に立ち並ぶオフィスビル群を一瞬にして瓦礫へと帰した『魔女』の一撃。

少女は、ようやくここにきて動く。

『魔女』の絶望的な一撃に、少女は右腕を伸ばす。

それはあまりにも無様だった。

繁華街を一撃で殲滅させたを右腕一本で受け止められるはずがない。そんな一撃を受けたのなら、その人間は血液一滴垂らさずに、そして一片も一ミリの肉片すら残さずこの地上から消し飛ばすことになることは目に見えていた。

「『オワリ、ダ』」

高音と低音のシンクロが、初めて生物らしい感情が籠もり、

た。
パンツと。まるで拍手でもしたかのような濁いた音が響い

一ミリも残さず人間は吹き飛ばとも言うのに、彼女はしっかりと足取りで立っていた。

衣服の損傷もなく、当然、傷を負っているわけでもない。特に、何もなかったかのように、少女は立っていた。

漆黒の槍を受け止めた、その瞬間と同じ体勢でいた。

「まだ。この程度なら捌ける」
少女の声。

今まで無表情に街を、人を、世界を蹂躪してきた『魔女』の表情が明確に代わり始める。

少女の右手の先、そこには『魔女』の左手がある。

それは丁度、両者の掌が組み合う状態。

「『バカ、ナ…』」

高音と低音がシンクロする惨めな声を上げて、ようやく『魔女』は己の掌を見る。

そこで、ようやく気づき、驚愕する。

あるはずの漆黒の球体がない。街一つを廃墟にした一撃が、どこにもないのだ。破壊者である『魔女』かて、この必殺の一撃をポンと出せるわけではなかった。それは古より強力な力を継承する『魔女』であろうと、だ。

「信じられないの？ 自分の目で見ているのに？」

グギジツ、と。『魔女』の左手が嫌な音を立てて軋んだ。

「ヨツ、タイ、ザイン、 ヲ、 カバ、ウカ」

怒り。それだけを表情に映し、『魔女』は少女を睨み付ける。強引に少女の拘束を振り払い、跳躍。一気に数一〇メートル近くの間合いが開ける。少女は口元に若干の笑みを浮かべ、追いつくことなく無防備にその姿を見送った。

少女は優雅にも一息付くと、右手を自身の身体に馴染ませるように伸縮させ、そして、拳を力強く握り締める。

「どうしたの？ そんなに自分の攻撃が相殺されたことが不思議なの？」

酔っぱらいの千鳥足。そんな足取りで少女は一步前が出る。

「教えてあげましょうか、『魔女』」

また、一步。

「話は本当に簡単。魔力同士がぶつかり合えば、魔力の弱い方が押し負ける。この世界の常識。私と朱雀の一撃が。貴女が『無意識に垂れ流してる魔力』に負けたように」

もう、一步。

「だから、それは今回も一緒。貴女が私を殺すために極限まで張り詰めて削り上げた刃より、私の右手に宿った魔力に劣った。ただそれだけ」

そして、一步。

「理解できた？ 貴女が私に突き立てた刃より、私が右手に集中させた魔力の方が強い」

最後に、一步。

「さて。御託は御仕舞い」

右手を、構える。

「御休みなさい『魔女』。良い夢を」

狙う先には、『魔女』。

東洋陣営所属の特殊部隊・結界班がその任務を終えるまで。残り、十八分。

「マフィアかよ……」

老紳士から支給された漆黒のロングコートとスーツを見て、^{ラスト}世界崩壊は嫌味を放つ。

「世界を暗躍している我らとて、マフィアのようなだろうか？」

「まあ、間違つてはいねえな」

「終わつたら呼んでくれ」

「あ、どこ行くよ？」

「外で待つてる」

^{ラストオーダー}世界崩壊は意外な老紳士の気配りに、浮かんだ笑みを押さえきれないでいる。

「俺は構わねえぞ？」

「例え、男だろうと人様の着替えを覗くなんて無粋なマネはせぬよ」

そう、シルクハットを押さえて老紳士は出て行った。^{ラストオーダー}世界崩壊は

一通りにやけた後、患者用の寝間着を脱ぎ捨てて真新しい漆黒のスーツに袖を通した。それから数十枚、束ねておいた術符を懐に押し込み、壁に貼り付けてある鏡に向かって適当に寝癖を直し、仕上げにロングコートを袖に通す。

「どーよ？」

と、^{ラストオーダー}世界崩壊は鼻高々に内なる偉大な神に賞賛の一言を求めるが、

《我、汝忠告、須》

「んだよ……？ せっかくささ、テンション上がったのによ」
ガックシと肩を落とす

《汝、最早。陰陽師、非》

「…は？」

内なる『天帝』の一言に思考が完全にフリーズする。というか、意図が理解できずにいる。

《汝、最早、非人。汝、魔力精製不可》

「…ちよつと待てよ」

言葉が理解できない。一度で飲み込めない。

(俺は、人間だ)

そして、ラストオーダー世界崩壊は気付いた。

ラストオーダー世界崩壊は生きている。確かに、戦局挽回のために一度この身を捨てた。だが、どういう経緯で『生きている』いるかなんて考えもしなかった。

「俺は、…人間、じゃねえのか」

《肯定》

考えてみればそうだった。

ラストオーダー世界崩壊は正しく『生きて』いる。

しかし、『生きて』いれば確実に人間なのだろうか。

それは絶対に違う。地べたを進む『蟻』だって『人間じゃないのに生きて』いる。『鳥』だって『魚』だって『植物』だって。

「じゃあ、俺は一体何者なんだ？」

《汝、最神、近、存在、也》

重く、『天帝』の遠雷の如く一声が、心身に深く突き刺さり、揺さ振りをかける。

「神…？」

『天帝』は満足そうに唸って見せて、

《我、汝、融合須。我汝。汝我、也》

遠くで、その声が響く。

つまり、こういうことか。

「俺は人間じゃない。どういう仕組みか知らんけどお前と融合しちまった、ってか？」

肯定の呻り声が、聞こえる。

「つまり、あれか。人間じゃないって事は魔力練れねえのか？」

《肯定》

「即答すんな。へこむだろ？ 俺は今この瞬間に、陰陽師としても否定されたんだぞ？」

《残念》

「そこ。なんか、てか非常に腹立つ」

とりあえず、ラストオーダー世界崩壊は自身の思考をフル回転させて現在の状況把握に努める。

ラストオーダー世界崩壊は人間ではなくなってしまった、ということ。

ラストオーダー世界崩壊は自分が人間でなくなった「原因」は理解できるが、どうしてそうなったのか、つまり「理由」は分からない、ということ。

ラストオーダー世界崩壊は「天帝」という神と融合したらしい、ということ。

「ほとんどアレじゃん。不明じゃん……」

と、ここまで思考を巡らせて、一つの可能性を見つけ出した。

「俺は、人間じゃないんだよな」

肯定の呻り声を待って、ラストオーダー世界崩壊は続ける。

「テムエの見立てだと、神である『天帝』と融合した状態なんだよな？」

また一つ、肯定の呻りが聞こえた。

「て、ことは、だ……。俺は」

息を吸って、

「俺は、…神の力使えるってこと、か？」

この『天帝』の見立てが真実ならば。

『ラストオーダー世界崩壊』は『天帝』であり。

『天帝』は『ラストオーダー世界崩壊』でもある。

「なるほど。神なら…悪くねえや」

クスクスと平然と笑って、その笑みを崩さずに、ラストオーダー世界崩壊は言う。

「『天帝』。テメエが俺なら俺はテメエの力を使えるってことだな？」

《鍛錬、必要》

「ハッ！ 問題ねえや」

ラストオーダー世界崩壊は懐にしまい込んだばかりの術符を全部引っ張り出すと、

「こいつは、用無しだな」

それを片手で握り潰しながら、ラストオーダー世界崩壊はグシャグシャと不適な笑みを浮かべた。

第七章 狂うこと自体は決して悪いことではない

「シュツ！」

一気に息を肺に溜め、藤崎美鈴は世界最高クラスの高速移動術式・飛脚漣を行使。繁華街を廃墟変えた『魔女』の一撃を掻き消した凶悪な右腕と共に『魔女』の背後、そして背中に右の一撃を叩き込んだ。驚くべきスピードと莫大な魔力を宿した美鈴の華奢な細腕は、易々と『魔女』の背を貫き、叩き込まれた『魔女』は空へと吹き飛ばされる。

が。

「ちっ」

手応えが、小さい。

インパクトの瞬間に『魔女』は背を反らすようにして衝撃を殺していたのだ。美鈴が苦々しく表情を歪め、一方『魔女』は空中で体制を整えると両手に漆黒の球体を浮かべるとそのまま美鈴に向けて発射する。

「芸のない。攻撃」

風声を発しながら迫り来る二つの漆黒の波動に美鈴は一瞬だけ嘆息し、美鈴の間合いに入ったその直後、右腕を一閃。二つの波動は爆ぜ、巻き上げられた砂埃が周囲の視界を奪い、ザンツ！ という鋭い風音が轟然。『魔女』は美鈴の眼前、一メートルも満たない間合いに侵入し、手に持つ黒槍は美鈴の心臓を串刺しにする軌道を描いていた。その軌道に合わせ、美鈴は身体を後ろに倒して、それは丁度ブリッジでもするような体勢で鮮やかに躲し、そのまま爆転。そして着地の瞬間、飛脚漣。一瞬にして『魔女』の懐へと飛び込み、右腕を振るう。美鈴の右は『魔女』の顎を捉えた。が、その動きを『魔女』は予測していた。『魔女』は重心を左に傾けて、バックステップ。結果として美鈴の右は空振りに終わる。

が。

狙い澄ましたかのように、『魔女』が着地したその瞬間に『魔女』の足元が吹き飛んだ。それは地中に仕掛けてあった地雷でも踏んだかのように。

なんてことはない。

藤崎美鈴は、何も右腕だけで『魔女』を狙っていたわけではないのだ。

美鈴の右腕には『白縫』発動で膨大な魔力の塊が覆っている。その塊の一部、拳を振るったその瞬間に火行を刻み『爆発物化』させ、遠心力によって飛ばされた美鈴の『爆発物化』された魔力を『魔女』の背後に飛ばす。結果として切り離された魔力が『魔女』がバツクステップで移動したそこに着弾、爆発しただけなのだ。

美鈴は満足そうにニタリと笑い、その一瞬のスキに一気に『魔女』の懐に飛び込み、今度は確実に胴体を打ち抜いた。

「ハ、ハガツ」

身体の芯から揺さぶるような重く鋭い一撃。強制的に肺から空気が吐き出され、ゲホゲホと腹部を抱え込むようにして『魔女』は蹲る。

「一つだけ聞く」

美鈴は『魔女』の側頭部を『比較的』無害な左手で掴み、

「お前は何者？ そしてどうしてこの街に来たの？」

「ワレ、ハ…」

澄み切った高音と、揺さぶるような低音。相容れなぬ二つがシンクロし、言々句々を紡ぎ出していく。

「フクシユ、…ウシャ…。ワレ、…ニ」
殺那。

漆黒の波が。一気に、噴き出すように。その漆黒のオーラは『魔女』の胴体、足、腕、頭、髪。『魔女』を構成する部位全てから溢れ出、何万もの人間の殺意を、悲しみを、怒りを練り込んだような禍々しく鋭い波動が爆発した。

「チツ」

即座に美鈴は危険と判断。手を放し、バックステップを踏んで背後に逃れる。

「ワレ…ニ、ソムク、…モノ…、ニ、ハ シ、 ヲ…」
瞬間。

「ケ、ス」

漆黒の波動は幾万もの枝に枝分かれし、その枝はありとあらゆる武器に姿を変えた。殺戮能力が低い物から高い物まで。刀剣から短剣から長槍から大斧から火器から弓矢まで。

「ツ、馬鹿な…」

それは数万の大軍に睨まれているようなプレッシャー。漆黒の武器が、槍が、銃や、刀や、弓や、剣。全ての矛先が藤崎美鈴に集中している。

「こんなの…、敵うはずなんて

とでも、」

藤崎美鈴は戯笑し、

「言うと思った？」

右腕一閃。

少女の右腕は止まらない。

その破壊者はたった『一閃』しただけで、幾万もの武器、その大半が斬り裂かれた、空中に漆黒の蒸気となって霧散していく。

「その程度なら。簡単。数に任せて、なんて愚策はつまらない」

ドンツ！ と右足を踏み込む。

それはまさしく矢のように、美鈴は殺戮能力を存分に備えた武器の数々など意にせず、一瞬にして間合いに進入。右。必殺の一撃を『魔女』の首筋一直線に繰り出すが、どこからともなく頭れた漆黒の武器が何十も集まって作られた即席盾に阻まれ、その必殺の一撃を食らった武器で作られた即席盾は脆くも霧散。その間にバックステップで『魔女』は間合いを取り、小さく顎を振る。それは一斉攻撃の命だ。漆黒の武具群が四方八方から藤崎美鈴に殺到。

「フツ！」

左手で懐から火行の術式を刻み込んだ術符を掴み取り、手首のヌナップで投擲。空中に投げ出されたそのコンマ一秒にもみたぬ間に術符は爆発。左方より攻め入ってくる剣、槍、矢、銃、斧などを一手に吹き飛ばし、右一閃を同時進行。左右方面からの敵勢を一挙に排除し、飛脚漣。瞬時に空中に踊り出ると、前方から美鈴を殺害するはずだった剣、槍、矢、銃、斧が、後方から美鈴を殺害するはずだった剣、槍、矢、銃、斧に衝突。双方共に紙屑のように破れ去った武具を美鈴は空中で見届け、再び飛脚漣。『魔女』の背後に回るが、『魔女』は自ら傍にあった槍を手に握ると、現れた美鈴に槍の穂先を向けた。瞬間、その槍を美鈴は右での確に弾き返し、同時に左手で数十枚の術符を引き出して印を組んだ。

「禁魔結陣」

ばらまかれた数十枚の術符が織り成す結界。それは『藤崎の陰陽

師』に古より脈々と受け継がれ、今日までここにある。その用途は外部からの干渉制限と拘束。

「ッ？」

だが、その結界は『魔女』を捕らえることはな

風音。

本能的に美鈴は身体の重心を左に倒すと、さっきまで頭部が存在していた場所を槍が突き抜けた。美鈴はその光景に肝を冷やしつつも、そのまま左に重心を倒した勢いそのまま爪先で方向転換、右腕を縦に振るうと、切り離された魔力が炸裂する前に『魔女』は虚空へと消え、美鈴は上空を一瞥。空中には黒の女、手には黒い剣。『魔女』は空中でその剣を大きく振りかぶるとそれは落雷のようなスピード、美鈴は躲すことなく高速で迫る槍の軌道を見切り、易々と右手で掴んで見せた。

「な、めないで」

槍を握り潰し、美鈴は空中の『魔女』を捉える。

が、彼女はまだ気付いていない。

それは自身の限界と『魔女』の能力。

東洋陣営所属の特殊部隊・結界班がその任務を終えるまで残り、十四分。

「アンタは、あの娘をどう、したいの？」

その問いに、目の前の青年は答えない。

「美鈴と修行してたときは、アンタはそんなんじゃない？」

その問いにも青年は答えず、背を向けてただただ数キロ先の戦場を臨んでいる。

「アンタは、…美鈴を殺したいの？」

青年を殺すように睨み付けている赤銅色の長髪を持つ藤崎美鈴の相棒・朱雀は回復してきた身体を引き摺りながら、ゆっくりと青年に歩み寄る。

「美鈴は、…アンタにとって得体の知れない敵の当て馬程度の存在なの？」

「まあな」

「まあな、って」

「昨日、な。北アメリカに西洋の戦闘部隊が集結しつつあるんや」

「それって…」

それは間違いなく、

「んああ。先日、ここ紅玉市で勃発した戦闘、スケープゴート『完全逃亡』の協力

を得た『東洋陣営の魔術師・闇夜棘路』が、敵方の組織、つまり西

洋の特別強襲部隊【我が主よ、何故私をお見捨てになったのですか

(エリ・エリ・レマ・サバタクニ)を、それも七年前の大

戦勝利の立役者たる天才魔術師・ロイ＝ランフォードと北欧神話最

高神の聖槍グングニルの使い手・アレクシア＝ランランヘルスを『含

む』優秀な幕僚団諸共塵に還したあの戦いの報復行動と取ってええ

な。ヘタしたら戦争になる。そんなときに牽制行動しなきゃウチは

速攻で西洋に潰される。こんな事態に『魔女』に全軍注ぎ込むわけ

にもいかへん。しかし『魔女』が暴れている以上、対処しないわけ

にもいかん」

数ヶ月前。

極東の小国の一都市、ここ紅玉市に一人の魔術師と一組織の特殊部隊が侵入した。魔術師は東洋陣営から西洋陣営に送られたスパイであり、その成果であるある魔具を手にしていた。一方、特殊部隊はそんなスパイである魔術師を捕捉・殺害次第、盗まれた魔具を奪還しようとしていた。それは集団対個人の戦い、魔術師にとって面白いくらい絵に描いたような絶望的な状況だった。そんな時、危機迫るときにその魔術師は紅玉市に事務所を構えていた『非日常の世界』随一の運び屋『完全逃亡』^{スケープゴート}の二人と偶然接触し、『多大な犠牲』を払って何とかその特殊部隊を撃退したのである。

撃退。

より正確に言うならば『その特殊部隊の隊長を含む優秀な幕僚団』を撃退した。あとから東洋陣営が行った調査によると、特殊部隊を構成していたのは皆特殊部隊の兵士としては新兵ばかりで、歴戦の猛者たちは温存されていたということが判明した。つまり、紅玉市に出陣してきた【我が主よ、何故私をお見捨てになったのですか（エリ・エリ・レマ・レマ・サバタクニ）】の正規人員は隊長・副隊長などを含む『幕僚団』のみだったのだ。一見、西洋陣営は大した損害を受けていないようにも思えるが、それは違う。新兵たちの指導を行っていた特殊部隊隊長を含む幕僚団は一人残らず壊滅したのだ。それは丁度、敵の頭だけをピンポイントで狙撃したようなものである。

だが、そこが問題なのだ。本来、西洋陣営の特殊部隊は通常部隊に組み込めぬような者たちを、通常部隊から追い出されたような連中を集めた集団だった。とてもじゃないが皆々一筋縄ではいかない連中ばかり、故に強力なカリスマ性を持つ隊長と彼らを統率する方法を考え出せる優秀な幕僚団が必要だったのだ。

しかしその優秀な人材はもういない。となると、誰がその猛者たちを統率できるだろうか。頭をもぎ取られた人間が行動できるかどうか、そう考えて貰えば分かりやすいかもしれない。

「今の【我が主よ、何故私をお見捨てになったのですか（エリ・エリ・レマ・レマ・サバタクニ）】は血気盛んでくせ者魔術師を統率できず

事実上壊滅状態や。けどな、西洋陣営からすれば東洋陣営にケンカ吹っ掛けるにこれほど極上の理由付けはない。恐らく西洋の連中、戦争しかけてくるつもりや」

けどな。そう青年は言葉を切って、

「今の東洋陣営に西洋の連中相手に出来るだけの余裕はないねん。なにせ、得体の知れない『魔女』が大暴れしてん。外から睨まれ内から破壊され、そんなときに全く不幸中の幸い。顔利く美鈴ちゃんの街に『魔女』現れてくれたんや。こうなったら、ヘタにウチの部隊使うより組織外の強力な戦力である美鈴ちゃんを使えばウチの部隊の消耗も動員にかかる費用も最小限に抑えることが出来し、なにより牽制任務中の部隊を引き抜かんですむ。どや、合理的やる？」

犬歯を剥き出しにして、ヘラヘラした普段の表情からは想像も付かないくらい凶悪で冷淡な笑みを朱雀に向ける。

「アンタは……」

「東洋の魔術世界を仕切ってるのは【世界呪術文化保護連盟】って組織や。【世界呪術文化保護連盟】の上層部の決意意志向判断断が全て。確かに七年前の大戦で大分弱体化したけどな、宰相様の御尽力で今や西洋の連中とも互角、それ以上に殺り合える組織力だつてあるんや。アンタらみたいなちっぽけな陰陽師一人血祭りに上げるなんて造作もないんや、で？」

朱雀は俯く。長く美しい赤銅色の髪がダラリと朱雀の顔を覆い、ギリギリと歯が砕けてしまいそうなほどの力が加えられていく。

それは絶対的な悲しみだった。

それは絶望的な怒りだった。

組織は人を変える。

組織が行う『教育』は『洗脳』だ。

組織は何人もの人が集まって初めて成り立つ。その成り立った組織の頂点にはやがて人間が付く。その人間は配下の人間を教育するのだ。

組織と自分のために全てを捧げよ、と。

ダークスーツに黒いロングコートの男が少女を宥めた。

「うるさい！」

男に強烈な抗議を叩きつけたその少女の名は、リオーナ^ニオルフェニスタ。

見た目、一二歳から一六歳くらいの少女。些か体型は発展途上と言わざるを得ないが、その容姿は『西洋人形のように可愛らしい』と形容でき、西洋人独特の色白委肌^ニに東洋人にはないだろう鮮やかな碧眼。髪は緩やかにカールされた金髪で相当手の込んだ手入れをしているようで枝毛も見当たらず綺麗に整っている。そんな彼女は、うつつら水色の可愛らしいワンピースに隣の男と全く同じ漆黒のロングコートに袖を通していた。その組み合わせは合っているようで絶妙に間違っているような、風格漂うベテラン鬼刑事と我が儘な女子中学生が同居しているような奇妙な感覚である。

「ツマンナイツマンナイツマンナイツマンナイツマンナイツマンナイ
イッ！」

捲し立てるように金髪少女・リオーナ^ニオルフェニスタは連呼する。

「駄々を捏ねるな」

リオーナの隣にいる男は冷たく突き放すが、リオーナはこれしきのことでは止まらない。

「ツマンナイのせっかくせっかく【我が主よ、何故私をお見捨てになつたのですか（エリ・エリ・レマ・サバタクニ）】の『異教拒殺』^{ハウンドキラー}

や『深淵荒涼』^{アウトエント}とかさ何だっけッ？【我が主よ、何故私をお見捨て

になつたのですか（エリ・エリ・レマ・サバタクニ）】の変人幕僚団共ともう少しで心中しなきゃいけないってとをさ何とか何とか何とか死にかけてくれたばかりかけてた男の子カワイソウだったから捕虜にして逃げ出してようやく戻ってきたのになんでなんでなんで『震天空爆』^{アルファオメガ}なんかから緊急の呼び出しされなきゃならないのかなああああああああああああああああ　　ッ！」

リオーナの『今猛烈に機嫌ワリいんだよこのヤロウ、っーかテメ

見てんじゃねえ見せ物じゃねえんだクソ共が何か文句あつか、ああんん？』というそんなテンションで、ドカドカと古い回廊を破壊しかねない勢い＋見た目にあるまじき大股で横行闊歩しながら繰り出されるマシンガントークに隣の男はあからさまに表情を歪める。

が、リオーナはそんな男の様子などお構い無しだ。

「だいたい何よ何よ今日はジャパン一押しロックバンド『RISE』のニューシングル発売日だってゆーのにどうしてこんな土臭い『本部』なんか呼び出されないといけないの？乙女だっているあるのにさ基本的人権はないわけ魔術師には酷いよ酷いよいやこれはもはや非道いどーしてどーしてさ『日常の世界』では保証されていることが保証されないわけ非道いツマンナイツマンナイツマンナイいいいいいいいいッ！」

念のため確認しておくが、彼女たちが今いるのは西洋の『非日常の世界』を仕切っている【世界魔術文明保存機構】の心臓部たる『本部』だ。その『本部』の所在地は地下世界。地下世界というのは勿論地下にある。地下にあるということは四方八方をコンクリートないし壁に囲まれている。壁に囲まれていると言うことは音が外界に逃げていかず反射する。つまり

「五月蠅い。リオーナ！オルフェニスタ」

「グ・レ・イ・スうゝ…。レディにそーゆー態度取るわけえゝ？

こんな可愛くて無垢で純す

「お前ほど『無垢』と『純粹』が似合わない女はこの世に一人だけいない」

「ああああああんんんんんんんんんんんんんんん…？」

「静かに出来ないクズ女は死ねばいい」

「て、ンめえ…」

「気に入らなければ前文訂正。お前を構成する全物質一切合切一片も地に帰ることなく消える。お前に刹那でも関わった物質はもう既に有害指定。お前が歩いたその敷地、国連認定の有害汚染土壌なのだから」

「ウオツケイイイイイ…、　　そこまで殺し合いしてえんなら
テメエ、このリオーナ^ニオルフェニスタ様が直々に死へと導いてく
れるわ…」

そんなこんな会話と殺気を繰り広げながら長い回廊を進んで行
くと、やがて奥地に薄汚れた大きな扉が見えてきた。扉は大した装
飾もなく茶色で、部屋の用途を知らせてくれるプレートもない。

というのが通常の光景だった。

が、その扉の前にはシルクハットの老人と少年がいる。

「んあッ！」

リオーナ^ニオルフェニスタの碧眼がシルクハットの老紳士を捉え
た瞬間、カツ！と、スタンドの照明のように見開いて、小さな拳
をワナワナと震わせ、

「あのクソジジイ…、よく私の予定完膚無きまでに…。八州周りに
歯向かう者は斬りす」

「そのネタ、分かる者はいまい。それにいろいろ危ない匂いがする
からパクリはやめなさい」

シルクハットにステッキというどっからどう見ても老紳士である
彼はボソリと呟く。

「あのねッ！」

リオーナ^ニオルフェニスタは次の句を捲し立てようとするが、

「紹介しよう。『^{ファイナルアンサー}創成告知』よ」

「無視するなッ！　今日は何日だと思ってるのよ？　今日はジャパ
ン最高峰のロックバンド『RISE』の一年三ヶ月ぶりのシングル

」

と、リオーナ^ニオルフェニスタは多種多様な激しい抗議を展開し
ているのだが、

「　　折角こないだ死にかけのちよつと美形っぽい男の子担いで
担いで担いでこのオランダまで帰ってきたっていうのに何よ何よ何
よこの仕打ちは」

老紳士はポーカ^ニフェイスで続々とスルーしていく。

「つまり今日は我々『RISE』をこよなく愛する者の祭典
なわけ。分かった？ 腐れジジイ……」

「彼の名は世界崩壊^{ラストオーダー}。これから君は彼の下で働いてくれ」

「ハッ？ てかいろいろ聞いてなかったの　　ッ！？　どこまで
人をコケにして……」

「君は【我が主よ、何故私をお見捨てになつたのですか（エリ・エ
リ・レマ・サバタクニ）】の通信兵だったな。本日付で【分捕りは
早く、略奪は速やかに来る（マヘル・シャルル・ハシュ・バズ）
】に移動となつた」

　　なんだか全てが不可能で不毛だ、なんだか知らないけれど都合の
良いことしか耳に入らないのかよ、とかなんとか悟りに悟らされた
リオーナは素直に目下の疑問を突き付けることにする。

「【分捕りは早く、略奪は速やかに来る（マヘル・シャルル・
ハシュ・バズ）】なんて部隊、聞いたことありませんけど？」

「当たり前だ。今設立したのだからな」

「　　は？」

　　リオーナ「オルフェニスタが再び愕然したこの瞬間、彼女の『世
界』は廻り始めた。」

第八章　かくしてペテン師は囁く

結界発動まで一〇分。

右から迫る漆黒の剣を、殴り倒す。

攻撃の空白、その刹那を付いて藤崎美鈴は飛脚漣。一気に『魔女』の懐へと侵入し、右の拳を唸らせ、同時に左右背後からの迎撃を跳躍で躲し、三方からの攻撃が相打ちし合ったことを目視で確認。再び『魔女』の懐へ飛び込んで右を

放たない。

それは何度も美鈴が『魔女』に見せてきた攻撃パターンとは違っていた。必殺の右を放たずに『魔女』に接近した瞬間、電光石火の早業で左で懐から取り出し、天に向かって一枚の術符を放り投げた。『魔女』は一瞬だけ表情を動かすも冷静に対処。吸い寄せられるように、後方で展開していた黒槍を『魔女』はその手に収め、美鈴へ黒槍を突かんと振り翳す。堪らず美鈴は数歩後退。すると『魔女』はその寸刻を利用し、大量の武具群がいくつもいくつも折り重なって『魔女』を守る城壁を造り出し、外敵の侵入を完全に封鎖してしまう。

「くっ」

数回、飛脚漣で後方に移動する。

藤崎美鈴は前髪を鬱陶しそうに、首を振ることで払った。

(距離を取ったら確実に不利。かと言って攻め入っても防がれる…) 美鈴は『魔女』を睨み付ける。三下程度だったら失神しかねない強烈な殺気を含む美鈴の威圧感も『魔女』には一切通用しない。

(距離を取ってもダメ。接近戦もダメ。…アレもダメこれもダメ…。…考えて戦うの、めんどくさい)

額をじつとりとした、非常に不快な汗がまとわりついている。

「…『白縫』も、もう保たない、か…」

接近戦では無類の強さを発揮する『藤崎式対魔格闘最終戦術・白縫』。

右腕、左腕、右脚、左脚。

初代が創り上げたこの術は、術者は高濃度に圧縮した魔力を四肢に纏い、その圧倒的な魔力で敵の攻撃を無力化し、如何なる結果であつても素手で打ち壊し、己の拳のみで敵を撃ち抜く。その際、術者が四肢に纏う魔力は揺らめく白。故に、白縫。

しかし、いくら最強の格闘戦術といつても所詮『白縫』は格闘戦術だ。『烏』や『狐』などの下級式神や、朱雀に青龍という最上級式神・十二天将を前衛、術者は後衛という『術者本人が積極的に第一線で戦うこと』を戦闘スタイルとしない『藤崎の陰陽師』にとって同じ体術系の術式である高速移動術は必要であつても格闘術は必要なかった。そんな絶滅寸前、古い古い文献にしか残っていなかった『白縫』を復活させた人物こそ他でもない、前時代に『非日常の世界』に君臨していた天下無双の魔術師たち『六星』の一角『鋒王』だった。

『鋒王』は代々の『藤崎の陰陽師』から長年敬遠され、風化寸前だった『白縫』に目を付けて復活させ、それまで『藤崎の陰陽師』の伝統的な戦闘スタイルにある意味ぶち壊して『術者本人が積極的に第一線で戦うこと』を戦闘スタイルとした。『鋒王』が『藤崎の陰陽師』伝統的な戦闘スタイルを壊してまで『白縫』にこだわったの

は『だつてみんなといつしよに戦いたいもん』という思いからだつたらしい。そんな『鋒王』の戦闘スタイルは藤崎双子に多大な影響を及ぼすことになる。

「やっぱり。早かった、…か」

藤崎美鈴は未熟者である。

『白縫』の使い手であった『鋒王』が四肢に高密度な魔力を纏っていたのに対し、美鈴は右腕一本しか纏えないで、さらには高密度に圧縮された魔力も右腕から拡散しつつあるのだ。

「まあ、いい」

状況とは裏腹に、心底から楽しそうに。

絶望的な状況を知りながら、それでもこの戦いを楽しんでいるかのように、笑う。

あれほど絶望的な戦いなのに、何故か笑みが零れてしまう。

結界発動まで、九分。

そろそろ、とわざわざ口に出して確認する。

トントント、と。靴の奥に踵を押し込むようにした直後、飛脚漣を実行。

一キロ近い間合いを一気に駆け抜け、漆黒の武器群、それを右腕一本で打ち払い、砲台から放たれた弾丸の如きスピードで『魔女』目掛けて突っ切っていく、やがて見えた『魔女』を守護する漆黒の城壁に必殺の右を放った。城壁は無惨にも崩れ落ちた。が。城壁より姿を見せる『魔女』の手には漆黒の槍が握られている。

それは何度繰り返されてきた遣り取り。

だから。

今度も同じ攻撃パターンだと。『魔女』は『全く根拠のない根拠』に基づき、新たに漆黒の武具を創造。『魔女』は手に握る槍を振る。それは総攻撃の命令だ。空中に浮かんでいる『魔女』に忠実な武器軍団は何の躊躇いもなく、一斉に『右の拳しか有効な決定打を持たない』藤崎美鈴に殺到した。

藤崎美鈴は『魔女』に対して『白縫状態の右腕』しか決定打を持

っていない。

その『右腕』すら、崩壊しかかっている。

時間の問題、まもなく藤崎美鈴は唯一の決定打を失い、為す術もなく崩壊するだろう。

だからこそ『魔女』は油断しなかった。

躊躇うことなく『魔女』は必勝の戦法を取った。『魔女』が産み出し、使役するその『漆黒の武器』は『魔女』の魔力そのものだ。

『魔女』はそのあまりに膨大な魔力を持つ余り、どう頑張っても体外に溢れてしまうのである。『魔女』はその溢れ出した魔力を『今回』殺傷力が高い武器の形に押し固めて、敵に差し向けた。

人間が使う『魔術』など、結局の所、偉大な『神様』の真似事ではない。

『神様』が起こした『奇跡』を人間が無理矢理、システム化、マニュアル化、公式化して、神様より圧倒的に劣る人間でも『奇跡』の小型版を人間でも起こせるようにしたのが『魔術』なのだ。プロの大工が立派な一戸建てを建てるのを見ていた幼稚園児が、見よう見まねで砂場に砂のお家を建設しました、そんな解釈で十分ある。

つまり人間が行う『魔術』とは起こるべきして起こる現象なのだ。緻密に計算された公式通りに呪文の詠唱や儀式を行えば、自ずと結果が出る。

数学の教科書に載っている公式通りに数字を当て嵌めると自ずと答えが出てくるように。

人間が使う『魔術』は、愚かにも『神様』の『奇跡を起こす力』を得ようと必死に必死に藻掻いて、その『奇跡』を自分たちの手で起こそうと頑張って研究した結果でしかないのだから。しかし。

『魔女』にとつての『魔術』とはただの妄想に過ぎなかった。

王座に座りたいから、ふとそう思って豪華絢爛な玉座を思い浮かべた瞬間、自身から常に溢れ出ている漆黒の波動がイメージ通りの王座を創り出した。

お腹がすいたから、ふとそう思って贅の限りを尽くしたディナーを創造した瞬間、自身から常に溢れ出ている漆黒の波動がそのイメージを叶えてくれた。

だから、今回も妄想した。

目の前の敵を殺す、と。

そのために『魔女』は思い出せる限りの武器を妄想した。

確実に、目の前の敵を殺すための。

万全を尽くし、喉けた量は以前の二倍強。

武器の質も量も問題なし。

例え、この攻勢を凌いだとしても自らが握るこの黒槍で刺し殺せば問題はない。

手は尽くした。

完璧完全に。

そう、優雅に勝ち誇って『魔女』は生み出した武器を藤崎美鈴に喉けた。

美鈴の表情が苦難に染まったその一瞬、『魔女』は勝利を確信する。

だが。

それでも『魔女』は溢れた魔力で更に武器を量産し、まもなく漆黒の武器群が『魔女』を取り囲むように浮かび上がる。

殺せ。

敵の四肢を貫け。

指の仕草のみで命じた。

忠実なる漆黒の武器が、第二波として一斉にして美鈴に襲いかかる。

刹那、藤崎美鈴は役に立たない『左手』で印を結んでいたが、もう遅い。『魔女』の号令を受けた様々な種類の武器軍団が美鈴に迫る。

迫るのにも拘わらず。

藤崎美鈴は、ニンマリと口元を引き伸ばして、嗤う。

明らかに右腕一本では捌けない武器を差し向けられているにも拘わらず。

美鈴の頭上に、漆黒の剣が流星の如く、そのスピードで迫っているのに、

「ばーか」

藤崎美鈴、脳天直撃の軌道。

黒い、剣が、疾走する。
それを。

「『ナ、
』」

まるで約束していたように。

まるで予めそこに剣が落下すると分かっていたように。
手に取って。

『漆黒の剣』、 否。

『黒い日本刀』の柄を自信満々に握って、改めて、笑い、殺到して

くる漆黒の武器群を真一文字に斬り裂き、床を蹴った。

慌てて『魔女』は手掌を振り翳し、美鈴の斬撃から生き残った武器群を呼び寄せ、瞬時に武器群が城壁のように敵の攻撃から主を守るべく展開した。それは狙い通り。高速で『魔女』を覆い隠すように集結し展開、グチャグチャに折り重なり、絡み合い、複雑且つ鉄壁の盾で『魔女』を美鈴の侵攻から防ぐ。

狙い通り。

それは『魔女』がイメージした光景。自身を守護する鉄壁の城壁が敵の侵入を完全に塞ぐ。

イメージ通りの光景が形成されたことを確認して、半ば安心して『魔女』は敵の撃退に使用する大量の武器を創造し、それを『鉄壁の城壁の外』に展開。目標は敵・藤崎美鈴。創造せし武器群に『確認できる生命を根刮ぎ殺せ』と命令を刻み込む。

そして『魔女』は、手に持つ黒槍を一閃。

その『一閃』は、攻撃開始の号令。
敵を殺すための、ラストオーダー！。

トンッ。

ヒュウ、と、『魔女』の呼吸音が奇妙な音を上げた。

「先入観は、捨てるべきよ」

それは、

「格闘戦術でも」

それは、小柄な人影。

「敵は武器を持っているかも知れない」
ゆらりと。

「いくら自分が強大な力を持っていたとしても」
漆黒の日本刀をダラリと垂らした右手で引き摺るように掴んでい
る。

「いくら自分の敵がちっばけな力しか持っていなかったとしても」
その人影は、紛れもない。

「あらゆる可能性を考慮しないと、戦いを制することはできない」
藤崎、美鈴。

その姿を見て、思わず一步下がる。

『魔女』は感じていた。

感じざるを得なかった。

それは、絶対的な力の差。

矮小な存在に対して、有り得ないことに『魔女』は、恐怖という
感情と共に。

ゆっくりと、ゆっくりとゆっくりと。

美鈴は、ゆっくりと『魔女』に近づいた。

「本当は。こんなこと考えて戦うなんて流儀に叛くことになるけど。
事情が事情、仕方ないけど」

カツン、と。

靴音が、響く。

カチャ、と。

黒い刀身が、鳴る。

「戦いは戦い。勝利は勝利。敗北は敗北」

美鈴の右手がゆっくりと上がる。

刀身が、切っ先が、天に向けて掲げられる。

慌てて『魔女』は手に握る黒槍を振り上げるも、耳を劈く金属音
が響いた。

漆黒の切っ先が空中で、クルクルと舞う。

「『バカ、 ナ…』」

「そうだ」

その、漆黒の刀身が跳ねた。

まるで何か、得体の知れない白いジェル状の物質に刀身が覆われているかのように。

『魔女』は、それが美鈴の魔力だということに気付けなかった。

極度の混乱、味わったことのない恐怖、初めて思い知った絶望的な力の差。

それらが巧妙に絡み合い、纏れ合い、『魔女』の思考をメツチャグツチャにしていたのだ。

そして、この瞬間、ようやく知る。

「『白縫』は、ただ身体に高濃度の魔力を纏って戦うことだけが全てじゃない。『白縫』の効果範囲は『魔力の発生源である身体に接続されている部分』。だから」

「ザクツと。」

今まで空中を舞っていた漆黒の切っ先が地に突き刺さる。

美鈴は、笑う。

藤崎美鈴は笑って、

「私が握っている、つまり『私』という魔力の発生源と黒刀が接続している』からこの刀は『白縫』状態。では『魔女』。安らかな、眠りを」

振り上げられた黒い刀。

全てを破壊し尽くす術式を纏った刃が、振り下ろされ、袈裟斬りに『魔女』を斬り捨てた。

同時に、漆黒の武器群と同じく漆黒の城壁が、音もなく砂のようにサラサラと風に散っていった。

結界発動まで残り七分。

完全無欠に、藤崎美鈴の勝利だった。

前髪を手櫛で梳きながら、藤崎美鈴は『白縫』を解いた。

「うん。上出来」

彼女が握る漆黒の日本刀　　黒刀が煌めく。

「水瀬から還して貰った黒刀、術符に封印しておいて良かった」

封印術符を空中に投げるタイミングも我ながら上手くやったし、と。

満足そうに美鈴は妖婉な笑みを浮かべて、足下に転がっている『魔女』を一瞥する。『魔女』が倒れ伏して小刻みに手足を震わせていることを確認した。まだ息があるのかと、美鈴は『魔女』の体力を賞賛しながらも、懐から何十枚もの術符を引き抜き、パラパラと死者への手向けのように術符を振りかけていく。手にある数十枚の術符が全て俯せに倒れている『魔女』の身体全体と周囲にはらまかれると、美鈴は手慣れた手つきで瞬時に印を組む。

「禁魔、結陣」

用途は外部からの干渉制限と目標の拘束。各術符から発生した半透明の光が集まり合い、結界として『魔女』を封じる。

(六分：か、)

東洋陣営所属の特殊部隊・結界班が対魔女特殊攻撃術式を組み立て終わるまで残り六分弱。

大した怪我也負うことなく(その代償に魔力も体力も激しく消耗したが)よくもまあ『魔女』を一人で追い込めたなあと、少し呑気に自画自賛してみる。これも『藤崎式魔術接近格闘最終戦術・白縫』と『多角高速移動術式・飛脚漣』のおかげだろう。今回ばかりはあの『バカ』に感謝しなければならぬらしい、と彼女にしては非常に不本意なことを美鈴は思う。

風が、吹いた。

荒涼とした大地を一筋の風が通り抜け、砕けて砂となった元コンクリート片や、ビル群の骨組みなど、その無骨な鉄筋がカラカラと

音を立てて地を転がっていく。

その大地に、美鈴の背後に、一つの影。

「え…？」

声を漏らし、慌てて美鈴は振り返った。

そこに、いた。

赤銅色の豊かな髪に、大胆にもサラリと羽衣しか纏っていないその芸術的、蠱惑的で、贅沢すぎるほど起伏がある肢体。夜目の利く黒猫のような金色の瞳を輝かせ、普段は啜えて放さない古くさいキセルを手に握っていた。

「朱雀…」

十二天将・火の吉将、朱雀。

藤崎美鈴の相棒であり、姉であり、師匠であり、無二の親友でもある。

「アンタ…、『魔女』は…？」

「そこ」

それはつまらなそうな口調。だが口調とは打って変わって、親指のみで美鈴は何十もの結界に封じされた『魔女』を、その結界の中で倒れ伏している『魔女』を自慢気に指した。

「まさか…」

「何か。問題でも？」

「、一人で、やったの？」

「この場に私以外の陰陽師はいない」

それはまるで百点テストの答案を母親に見せる小学生のように、ニツカリとご機嫌の藤崎美鈴。その満面の笑みを絶やすことなく、口を開く。

「私だって」

そう、言葉を切って、

違う。

「美鈴……？」

それは、違った。

そして、二人は気付く。

美鈴の言葉は強引に『切らされた』ことを。

まもなく、美鈴の足下で、トツ、と、微音がした。

美鈴は足元を見る。

朱雀も釣られるようにして美鈴の足元、地を見た。

そこには、地面に抜き身の黒い日本刀が刺さっていた。

それは、藤崎美鈴が握っていた物。

シタツ、と。

その漆黒の刃に深紅の液体が一滴殴るように落ちる。

藤崎美鈴は、ゆっくりとそのまま立ち尽くしたまま、己の腹部へと視線を下ろす。

朱雀は、ゆっくりとそのまま立ち尽くしたまま、藤崎美鈴の腹部に視線を向ける。

二人揃って、それは間抜けなほどに無防備だった。

は掻き消し、それだけでは飽きたらずに大気、空間すら楽々と歪ませた。

ぞっと、なった。

もはや、拳を握ろうとも、炎を燃やそうとも、抵抗しようと思えぬ。

場違いにも程がある。スケールが違いすぎるのだ。言うならば、三つ星シェフと乳幼児が料理対決しているようなものである。勿論、どちらが勝つなんて論議するまでもない。乳幼児は一人前に包丁を持つことすら出来ないのだから。

そして、その竜巻が、唸る。

唸って、そのまま真っ直ぐ朱雀に突っ込んだ。

二

苦しい、と。

荒廃した大地に倒れ伏した藤崎美鈴は、力なく朦朧とした意識の中でぼんやりと、どこか呑気にそう思った。

(さ、刺された…)

美鈴はうつすらと目を開けた。ジワリジワリと、腹から赤く生暖かい液体が流れ出てて、どんどん広がっていくことは分かる。けれど、それが何なのかは分からない。分かるようで、分からない。それはまるで本能の辞書からその『何か』を紹介する部分がすっかり抜け落ちてしまっているように。

(…、進歩、ない)

前日も、そうだった。

一ヶ月ほど前の戦い。東洋陣営の魔術師である闇夜棘路とひよんな事から共闘することになり、彼女の敵方組織である西洋陣営の特別強襲部隊、天才魔術師・ロイランフォード率いる「我が主よ、

もつ、嫌だ。

震える左手に、無理矢理力を込める。

(戦う)

肉親を失うのは、嫌だ。

腹部からの激痛に耐え、震える左手に全体重を乗せ、右手を伸ばす。

(戦う)

右手で、地を掴む。

血溜まりの中から美鈴はゆっくり起き上がる。

(戦え、…)

最後の力を振り絞る。

「炎、獄」

震える指で印を、組む。

「命ず。…水は、木を生じ、木は…火を、生じ さす」

最後の魔力を、捻り出す。

「群青の、 闇、…新緑の、朝」

指で結ぶ印の型を次々と組み替え、呪を紡ぐ。

「 連…鎖、栄光、 天子、絶無、懇望、…随、感」

分かっている。

この程度の魔力しかつぎ込めない『白縫』じゃ、この手負いの身体じゃ、壮健な身体でさえ、なんとか『戦闘』になったようなものなのに。

そんなことは、分かっていた。

「我が…左に、名工、 残光、さざめく、世の理、を…当今滅せ、…よ」

母親から教わった、印を組み上げ方、魔力を練り上げ方、呪の紡ぎ方。

その全てを、この瞬間に、一撃に、右腕に込め、その上で告げる
「白縫」

それは、魔法の呪文のように。

美鈴の瞳に、光が宿る。

瞳に、戦意が漲る。

そして、地に突き刺さった黒刀の柄を握る。

前を、見る。

漆黒の柄、それを地から抜き去り、たった一振り。

漆黒の竜巻が、純白の魔力を纏った刀に切り裂かれていた。

第九章 難しいことは判らないけれど、後悔なんてない

人間が『何もないところ』から『希望』を抱くのは、簡単。だけど。

そんな人間が『絶望』から『希望』を見出すのは、大変。愛とは、何だろう。

恋とは、何だろう。

愛したのに、必死に想ったのに。

精一杯、頑張ったのに。

長い髪が、好きだと言ったから、頑張って髪を伸ばした。

料理が出来る女が好きだと言ったから、頑張って料理の練習をした。

なのに。

どうして、必要ないなんて言われなければならなかったのだろう。

どうして、一所懸命頑張ったのに否定されなければならなかったのだろう。

満月の夜。

その月明かりは美しい白で、残酷な白だった。

ああ、死のう。

そう思った。

アイデンティティを、否定された自分に生きる価値なんてあるのだろうか。

私は『クズ』だった。
どうしたって『クズ』。

中途半端な自分は、人に笑われ、蔑まれ、人に安っぽい優越感を与えるだけの存在。

だから、死のう。

自分を生かすだけに必要な食料、燃料、お金、全ては無駄。そんな自分程度の存在に星の大切な資源を使うくらいなら、もっと貧乏で優秀で無限の可能性を秘めている人間に与えればいい。

ならば、死のう。

そう、思ったから、この街の繁華街で一番高いビルの屋上に立った。

そこは、無機質で灰色の世界だった。

そこは、風が舞っていた。

そこは、地上が眩しく見えた。

「必要、とされたかったのに……」

それ一つだけが、願いだった。

結局『人間のクズ』である自分には出来すぎた願いだったかかも知れないけれど、必要とされたかった。
愛されたかった。

誰でもいいから、自分に『貴女が必要です』と。

そう、一言、嘘でも、お世辞でも何でもいいから。

一度きりでいいから、必要とされたかった。

必要とされたかったから、嫌な役回りも進んでやった。

必要とされたかったから、遊びたいのを辛抱して勉強した。

必要とされたかったから、『彼』と付き合った。

でも、それは無駄に終わった。

必要とされたかったから嫌な役回りも進んでやったのに、周囲の人間は嘲笑いながら自分をパシリにした。

必要とされたかったから遊びたいのを辛抱して勉強したのに、結局誰にも質問されなかった。

必要とされたかつたから『彼』と付き合ったのに、使用済み紙コップのように簡単に自分を捨てた。

他人からすれば、それは些細なことかも知れない。

けど、それは違う。

誰にも必要とされていないければ、自分の存在意義はない。

神様が、自分を生み出した意味すら感じない。

自分は今まで『他人から必要とされること』に全力を尽くしてきた。

もし、その努力の全てが無意味だというのなら、自分の意義、価値はない。

落下防止用のフェンスに手をかけた。

そんな時だった。

『それ』と出会ったのは。

「『ノソ、ム』」

背後にいた『それ』は、黒髪が似合う美しい『それ』は、そう言った。

「『フクシユウヲ、ノゾム』」

美しい『それ』から、禍々しい黒い波動がわき出してきた。

「『ワレニ、ハンスモノハ、クロス』」

『それ』は言った。

「『ヒツヨウ、ダ』」

と。

必要。

必要とされたのか。

「『ワレ、ノゾム。キサマノ、ウツワヲ』」

どうせ、死ぬなら。

「私を、必要としてくれるのね？」

美しい『それ』は、薄く笑って、小さく頷いた。

「なら、いいわ。好きにして頂戴」

グシヤリ。

黒髪が似合う美しい『それ』は、血肉を撒き散らして、盛大に散った。

けれども。

自分にとって『そんな些細なこと』なんてどうでも良かった。
必要とされるなら、世界など滅んでも構わない。

だから、黒髪が似合う美しい『それ』が死んだ事なんて本当に些
細なこと。

どうでも、いい。

自分にとって、自分が必要とされない世界なんて、滅んだって壊
れたって。

どうでも、いい。

タタンツ、と。

廃墟に『魔女』の軽やかなステップが響き、数十メートルの間合
いが出来た。

「チツ」

藤崎美鈴は『魔女』を仕留め損なったことに静かに舌打ちし、黒
刀を構える。

美鈴の傷は決して小さくない。ただ『幸運にも人間が生命維持に
必要な部位を撃ち抜かれていない』だけであって、その傷口からは
止めどなく鮮血が溢れ出してくる。一応、出血は傷に魔力を包帯状
にしたもので押さえられている。が、それも所詮付け焼き刃に過ぎない。
二分でも全力で戦えば即座に魔力の包帯は破れて大量の鮮血を地に
流すことになるだろう。

美鈴は乱暴にその傷口を左手で押さえながら、

「朱雀」

左手が、包帯状の魔力が傷を被っているにも関わらず、真っ赤に
染め上げられていく。

「水瀬が、言った、：タイム、リミットも：近い。」

朱

雀、は。逃、げて…」

途切れ途切れ。

今にも潰れてしまいそうな美鈴は必死に告げた。

水瀬が言った時間まで、もう五分もない。

五分。

自分の生命を三分間維持して戦えるわけなどない。

だからこそ、美鈴は朱雀を守る。

朱雀は『天帝』が創造した『神』だ。

藤崎美鈴たち『藤崎の陰陽師』は式神のエキスパート。

いくら『神』と言っても、その存在は永遠ではない。

許容量を大幅に超える一撃を受ければ、ナイフで頸動脈を斬られ
た人間が出血多量で死ぬように、朱雀たち式神は消滅してしまう。

式神を主戦力として長年、魔を相手に死闘を繰り広げてきた『藤崎

の陰陽師』が式神一体を失うこととはどれだけの損害となってしまうだろうか、それは想像も付かないし、未来の『藤崎の陰陽師』を考えると申し訳も立たない。

(つて。　　それは、建て前：)

本当は、朱雀に死んで欲しくない。

もう、死を見るのは嫌だ。

ぽっかりと大きく空いた空白はもう味わいたくない。

だから、前を見る。

だから、刀を握る。

(　　全力。出せば　　十秒も、　　保たない、かもね…)

傷によるダメージはかなり深刻だ。だがそれだけならまだ良かった。出血による体力消耗が激しいのだ。

もう一度、柄を握り直す。

対峙している『魔女』の力は圧倒的だ。左肩から右脇まで、比較的深く大きな太刀傷を負っているにも関わらず、平時と寸分の変わりない力を発揮し、戦闘を展開している。美鈴には『魔女』の体力や力の限界がないように思えてならない。不死身のような、実際に天界の神と対峙しているような凄まじいプレッシャーを全身に受け、嫌な汗が頬を流れた。

更に、柄を握り直す。

美鈴に残された体力は、本当にもう僅かしかない。これ以上傷を負えば、これ以上出血すれば即座に美鈴の意識は闇に落ちてしまう。美鈴の意識が落ちてしまえば、一巻の終わりだ。即刻、例の漆黒の波動による一撃で簡単に粉碎されるだろう。

両者は、睨み合う。

美鈴は、黒刀の切っ先を『魔女』に向ける。

『魔女』は、ボーリング玉程度の大きさを持つ漆黒の球体を美鈴に見せつけるよう、両掌に浮かべる。

両者共に間合いを詰めることもなく、

両者共に先手を打とうとするわけでもなく。

沈黙が、訪れる。
睨み、合う。

と、

そんな修羅場に、

(……)

どこからともなく、音が聞こえる。

(な、……に？)

音は、濁っている。

(もしか、して……)

ゴウツ！ と。

灼熱の轟音。突如、美鈴の視界の外れから紅蓮の大龍が壮絶な勢いで現れ『魔女』の頭上から一気に呑み込んだ。

それが、開戦の烽火となった。

飛脚漣。

世界最高峰の移動術式を一気に組み上げ、藤崎美鈴は『魔女』一直線に突進する。

直後、爆発。

紅蓮の大龍が破裂、苦しみ悶えて、炎の塊は一瞬にして霧散。破壊者は『魔女』。いとも簡単に『魔女』は大龍を一撃で火の粉へと還してしまい、火傷すら負っていない無傷の『魔女』は悠々と左掌上に浮かぶボーリング玉程度の漆黒の球体を美鈴目掛けて撃つ。が。間一髪で美鈴の身体が虚空に消える。必殺の球体があるう事か『空

振り』したその刹那、美鈴は『魔女』の背後に。そのまま背に刃を突き立てよ

(ツー！)

美鈴が背だと思って突き立てようとしていた部分に、何故か『魔女』の腕があった。爪先を軸とし、さながらコンパスのような方向転換で『魔女』は右掌の上に浮かぶ、もう一つの必殺の球体を美鈴に叩き込もうと、毒手のように細く鋭い腕を撓らせていた。

(どうせ！ ……ならッ！)

余計な迷いなど無しにして黒刀を美鈴は振り下ろした。刃は放たれた漆黒の球体と一瞬の接触を交わすと、盛大に破裂。爆風に押し負けた藤崎美鈴は吹っ飛ばされて空を舞い、『魔女』は靴底を地面に擦らせて数十メートルも後退してしまふ。それは、結果として大きな間合いが作られたことになり、美鈴は吹き飛ばされているにも関わらず不敵に笑みを浮かべる。

(ビン、……ゴッ！)

狙っていた美鈴は僅かに顔を顰めながら空中で自身の体勢を立て直し、すかさず飛脚漣を実行。出現したのは『魔女』の背後でも、正面でも、頭上でもない。

右側面。

右腕を引き、左腕をたたみ込む。利き足に一瞬だけタメを作り、美鈴はパチンコの玉のように解き放たれた。それは飛脚漣のスピードに加えて一瞬だけ利き足でタメを作ったことによる最大攻撃力で刺突。軌道は『魔女』の脇腹を脅かし、
が。常人では残像すら目視できぬ驚くべき美鈴の突進より、僅かにだけ上回るスピード、最小限『切っ先だけを躲す』ことだけを重点に置いた、身体の芯を少しだけずらすという『魔女』の余裕を感じさせる回避の実践で刃は躲された。

「チッ」

刺突が失敗したと判断したや否や、場数の産物たる状況判断力を駆使。刺突の勢いを右脚で強引にキャンセルし、即座に『魔女』の

元にとんぼ返りすべく飛脚漣を実行。今度は『魔女』の真正面に踏み込む。一気に踏み込んできた敵に対して『魔女』は、黒の波動を出し、それを剣にして柄を左で握る。

美鈴は素直に全体重を乗せて振り下ろす。

『魔女』は左下から右上に突き上げるように振り上げる。

耳を引っ掻くような金属音が響いた。

(痛う…、ああ)

美鈴の傷が悲鳴を上げ、鮮血が左手を更に紅へと染まる。

美鈴は全体重を込め、出来る限り最高の一撃を放った。が、腹部の傷が深い。刀の柄も右手でしか握れていない。斬撃のキレも『白縫』の精度も、折角全身の体重を使った渾身の一撃なのに体重の移動が上手くいっていなかった。もし、美鈴が万全の状態で今と同じ一撃を放っていたならば、いくら『魔女』とてこもあつさり受け止められなかっただろう。ましてや『受け止める』という行為すら可能だったかどうかすら怪しい。

(く…押し、負けるッ！)

ギリギリと力負けている黒刀を眼前にして、美鈴は覚悟した。

『魔女』はその剣で自身を楽々と吹き飛ばすだろう。吹き飛ばし、空中で大した回避も出来ずにいる自身をその剣で一突きに、あるいは両断してこの戦いの幕を引くだろう。斬り合いの刹那にあるにも関わらず、冷静に今後を分析して腹の傷を気にしながら美鈴は考える。

だが、

(勝て、…ない)

思い浮かぶは全て絶望的なシナリオ。

最高のシナリオといえば『致命傷を受けない』ということで、美鈴は『致命傷に近い傷を負うこと』を前提に戦闘シナリオを組み立ててい

瞬間。

それは、脆くも崩れ去る。

飛来してきたのは幾万もの火球。

だが『魔女』は大挙して対象都市に押し寄せてくる巡航ミサイルのような火球の大軍勢を見るが、見るだけでなんの反応も示さなかった。『魔女』は知っているのだ。これしきの火球、いくら『魔女』に降り注ぐとも、黒き波動を一つ出せば直ぐに消し飛ばすことが出来る、と。所詮、流星群のような規模で襲いかかってくる火球と言えど『魔術』だ。同じ『魔力を燃料にしている魔術』同士がぶつかりあえば魔力の密度や純度が洗練された方が、劣った方を弾き飛ばすという『非日常の世界』の常識中の常識、基礎中の基礎を知っているのだ。だから、火球群は敢えて無視した。それより今刃を交えている美鈴から先に始末するべきだと思ったのだ。

それが、敗因であることに、未だ『魔女』は気付いていなかった。確かに火球は一直線に『魔女』へと突き進んでいた。

「助かった」

美鈴は刀を退く。

直後、火球が、炸裂した。

直後バランスを崩された『魔女』が若干吹き飛ばされた。

そう。確かに雑兵のような火球如きでは『魔女』に掠り傷、火傷すら負わずことは叶わない。これは初回到『魔女』と激突したとき、朱雀の炎剣が『魔女』の無意識のうちに出てしまう波動に打ち消されてしまったということ。既に証明されている。詰まるどころ、その戦場にいた現代最強の陰陽師と称される『藤崎の陰陽師』藤崎美

鈴、そんな美鈴の相棒で十二天将、火の吉将・朱雀、紅玉市繁華街を廃墟に換えてしまった強力な破壊者『魔女』の三者はしつかりとその光景を記憶に焼き付けている。特に攻撃を嚇けた朱雀と、攻撃を嚇けられた『魔女』の二者にはそれはそれはしつかりと。

これは、だからこそ、だった。

時に、兵は学習する。

どうして己の剣が敵を斬り裂けなかったのか、と。

時に、兵は認知する。

どうして己の剣が敵を斬り裂けなかったのか、それは己の技量不足だった、と。

時に、兵は着想する。

どうして己の剣が敵を斬り裂けなかったのか、それは己の技量不足だった、ならば現行の攻撃手段で敵を斬り裂くために創意工夫を凝らしてみよう、と。

思案から、認識。

認識から、工夫へ。

これらの過程を経て、朱雀は火球を『魔女』の足下に炸裂されることを学んだのである。

(ラスト、チャンスッ！)

腹部の傷口。

消耗しきった体力。

残された魔力の残量。

全てを客観的に判断するとこの一撃が本当に最後。

(狙うは… 今ッ！)

飛脚漣。

本来、自分が吹き飛ばされて身動きが取れなくなるというシナリオはもはや意味をなさなかった。美鈴は現在進行形で空中を吹き飛ばしている『魔女』の更に上空に出現すると、黒刀を空中に放り投げてその小さな拳を握る。右。世界に名を轟かした『鋒王』直伝の『白縫』に覆われた必殺の右は『魔女』が苦し紛れに全身から噴き出

した漆黒の波動をもともせず引き裂いた。
それでも、まだ止まらない。

「貴女がどんな理由で力を振るっているかなんて私には分からない」
弱々しい声とは裏腹に、拳は勢いを増した。

「なら、私がどんな理由で力振るって貴女を殺したって何の文句もない、でしょ？」

優しく微笑んで、

「お休みなさい、『魔女』。良い夢を」

少女は絶対的な勝利を確信、直後、凄まじい衝撃が『魔女』を打ち抜いた。

二

「報告！」

片膝を付き、畏まった男は身体を縮めた。

「先刻、インド支部を壊滅させた正体不明の魔術師『魔女』、紅玉の地にてその存在を確認！」

彼の前に陣取る、キツネ顔の男は僅かに嘲笑して答える。

「動かせる部隊は？」

「五個師団ほど」

「ではその五個師団で『魔女』の捕捉を、もし我が陣営に甚大な損害が出るようでしたら殺害しても構いません」
「はっ」

こうしてこの瞬間、『初めて』インド支部を壊滅に陥れた謎の魔術師、通称『魔女』の存在を【世界呪術文化保護連盟】が確認。直ちに宰相の命により『魔女狩り』が開始される。

三

「『マダ、ネムルニハ、…ハヤイ』」

美鈴はみつともなく惚けている。

「『キサマ、…ナルホド、ネリアゲタ…マリヨクラ　　シシニマトウカ』」

美鈴の右を、最後の一撃を『魔女』は腕をクロスさせて防いでいた。

あろう事か、空中で体勢を立て直して。

あろう事か、両腕に漆黒の波動を纏い『白縫』の真似事をして。

「『フン』」

ズガンッ！ と美鈴の腹部に『魔女』の爪先がめり込み、美鈴の身体が吹き飛んだ。爪先は正確に美鈴の傷口を捉えて、しかも丁寧に傷口をスタスタに引き裂いて。

(ナハ…、ありえ、　　ない)

背を逸らし、鮮血を撒き散らして、美鈴は飛ばされる。

「『ワガ、ニクシミハ、キサマテイドデハトメラレヌ』」

『魔女』は瞬時に飛ばされている美鈴の上空に移動し、腹部に向けて直角に真っ直ぐハンマーのような拳を振り下ろした。

「グッ…、ガアアア」

声が出せない。

断末魔すら上手く叫べない。腹に重すぎる一撃を受けた美鈴はそのまま墜落、二度、三度、四度五度六度、華奢でボロボロの身体を荒涼とした地面に、弾むバスケットボールのように打ち付けながら転がっていく。が、それでも勢いは止まらない。止まらない。骨折、打撲、筋肉の炸裂。あちこちで上がる筋肉の悲鳴と骨の軋みが断続的に美鈴に叩き込まれ、『痛み』ですら分らない。終いに、止めと言わんばかりに派手な音を立て、高層ビルが建っていた土地に積み上がったいたその瓦礫の山に衝突した。その衝撃に重々しい鉄筋や、鋭利な刃物と化しているコンクリート片が宙に舞う。

「美鈴ッ！」

絶叫に乗って、朱雀が美鈴の名前を呼ぶ。

「『ジャマモノハ、ハイジヨシタ』」

「ッ、退きなさい！」

恐怖は、ない。

縛られる恐怖など、ない。

そんな『魔女』に脅える『恐怖』より、美鈴を失う『恐怖』の方が断然強かったのだ。

朱雀は盲目的に大量の火球を生み出し、激昂の下に発射する。巡航ミサイルのように飛翔する火球を『魔女』は鬱陶しそうに払う、それだけで全ての火球が打ち消される。

「退けッて、言ってるでしょッ！」

火球が打ち消された程度では朱雀は動じなかった。朱雀は神速で『魔女』を抜き去り、美鈴に駆け寄ろう、その快速を更に飛ばす。

「『オロカナ…』」

嘲りと哀れみが混じり合った声色を朱雀に向けて飛ばすと、『魔女』は漆黒の波動を練り上げ、右掌に球体を浮かべると、

「『オロカナ、ケライ…ガ、ウミダス、サンブツハ、マタオロカ』」
腕を撓らせ、球体を朱雀に撃ち出

「まあ、予想外だったんや」

不意に、『魔女』の背後で男の声。『魔女』の腕がピタリと止まる。

「お前さんの戦闘力を甘く見てたわ。あとで美鈴ちゃんに謝らんな」

長身にダークスーツ、高級そうな黒い革靴。

短く切り揃えられた短髪、身体からは甘ったるい香水が鼻を突く。

右親指と左人差指に輝いている銀色の指輪。

「さてさて。ここからは俺、水瀬流陰陽師・水瀬光輝が相手や。以後ヨロシク」

第十章 フェアじゃない、叫ぶテメエがフェアじゃない

「『オン、 ミヨウジ、ダ、ト?』」

襲撃者にして破壊者『魔女』の眼前で『水瀬流陰陽師』水瀬光輝はこれっぽっちの恐怖も抱かずただ不敵に笑う。

「ま、こんな俺が陰陽師ってたって信じる方が異常かもな。香水ドロドロやし」

けどな、そう区切って。

「こっに見えても俺はあ、万物を支配する陰陽師や」
パンツ、と。

手を打った瞬間、猛烈な羽音が響き渡る。まるで洪水のように、それは膨らんで膨らんで弾けるように。

「『ムシ、カ…』」

「ごめーと」。禁忌とされた蠱術の陰陽師、それが水瀬流や」

蠱術。

本来『蠱術』には『人を惑わすまじない』と、その名の通り『虫を使役する術』の意味がある。道教では、人の体内には『三戸』^{サンシュ}という虫が住んでいると考えられており、これは一般の寄生虫のように『人間の肉体に寄生する』のではなく『人間の魂に寄生する』ものだとされている。

この『三戸』は宿主、つまり人間が死ぬことによって初めて肉体の束縛から解放される。だから自由を願う『三戸』は常に宿主の死を望んでいる。そのため『三戸』は年に一度だけ、宿主が眠っている間にその悪行を天界に報告し、その寿命を縮めようとするのだ。また、この『三戸』が活動を活発化させると魂が不安定になり、集中力や精神的安定を削がれるとされている。

そんな人間にとって害でしかない『三戸』を支配下に置いて支障

ない生活を送るため、または他人の『三尸』を利用し、その精神を混乱させて他人を惑わすことが本来の目的である術式だったらしい。ところが、それは時代と共に変貌を遂げる。

古来より『三尸』だけをターゲットとしていた蠱術は、時を重ねるにつれ、実際の生物としての『虫』を、さらに強力な生物である『蠱』を直接使役するようになっていった。つまり、欧州の魔術で有名な『使い魔』を使役する使役系の術式に変化していったと捉えていい。

こうなると必然的に『使い魔』である『蠱』は強大な力を持っていた方が好ましい。それこそ、カエルがへびに打ち勝ってしまうような、食物連鎖すら堂々と無視できてしまう強烈な力が必要だったのである。

こうして、蠱術の研究は続いた。

この頃、実際に行われた術者による研究は、二系統に区分けすることが出来る。

一つは、科学的な技術で『ムシ』を強化させる方法。

一つは、魔術的な技術で『ムシ』を強化させる方法。

この内の一つ、科学的な技術を選択した術者は『研究』とは名ばかりの凄惨な動物実験を繰り返した。結論から述べてしまうと、この科学的な方法は失敗してしまう。なにせ術者自ら調査した薬物を虫たちに投与し続けるのだ。それも原材料は当時、不老長寿の薬と考えられた水銀などの重金属や猛毒を与えることになるものだから、ムシたちの運命は論じるまでもない。また、幸運にも生き残った虫たちは凶暴化し、術者を血祭りするという事件も起こってしまう始末で、やがてこの方法で研究を進める術者はいなくなることになる。また、魔術的な技術で『ムシ』を強化させる方法を取った術者もまた失敗することになる。ちなみに『魔術的な技術』とは、蜈蚣ムカデや蛞蝓ナメクジ、蜘蛛クモ、蛇ヘビ、蟾蛙カマガエルなど、虫を一つの壺に封じ、その壺を地に埋める。術者は最低でも一週間から一ヶ月経ってからその壺を掘り出し、もしも生き残っている者がいたならばそのムシに呪をかける。

平たく言えば『壺の中で共食いさせ、最後に残った最も強い虫』に強化の魔法をかけるというものなのである。

「まあ、どちらも人外外道や。だから日本では平安時代に禁術として使う者ならば容赦なく弾圧されるっちゅーわけで、この香水も虫のため」

ヒュ、と、水瀬の口が鳴る。

微かに聞こえる口笛は、合図だった。

荒涼とした大地に数百もの穴、その穴の数に準じて蛇が顔を出し、上空には羽音を響かせ、蜂の軍勢が現れた。

「どうするよ？ 『魔女』」

「『コノ、テイド…』」

忌々しそくに顔を歪めて『魔女』は三六〇度へと波動を放つ。殺意と破壊に彩らされた漆黒は瞬く間に空中の蜂を砕き、地を這う蛇を塵へと還していく。

「『ヨワイ、ナ』」

「しゃーないじゃん」。『訓練』させた虫たちならまだしも、野生の奴らを使役すること自体非常に高度テクなんやで。って、聞いてねえな」

水瀬は拗ねたように顔を顰めると、一枚の術符を取り出す。

「ま、これで終いや」

ピンと弾くように術符を『魔女』に向けて放つが、所詮は紙。直ぐに勢いを失った紙はヘラヘラと力なく水瀬と『魔女』の足下に不時着する。それを見た『魔女』は苛立ちを露わにして、術符を踏みにじった。

「『キサマ、ナンノ…、マネダ』」

「そんな怖い顔しなさんな、せつかくの術符、グチャグチャにしちやってまあ…」

水瀬光輝は『魔女』に臆することもなく。

水瀬光輝は『魔女』に脅えることもなく。

堂々と、告げる。

「何のために美鈴ちゃんコケにして、極秘が基本路線の術式講座まで開講してあげてここまでジャスト二〇分も『時間稼ぎ』したと、お・も・っ・て・る・ん・で・す・か・ね？」

道化師のように、そして森羅万象を統べる神のように。

「タイムリミット。ジャスト二〇分。終わりや。『魔女』」

瞬間。

踏みにじられた術符を中心に、半径数キロもあるような巨大且つ緻密な魔法陣が現れた。

「『ナ、マサ　　カ、』」

「そのまさかや。『魔女』」

水瀬は回転し始めた莫大な魔法陣を眺めながら、

「美鈴ちゃんが必死に稼いだ二〇分や。この俺様が無駄に思うと思つたか？」

「『　　ツ。コノ、　　テ、イ、ド　　！！』」

ブワツと『魔女』の身体から漆黒のオーラが溢れ出るも。

「無駄や」

オーラはまるで煙草の煙を吸い取る空気清浄機のように、雨の日下水道口へと流れていく雨水のように。完全に魔法陣の中心たる、その『魔女』が踏みにじったたった一枚の術符へと吸い込まれていく。

「せっかくやからワンポイントレッスン！ この魔法陣はな、その魔法陣が捕らえた魔術師の魔力を吸い取って稼働する。つまり。魔

術師の力が大きければ大きいほど破壊力は増す、つちゆくわけや。まあ、どの世界にもありそうな、在り来たりな雰囲気バンバンやけど、俺の美鈴ちゃん傷物にした罪は重い。だから

つべこべ言わんと死んでくれや」

バキンッ！ と、凄まじい爆音と共に魔法陣から雷撃が空中に向かつて打ち出された。幾何学的な文字、魔術的要素の文字、歴史の教科書の写真で見たことがあるような古代文字、見たことも聞いたこともないような意味不明の文字。それらを数万の円が包容している魔法陣は更に回転する。スピードを増し、加速していく電車の車輪のように、ふざけた中学生が回しに回しまくるティーカップのように軽やかに回る。

「存分に食らえや。『魔女』」

天に上がった雷撃が、空の彼方に消えた瞬間、

天から膨大な量の『光の矢』が、魔法陣目掛けて降り注いだ。

SF映画の宇宙戦争で使われるようなレーザー兵器、しかしそんな情弱な存在ではこの『光の矢』を形容することは出来ない。それは太陽を直接見たときの白、あまりに眩しすぎるために白にしか例えることは出来ない。

「フ、ン、コ、ノテ、イ、ド」

何事もないように『魔女』は右腕を上げ、黒の波動を展開させた。吸い取られるならその吸い取りを上回るペースで波動を出せばいい。

言うことだけは簡単だが、実際『魔女』がやっていることは無茶苦茶だ。

普通の魔術師が同じ事をしようとするならば、生命力を一瞬にして枯渇させてしまうだろう。

しかし『魔女』は漆黒の盾を上方へと展開させ、『光の矢』を受け止めようとする。

が。

ギョウジャツ！ と。

右腕が裂けた。しっかりと漆黒の盾は『光の矢』を防いでいるのにも関わらず『魔女』の皮膚が裂け、血が飛ぶ。

だが、そればかりではないかった。

「バカ ナ」

特大の圧力が『魔女』の身体を押し潰しているのだ。『魔女』の腕、足、胸、背、首の骨が軋んでくる。身体が圧縮されていること

極地の憂鬱 2

第十一章 ゼラニウムが咲き誇る花畑で私は願う

消毒液臭い。

目を開けると純白の天井が見えた。

間違いなくここは自分の家でも部屋でも、ない。

「どこ？」

と、一応念のために藤崎美鈴は首を傾げてみる。

案の定返答はないが、ここはどうやら病院の一室らしい。けれど立派で入院料が高い個室ではなく、六人一部屋、大部屋のようで、美鈴に割り当てられているのは一番廊下側のベッドのようだった。

(今、何時だろ…)

周囲の患者さんたちはいなかった。何が起こったか知らないが、皆様揃って出払っているらしい。

美鈴はとりあえず起きあがろうとするも、

「痛ッ」

全身に激痛が走った。

そしてその痛みで思い出す。

(そう言えば、『魔女』とやり合ったんだっ)

痛みから半泣き状態で美鈴は、服の下の身体を首元から覗いてみる。

「…面白い」

絵に描いたようなミイラ人間だった。首から胸に、腹、腕、足。専門的な巻き方で患部を見事に網羅している。だが、やっぱり美鈴はショックだった。例え血生臭い『非日常の世界』の魔術師だとしても、基本的に藤崎美鈴は女の子である。戦いで身体に傷が付くなんて事態はさらにあるのだが、できればそんな事態は避けたかった。けれども今回の戦闘はそう甘いことを言っている暇なんてなかった。

『侵入者』は、頭のこぶ（得物が得物だけに相当の大きさである）を両手で押さえて涙目で床からゾンビのように起き上がった。

進藤ゆかり。

藤崎美鈴と同じ高校の生徒兼美鈴の友達で、いらぬお節介で荒稼ぎしているある種、悪人。つい数日前には、恨みを買って襲撃を受けた程の人物である。そんな彼女は猛烈に「痛った」、いくら私がギャグ課課長だってそんな仕打ちはないんじゃないの！ねえこら聞いてんの！」とかなんとか花瓶で殴られたにも関わらず割と元気に虚空へ向かって抗議しているが、美鈴にはその行動の意味が理解できない。ゆかりはそんな美鈴などお構いなしに『今日の私は怒ってますよオーラ』を撒き散らしてゆかりは虚空に怒鳴り散らしていた。が、美鈴にとってはただのうるさいバカでしか無かったし、思わず忘れてしまいそうになるが基本的にここは病院だ。なので、「ところで。何しに来たの？」

バカを黙らすべく、横槍を入れることにした。

ゆかりはさらにムツとして、

「失礼な。お見舞いに来ちゃダメなわけ？」

「へ〜。何か持ってきたの？」

「何か持つてくる物でもあった？」

「お見舞いの品」

「あゝあ。それならあるわよ〜」

「…」

「何よ、その『どーせまた男の写真でも持つてきたんでしょ？』的な目は？」

「さあ」

「ふんだ。友達に冷たいから『交通事故に遭う』のよ」

「…」

どうやら『日常の世界』では藤崎美鈴は『交通事故に遭った』という事になっていられるらしい。あらかた水瀬光輝の法螺吹きという名の情報統制の結果だろう。確かに全身包帯だらけで、どこからど

う見てもミイラ人間なのだから『不注意で事故っちゃいました』あははは』とか何とか言つとけば何も知らない彼女ら『日常の世界』の人間たちは納得するだろうし、『繁華街で街の存亡を賭けた魔術戦争に参戦してました』なんて言つた瞬間には即刻精神科送りにされてしまいそうな匂いがプンプンするのでひとまず事故にあつたことにしようと思つて決めた。

「それにしても派手に吹っ飛ばされたわねえ」

ニヤニヤとゆかりは舐めるように、腕に巻かれている美鈴の包帯を見る。

「まあね」

確かに何度も派手に吹っ飛ばされましたよ、と。ゆかりが想定している事態と絶対に違つた光景を美鈴は思い出しながら、愛想笑いを浮かべた。

「んでさ、美鈴、せつかく入院して」

「ねえ。なんで一眼レフなんて持ち出してるの？」

いつの間にか、ゆかりの手には黒光りする高級そうな一眼レフカメラが握られていた。ゆかりはギクツと身体を一度大きく震わせた後、カメラを握る手を小刻みに震わせ

(違つ)

即座に状況を把握。

過去の事例と現在の状況を照合。

「武者震い。良い度胸ね」

ボソリと、美鈴は呟く。

「えへへ……。『準茶髪美少女・藤崎美鈴入院ヴァージョン(発音要注意)』の撮影よ！ アンタはウチの主力商品なのツ！ アンタがいないと私の現金収入だって危ないのツ！！ 我が財布の未来とお馬鹿な男共の夢を守るため、美鈴をあんな香水野郎にみすみす渡してなるもんですかああああッ！！！」

キラキラキラキラキラキラ　　ツ、と、獲物の影を捉えたハンターのような、百戦錬磨の夜盗が得物に狙いを付けて浮かれて

いるような不気味な笑みをゆかりは一切隠すことなくその表情に投影する。

「…上等」

美鈴は花瓶を再び手にとって構え、

「ハッ、重傷人がこのゆかり様に勝てると思って？」

おほほほほ、と。絶対脱税している女セレブのように（後に確実に脱税容疑で逮捕され、ワイドショーのネタにされるのが運命である）口元に手を当てて、しかし口元に手を当ててという上品さを演出しているのに、それを根刮ぎ台無しにしてしまうような何々大笑する進藤ゆかり。

対して美鈴は冷静だった。

「手加減、しない」

「あははははははッ！ 重傷人が何をほざく!？」

こうして、二人は激突する。

余談だが。

一眼レフと少女が花瓶に砕かれたのはほんの数分後のお話。

二

「あら。意識戻ったの？ って、なんでそんなにグッタリしてるわけ？」

進藤ゆかりと入れ替わる形で入ってきたのは赤銅色の長い髪を持つ、十二天将・朱雀だった。もちろん彼女は天界の住人で人間ではないので、緊急時や戦時以外は存在と気配隠蔽の術式・不見の術によりその姿を隠している。そんなわけで『日常の世界』の住人は彼女の存在を察知できないのである。

「ホント、アンタ大丈夫なの？ 医者呼んだ方がいい？」

「…気にしないで」

歴戦の疲労でスライムのようにベッドに臥しながら、美鈴はダレ
ーと言う。

《まあ、深くは追及しないけど…。床に散乱してる黒い破片と砕け
たレンズは何？》

「気にしないで」

《それとここでたんごぶいくつも頭に作って失神してるこの
娘は誰？》

「気にしないで」

《そう》

本当に、この大部屋に他の患者さんがいなくて良かったと、本日
何度目かの感覚に美鈴は浸る。

「これこそ。何もいないところに話しかけてれば変人コース確定、
だし」

《美鈴？》

「ん、ああ、何でもない」

朱雀は不思議そうに首を傾げて、

《たぶん知ってると思うけど、あの『虫ケラ野郎』のおかげでアン
タ、交通事故で入院ってことになってるから。ちゃんと話し合わせ
なさいよ？》

「わかってる」

《ま、どうせ一ヶ月は絶対安静なんだからゆっくりしてなさい》

「朱雀」

《どーしたの？》

美鈴は少しだけ俯いて、

「結局、どうなったの？」

美鈴は結末を知らない。

バラバラに分解されてしまったジグソーパズルのような記憶を、
確かな場面と不確かな場面を強引に結びつけて考えてみる。

分かっていることは、最後の一撃を『魔女』に軽々と迎撃された
こと、朱雀が物凄い形相で駆け寄ってきてくれたこと、直後に馬鹿

みたいに巨大な魔法陣を見たこと、そしてその魔法陣の攻撃が凄まじい火力だったこと、最後に道具箱を持った知らない人たちが叫び合っていたのを機にプツリと意識が途切れ、気がついたらベッドの上だったという事。

美鈴は結局『魔女』がどうなったか知らないし、どんな経緯を経てこの病院に担ぎ込まれたかもわからないでいた。

《一から説明した方が良い？》

美鈴は無言で頷く。朱雀はベッドの隣に置いてあった灰色の簡易折り畳み式パイプ椅子を素早く手慣れた様子で組み立てると、ドカツと無神経に座った。

《結果として、あんたが吹っ飛ばされて気絶してる間に二〇分が経過、一番おいしいところを虫けら野郎に取られちゃったってわけ》

朱雀が言う『虫けら野郎』はきつと水瀬光輝のことだろうな、と美鈴は思いながら投げ遣り気味の説明を引き続き聞く。

《『魔女』は結果として駆けつけてきた東洋陣営の部隊に拘束されたわ。まあ、あくまで『魔女本人』だけどね》

「『魔女本人』って何？」

《『魔女』が『魔女』たる所以。アンタも『魔女』のべらぼうな力見たでしょ？ 身柄拘束した東洋陣営の話だと、あの化け物みたいな力が『魔女本人』から消えちゃったのよ。だから今はただの人間になっちゃったってわけ。それでも普通なら日常世界の住人・魔術師プロとか関係無しに一度でも魔術使ったらその痕跡、シロウト魔力を練り上げた痕跡は確実にその身体に刻まれるはずなのにそれもなし》
例えば、『魔女』という一個体がいるとする。

仮に『魔女』を構成するために必要な物質を二つに分けたと考えると、『魔女』という人間、これを『魔女本人』とする。

仮に『魔女』を構成するために必要な物質を二つに分けたと考えると、『魔女』の力の根源、これを『魔女本体』とする。

朱雀の説明によると、『魔女』の死体からは『魔女』を構成していた物質の一つ『魔女本人』から『魔女』の力の根源である『魔女

本体』が喪失していた、そういうことになる。

「ありえない」

というか、それ以前に意味が分からない。
だってそうだ。

魔力は人間の生命力から生まれる物。

生命力とは人間が生きるための燃料。

人間から生命力を取れば、それは死だ。

だから、ありえないのだ。

生きている人間に傷一つ付けずに心臓を抜き出すこと。

まさに、それだ。

では、生きている人間から心臓を抜き出してそのまま生きていく
のだろうか。

無理だ。

では、生きている人間から脳髓を抜き出してそのまま生きていく
のだろうか。

やっぱり無理だ。

「魔力は人間の生命をちょっとだけ借りて創り上げるモノ。人間と
生命を切り離すことは出来ない。だって生命は人間が生きていくた
めに最低限必要な燃料であり、人間の核でもある。『人間』は『生
命』を入れる器。だから人間と生命は一心同体。いくら燃料、核つ
て言ったって外から注ぎ足すことなんて出来ないし、手術のように
摘出なんて出来るはずもない。仮に出来たとしても、そんなことし
たら人間は確実に死ぬ」

人の死は、燃料たる生命の枯渇が原因だ。もちろん、直接生命を
枯渇させる原因は老衰や、ガンなどの病気である。

《確かにアンタの言う通り、ありえないのよね〜。だってそしたら
『生命だけがあたかも自分の意志を持って器たる人間から離脱した』
ってことになるもんねえ…》

朱雀の言葉を受け、さらに美鈴は考える。

何度も言うようだが、人間と生命は一心同体だ。

人間の意志が生命の意志であり、生命の意志が人間の意志だ。

生命が自我を持つ事なんて、ありえない。もし仮にそんなことが実証されたならば、この『非日常の世界』の根本を揺るがすことになつてしまう。

朱雀はそんな美鈴の思考を読んだのか、

《ま、参考までに東洋陣営の見解をいくつか上げると…》
人差し指を立てて、

《一つ目は『魔女本体』は自我を持っていて、『魔女本人』に寄生して破壊活動を行わせた》

もう一本追加、中指を立てて、

《二つ目は何らかの意志を持った人間の意識が『魔女本人』に寄生して半ば夢遊病のような状態に置かされて破壊活動を行った》

最後にもう一本、薬指を立てた。

《三つ目は催眠効果を持つ術式を扱う人間が『魔女本人』に催眠をかけ、ありえない力を発揮させるようにプログラムした上で破壊活動に及んだ》

「どれも、現実味がないし、魔力を練った痕跡がないってことを証明できない」

バツサリと、容赦なく断罪した美鈴に朱雀は苦笑いを浮かべ、

《まあねえ〜。『魔女本体』 生命が自我なんて持つわけない

し、他人の意識に侵入してその上で更に自在に操る術式なんて優秀な魔術師何百人集めて何十日夜通しの儀式おこなわなきゃならないのですか、って話だし、ましてや催眠、それにプラスして自在に操るなんて…。エセ霊媒師じゃないんだからたぶん意識に侵入して操る術式より高度テクよ、絶対》

「で。その拘束された『魔女本人』はどうなるの？」

《さあね。尋問されるんじゃないのかしら？ と言つてもあの魔女専用魔法陣が思いの外の威力で『魔女本人』さんが口をきけるように回復するまでには半年以上かかるらしいから、尋問は遅れるでしょうね。仮に尋問になつたとしてももう彼女は重要参考人だから東

美鈴はつまらなそうに笑う。

「確かに私が戦ってたとき朱雀は傍にいなかった。でも私が『魔女』と対峙していたとき。結果的に失敗したけど最後に渾身の一撃を放とうとしたとき、援護してくれた。それに吹き飛ばされたときだつて駆け寄ってきてくれた」

動かない右手を強引に朱雀の頭に持つて行き、

「あの時の援護がなかったら。確実に私は死んでた。生きてたとしてもこんな程度じゃ済まなかった。朱雀が駆け寄ってきてくれなかったら孤独死してたかもしれない」

笑いながら右手でワシワシと朱雀の長い赤銅色の髪を掻き回す。

「だから。朱雀は私を十分護った」

朱雀は僅かに痛みを受けたような、少し辛そうな顔をした。

《美鈴…》

美鈴は知っている。

感情を隠せる人物だつてことを。

だから、続けた。

「私が護られた、そう思っていればいい。例え腕一本失ったとしても綺麗事かも知れないけど、これは間違いなく今の自分の本心だから。」

「護るってことは、何も物理的なことが全てじゃないんだから」

朱雀にはいつも精神的に護られてる、と。そう心の中で呟いて、
「で。相談なんだけどここに置いてあった花瓶。』とある事故』で割れちゃったけど。弁償したくないから適当に盗んできてほしい」

へ？ と一度は鳩が豆鉄砲を食ったような顔をするものの、すぐにいつも通り適当に笑って、

《しょうがない、わね》

グイツと目を乱暴に拭い、朱雀はパイプ椅子から立ち上がる。

《じゃ。ちよっくら出てくるわ》

「よろしく」

美鈴は思う。

この何気ない会話ですら、自分はきつと朱雀に護られているんだなあ、と。

願わくば、この何気ない会話が出来ただけ長く続けられますように。

願わくば、この何気ない関係が出来ただけ長く続けられますように。

美鈴は朱雀の華麗な後ろ姿を見ながら、願っていた。

エピソード

「さて。私は貴方を処分しなければなりませんね」

都心のとある高級ホテル。オレンジ色の夕焼け映る巨大な窓をバックに、キツネ顔の男が未処理の書類が山積みとなつているデスクを前にして鎮座していた。

「結界班は宰相であるこの私直属の部隊。貴方が動かしているほど、組織にとって軽い存在ではないのです。分かりますね？」

罪人を諭す警官のように、キツネ顔は続ける。

「例え、藤崎美鈴を救うためであっても、です」

キツネ顔の男はクスクスと含み気味に笑っていた。

「なぜ、そう思ったのです？」

「簡単ですよ。西洋陣営からの『我が主よ、何故私をお見捨てになつたのですか（エリ・エリ・レマ・サバタクニ）』を崩壊させた罪人を引き渡せ』との要求が我が陣営に突き付けられたことを知っているのは【世界呪術文化保護連盟最高意志決定機関・大老会】と宰相であるこの私。そして貴方もです。水瀬光輝」

チツ、と水瀬光輝は密かに舌打ちする。キツネ顔の男の笑いは、水瀬にとつてとてもイライラする笑い方だった。

「当然。【大老会】は組織の構成員である闇夜棘路を引き渡すわけにはいきません。しかし、これで要求を断れば西洋が我が方に戦争を仕掛けてくる絶好の口実を与えてしまうことになり、対応によっては即座に戦争となります。いくら七年前の大敗から立ち直った我が陣営とて、今、西洋と戦争するのは得策ではありません」

しかし。

「組織内の闇夜棘路を罪人として引き渡せなくとも、組織外の藤崎

美鈴を罪人として引き渡すことができます。組織的な見解をお話しますと、組織外の藤崎美鈴はどうでもいい存在。彼女の命を差し出し、それで戦争が回避できるなら、喜んで我が陣営は藤崎美鈴の首を差し出しましょう。例えそれが藤崎夫妻のご子息であっても、ね。しかし、貴方はそれを良しとしなかった。貴方にとって、藤崎美鈴は簡単に見捨てられるような存在じゃなかった」

無邪気に、純粹に、目笑を。

「実際。貴方でしたら今【大老会】で何が問題にされ、何が話し合われているかなど、容易に掴めるはずです。だから、貴方は藤崎美鈴を護ろうと動き出した」

「…、俺がそんなにエライ人間だと、思われますか？」

「貴方はそういう人間です。事実、貴方は【大老会】に働きかけていた。それが買収と呼ばれても可笑しくないような手段まで用いてね」

ニヤリ、と。キツネ顔が笑う。

「しかし、貴方が動き出したときにはもう遅かった。今の組織力で西洋に勝てると考える愚者は【大老会】にはいませんし、組織外の人間を生け贄に差し出すことを躊躇してしまうほど感情的な人間もいません」

「…」

「そんなとき、まさに『見計らったようなタイミング』で『魔女』がインド支部を壊滅させてしまいました。この事実は即座に【大老会】と私、そして貴方にも伝わった。しかし、インド支部が壊滅したという情報が広がることを極端に恐れた。まあ、無理もありません。この『インド支部壊滅の情報』が組織全体に広がれば大混乱になりますし、西洋がこの混乱に乗じて攻め入ってくるかも知れません。『我が主よ、何故私をお見捨てになったのですか（エリ・エリ・レマ・サバタクニ）』の仇』という名目でね。故に鉗口令を我々に科したのです。つまり。この『魔女』出現・インド支部壊滅は我らしか知り得ない情報、それを貴方は利用した。藤崎美鈴を【世

界呪術文化保護連盟】にとって有用な存在だと【大老会】の面々に知らしめるためにね。さすがの【大老会】も支部一つ壊滅させた謎の存在を、…仮に我が組織の協力を得て倒したとしても、その有益さを認めざるを得なくなる」

「それは宰相様の推測でしょう?」

苛立ちを僅かに表情に映して、水瀬は吐き捨てた。それでもキツネ顔は全く意とせずには笑っている。

「ええ。私の推測です。ですが情報を受け取り、なおかつ宰相直属の結界班を『宰相様の指示だ』と偽って動かせる人間は貴方しかいませんし、彼女を護ろうと考える人間は私が知る限り、貴方しかないのですよ。【世界呪術文化保護連盟・対西洋戦略参謀本部長】水瀬光輝」

キツネ顔は更に笑みを深くする。しかし、その笑みはいままでとは違う。込められている感情はまさしく『皮肉』そのもの、そんな歪んだ笑みだった。

「それは宰相様が組織を把握していらっしやらないのに他ならないのでは?」

「そうかも知れませんが」

返された皮肉にも全く動じず、

「しかし結果として【大老会】内部で『藤崎美鈴を西洋に差し出す』という選択肢はなくなりました。何せ我が陣営の魔術師二〇〇名を擁するインド支部を壊滅させた『魔女』とたった一人で渡り合った。これほど有能な攻撃の手札であると分かった以上【大老会】は彼女を切り捨てるほど患者の集団ではありませんしね。では、これを」

サラサラと書類の一枚に署名し、キツネ顔の宰相は水瀬にその一枚を手渡した。

「…これは?」

「処分です。本来私の命令でしか動かせない結界班を勝手に貴方は動かした。これは組織の一部を私物化しようとする、組織として断

じて許されない行為です」

「『断じて許されぬ行為』なのに、どうして『本部に三日間の軟禁程度で済むんです？ 些か処分が寛大すぎやしませんか？』」

「さあ。私はそれが適切な処罰だと考えていますので」

サラッと、そのキツネ顔宰相の言葉をあろう事か水瀬光輝は嘲笑う。

「どうだか。対西洋の核たる俺を組織から外すことなんて出来ないからでしょう？」

「 All the world's a stage, And all the men and women merely players. この世は全て舞台、男も女も役者に過ぎない。結局、私も貴方の掌で踊らされていた、だけですか…。」

まあ。その三日間で我が東洋の權益を損なわず、尚かつ平和的な競争回避のシナリオでも描いておいてください。これは対西洋戦略の要たる貴方の仕事です」

「了解です。宰相様」

飄々と水瀬は笑うと、その書類を水瀬は乱暴に懐に突っ込み、形式だけの一礼してから背を向ける。

「ああ、一つ忠告しておきます」

ピタリと、水瀬光輝は足を止める。

「想っているだけでは何も進展しませんよ？」

水瀬は何も答えない。

ただその一瞬、コマ数秒間。

キツネ顔宰相を背にして。

水瀬の飄々とした表情が消え失せた。

それは仮面を外したような。絶望でも驚愕でもなく。色も感情も全て消え失せてしまった真つ白な能面のような表情を映していた。けれど、それはほんの一瞬だけ。

「ご忠告、感謝します」

水瀬はすぐに表情を取り戻す。

いつもの飄々とした表情を戻し、何事も無かったように歩き出した。

—

少女は。

ずっと、思っていた。

遠くに聞こえる、この冷淡で単調な電子音の波長は。

いったい何だろう、と。

そして。

自身を拘束するように貼り付けてある『それ』は。

いったい何だろう、と。

自身を取り囲むように配置されている『それ』は。

いったい何だろう、と。

思っていた。

けれども。

今。

この瞬間。

初めて。

『何だろう』ではなく。

『誰だろつ』と。
思った。

深淵に沈むこの意識に語りかけてくる者は。
誰だろつ、と。

それは冷たい。

冷えた意識。

渦巻く怒り、憎しみ。

ワ…、ゾ…ム。

雷鳴のように、地響きのように低い声。

ワレ…、ノ、ム。

視界は、闇。

吸い込まれてしまうような、絶望と憎しみに塗れた闇。

ワレ、ノゾム。

はつきりと聞こえる。

『ワレ。 キサマヲ、ノゾム』

闇は、言う。

『ワレ…、セカイヲ、スクウモノ』

闇が、蠢く。

『オマエニ、ジユウヲ、アタエヨウ』

闇が、形を変える。

『ワガ、…チカラヲ、モツテ』

闇が、人のような、形を描く。

『 オマエヲ、イヤソウ。ノゾミヲ、カナエヨウ』

少女の、指が、僅かに動く。

『ワレハ、キサマヲ…、ウツワヲ、モト、メル』

彼女の手首に、銀が煌めく。

『オマエハ、ツタエタイ、ト ネガウ』

うつすらと、僅かに少女の臉が震える。

『モトメヨ。ソシテ、ネガエ。 オモイヲ、ツタエタイノナラ』

この瞬間、少女は目を醒ます。

同時に。
彼女がこの世界の裏に巻き込まれた瞬間でもあった。

了

後書き

投稿時間的にこんにちは。

では、他の時間に読んで下さった読者様のために、

おはようございます。

こんばんは。

お休みなさい。

と、一通り全時間帯を考慮してみました。

鑄金ダラです。

本作は記念すべき連載第二作目です。何だかんだで完成まで二ヶ月要しました。前作同様、とりあえず小生意気にも「小説は後書きまでが小説」って無駄な信念(?) 持ってたりますんで別枠に後書きを設けさせていただきます。ちなみにですが、これは本編とは一切切パーフェクトに関係御座いませぬのであしからずあしからず。また、以下、強烈なネタバレです。ご注意下さいませ。

さてさて、暴露話(?) を。

前作とリンクした本作。今作は藤崎美鈴・朱雀ペアに主人公ヅラしてもらいました。前作同様なかなか受難でなかなか流血しておりますが、彼女たちのコンセプトは「矛盾と不安定」です。殺すって言ったり死は見たくないって言ったり。潰したいっていつたり守りたいって言ったり。今作中ではそのコンセプトを存分に出来るように努力してみました。果たして読み取っていただけただかどうか…。なお余談で御座いますが、実は「もう一組」と対になってたりします。

そして忘れちゃならないのが今回のキーパーソン、水瀬光輝さん。彼のしゃべり口、あれわざとですから。適当関西弁擬き。アレはあくまで『わざと』やっています。故意に適当に相容れぬ西と東の言葉を掛け合わせた(若干西が強すぎる感もあつたけれど)喋り方する人物ってどんなかなあ〜って生まれた方なんです。こ

れは、言い訳じゃありませんよ？ と、話を戻して戻して。彼には多少のフォローしかなくて今回は完全に嫌われ者に徹してもらいました。ちゃんとした彼のフォローは後々に。ちなみに『エピソード』にてフラグ立てさせて頂きましたが…、さてさて実るのか実らぬか相手は非常に手強いんじゃないかなあ〜と。個人的には中々美味しいヤツだと自己満足全開の好感を抱いているわけなんですけどね。

また、前作の『日常』不足を解消すべく、少し日常シーン+コメディシーンを入れてみました。日常シーンは、なんか難しかった大変だった難儀だった。バイオレンスなシーンは少なからず何とかなっているもの（何とかなつてねえよって言われたらホントどうしようと本気で悩んでる今日この頃だったりしないでもない

アレ？ なんか前回もこんなこと言ったような気がする…）日常のほのぼののシーンはどうも書き慣れていないらしく、リアルに大変難儀だったです。何度手を止めたことか（遠い目）てか、なんかこう日常シーンに難儀しているとなんか、人間が見透かされそうな気がしてならない今日この頃。でも、今回のコメディシーン、面白い面白くないを別にして楽しかった。なんかキャラ破壊するの楽しい特に前回はシリアス一辺倒で、真面目なこと（？）しか奴らがバカやってるの、面白いと個人的にツボってました。 まあ、アレです。寒いことは重々承知しているつもりですので…。

では話を変えて、オカルト方面へ。

まず、拙作に登場するオカルトの類、全て名実通りではありません。かなり適当です。作者の独断と偏見満載です。つまり作中で登場する陰陽師は全く完全完璧はったりです。事実から激しき逸脱脱線崩壊してます。なので拙作を読んで「陰陽師ってこんななんだ〜」とはどうか思わないでください。

ですが、さすがにこれじゃマズイだろと思いつたわけで、本作には多少ですが陰陽道について触れてみました。アレです、『五行相生』と『五行相克』の話です。これでいろいろ誤魔化したかなあ〜という下心があったりなかったり。

と、魔術ネタに関する言い訳はさておき、伏線の一つ、というか本作最大級を…、回…、収…、してみました(?)回収しきれない気もしないでも無かったりしますが、とりあえず『ユリアス』絡みは今のところアレが限界かと。しかも結構遠回し。やっぱりもつと読者様に優しい話を目指さんと駄目かなあ〜と痛感。また『ユリアス』絡み異常に遠回しだったのが『天帝』さんたち。二話に渡つての種明かしでしたが、分かっていただけたでしょうか?

では、最後にシリーズ全体について。拙作『極地の憂鬱2』はシリーズ物のウチの一作です。てか、ここで終われば詐欺です。消化不良もいいところです。ということと若干の次回予告。次回作は『極地1』と『極地2』で直接スポットを当てられなかった、主人公たちから見ると敵対的なポジションに置かれていた西洋にスポットを当ててみようかと。以上、次回予告でした。

さて、一通り言い訳したところで、私信じみたことを。

毎度毎度我が下らぬ愚痴に付き合ってくれる心優しき『キミ』、こないだはリオーナ¹オルフェニスタの名前考えてくれて本当にマジでありがとね。マジで普通にストライクだったんで速攻で採用させていただきました次第です。そしてそして『ラグナロク』関連では本当にお世話になりました。貴公のアイディアには脱帽です。さらにさらに今回のコメディーションは『キミ』のも多少参考にしてみました(二割三分五厘程度だけ…)。だから「パクツてんじやねえよ三下が」って言わないでね。僕はこう見えても非常に繊細&病弱な人間なのだから。『キミ』の暴言一つで絶滅してしまうんだ、ボクは。てか、普段から大切に、それこそ世界遺産や絶滅危惧種を保護するくらいの心構えで接していただければなあ〜と思ってみたり思わなかったことなんて無かったはずだったようであったりするから怖いと思ったわけではないかも知れなかったんだけれどね(意味不明)つーか、それ以前に本当にリアルで君は全分野において非凡な人間なんだな。そんな君には凡骨以下以下以下以下…(略)の俺から羨望と嫉妬を漏れなく含んだ絶大強大凶悪なる『この

文を読んだ翌日にどこかの階段で転けてしまう』呪いをプレゼント
まへ。
ツ！！ 是非ともコケて翌日絆創膏を顔に貼って来てくれた

また、日頃から非常にお世話になってます貴重な友人（怒られな
いかどうか戦々恐々ながら『友人』と言ってみる…）水菜さんへ。
本当にあなた様のご意見ご感想は貴重です。どうかこれからもお付
き合い願っています。この場を借りまして激的な感謝と土下座を。
本当にありがとうございます。そんなでもってこれからもよろしく
お願いしますね。水菜さんは私に到底真似できない技術の保持者な
ので多々影響を受けてますがそこところは許していただければな
あ〜と、妄想してみたりもします。それともこんなこと言っていない
でここで水瀬さんの作品宣伝したほうがいいのか…？

そんなこんなで。

最後にここまで読んで下さった読者様、本当に感謝です。この場
を借りて御礼申し上げます。

では。

皆様の心の片隅にでもこの話が残ったらいいなあ〜と妄想を抱き
つつ、

この辺で筆を置かせていただきます。

ではでは m (((m

P・S 誤字脱字等が御座いましたらお気軽にメッセージにてお
知らせいただくと幸いです m (((m

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

PDF小説ネット発足にあたって

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3668c/>

極地の憂鬱 2

2009年3月24日10時10分発行